
誰より優しく

天川充

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰より優しく

【Nコード】

N0442M

【作者名】

天川 充

【あらすじ】

大学4年の春、宗治は人生最大のイベントに立ち向かっていた。就職試験という高い壁。新卒という切符を逃しては厳しい現実に向ふことになる。

就職活動は孤独じゃない。たくさんの支えてくれる人がいて、支えるべき人がいる。恋愛、友情、裏切り、嫉妬、疑念……。それらの試練を乗り越えて大人になっていく。辛いとき、悲しいときいつもそばにいてくれたのは君だった。楽しいとき、嬉しいとき一緒に笑ってくれたのも君だった。信じられる相手はあなたにはいますか

？信じてくれる人はあなたにはいますか？

宗治にとっていつも欲しい言葉をくれたのは親友の中傷的ながら真に迫ってくる一言だった。いつもネガティブで言い訳ばかりで自分に自信がなくて、それでも愛してくれたのは君だった。誰に言われるわけでもなく、誰に言うわけでもなくいつも優しさを与えることってこんなに難しいことで大切なことだったんだね。本当の優しさはいつもここにあって、押し付けでも偽善でもなかった。奇麗事と言われるかもしれないけれど、それがいつか自分自身に帰ってくると信じて与えていたんだ。君の笑顔が見たいから。

就活は人を成長させる。自分を信じること、素直になること、誰かのためにしてあげること。どんな人間になりたいのか。自分に自信のない人が他人を信じられるわけがない。自分が大嫌いだという人間にチームに加えたくない。仲間としてどう見るか。入社してこの人と一緒にすごすことが楽しいのかどうか。それを判断する場所が就活であり、それはそのまま生きることの意味も教えてくれる。自分自身を探す旅。それが就職活動なのだ。

就職活動を題材にしたとおきの青春小説。本当に大切なものは何なのか。本当に必要な人は誰なのか。大きな挫折だったり恋愛模様だったりここで描かれている物語は真に迫ってくる。大人になっていく上で必要なメッセージを問いかけてくれる作品。これから就職活動に挑む人、あの頃の青春を思い出したい人、純愛を楽しみたい人、自分の生き方を迷っている人に是非一読してもらいたい。

シューカツ

誰より優しく

シューカツ

長かった冬が終わりを告げようとしている。桜の蕾がちらほらと芽を出し、嵐のような風とともに気温は上昇を続ける。電車の中では袴や着物姿の男女が目につく。入学式へ行くところだろうか。母親と見られるいつもの倍以上の化粧で若さをアピールしている女性とひそひそ話をしている。

四ツ谷駅のホームに降りると教会の鐘の音が聞こえた。先ほどの女学生はどうやらここで晴れの舞台に立つようだ。大学を目の前にして目を輝かせている。自分にもこんなに輝いているときがあっただろうか。草野宗治は自分の胸に手を当てて聞いてみる。この一年、何もしてこなかったわけじゃない。どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

宗治の通う大学はまだ春休み期間中で、キャンパスを覗いたところで入学式に参加する学生とその親御さん、それに就職課を訪れる大学四年生の姿しか見えない。慣れないリクルートスーツを着込んで心身ともに疲れ切った表情で大学と企業を行き来する。そんな中の一人に宗治もいた。

「おう宇治、遅かったじゃんか。その顔だとまたダメだったみたいだな」

大学近くのカフェに入って最初に声をかけてきたのは円谷斗真。ゼミのリーダー的存在で全国紙の記者を目指す優等生だ。普段はへらへら能天気であるが、いざ集中すると右に出るものはいない。バスケット部に所属するスポーツマンで、180センチを超える長身もあって女子からは人気があった。

「相変わらず斗真君は呑気だね。明日慶朝新聞の筆記なんでしょ？
勉強しなくていいの」

「いいのいいの。前日に焦って勉強するようなやつじゃ受かりっこ
ないから。俺のほうは完璧だし」

大橋容子の心配そうに見つめる視線をさらっと交わすのも斗真にと
ってはいつものことだった。容子とは大学一年の頃から付き合っ
ていたが、いつもこんな調子で振り回している。そんな容子はお世辞
にも美人とは言えないが、誰にでも優しく少し心配性なところがあ
った。肩まで伸びた真っ黒な髪は癖っ毛で油断すると丸まってしま
うので、指で丸まった髪をまっすぐに伸ばすのが彼女の癖となっ
ている。

「宗治も斗真くらい余裕があつたらよかつたのにな。余計なこと考
えすぎなんだよ、宗治は」

「いつも緊張で紅潮しちゃうのが欠点だもんな。頭はいいのにもっ
たいない」

大柄な柔道部部長の大隈武が冗談まじりに宗治の背中を叩いてびく
つと反応すると、この場にいる仲間たちはお腹を抱えて大声で笑っ
た。今にもボタンがはちきれんといわんばかりのリクルートスーツ
大隈は公務員試験までまだ日があるためか、焦りや不安というもの
は全くないといった様子で冗談をかますのが好きだった。

「でも宗ちゃんはやればできる子だもんね。ほのかは信じてるよ」
「……ありがとう」

「なんだよ。そう言った傍から真っ赤じゃんか」
「うるさいなあ。ほつといてくれよ」

どつと笑いが起こった。星川ほのかはそんな宗治を見てアイコン
タクトを送っている。宗治とほのかは小学校の頃からの幼馴染で、
ほのかはいつまでも宗治を子ども扱いしていた。ほのかはそこら辺
の芸能人と比べても遜色のないくらい美人で男子に人気があつた
が、天然で抜けたところがある。大学生にもなってかわいい犬を見
て追いかけて迷子になったことはほくたちの間で語り草となってい

た。

「けどどうするの？ 宗治はマスコミ志望だったよね。ほかの企業よりも何十倍、何百倍も倍率は高い。そんなあがり症じゃマスコミでやってくことなんて無理なんじゃないか。僕の計算によると八〇%以上の確率で君はこのままどこにも内定がもらえずに卒業することになるよ」

「そんなのわかってる。けど俺にはこの道しかないんだ」

ぼくらのグループの中でも理屈っぽさが目立つ青いフレームの眼鏡がトレードマークの青山浩太の癪に障るごたくは実は一番胸が痛むことだった。ぼくらのグループの中で唯一理系の理工学部に在籍する浩太は正論しか言わない。それが時々むかつくこともあったが、凶星なので反論する気にもならなかった。

宗治たちのグループ六人はばらばらな性格ながらも意気投合し、週に一回はこのカフェに集まってお互いの近況を報告していた。中身はほとんど雑談に近いものではあったが、同じ大学の四年生ということもあって気持ちを安定させる鎮静剤の役割も果たしているのである。

「いけない。俺これからスポジャの受付面接なんだ。また来週」

腕時計を見て慌てて手を振り、宗治は挨拶もそこに財布から千円札を取り出してテーブルに置いてカフェを後にした。出て行くのを見送るみんなを見て、なんだか少し宗治は物寂しさを覚えていた。

スポーツ新聞社の大手・スポーツジャパンの東京本社がJR京葉線の越中島駅から降りて少し歩いたところにあった。途中に海洋大学が見え、歩道橋を渡った先にある。ここは関東スポーツ新聞社も中に入っており、スポーツ新聞社が二社共存するという奇妙な構造を呈している。

満開に咲いた桜並木を横切り社内に入ると、宗治は案内された椅子で待機した。スポジャは書類選考を兼ねてそれを基にした受付面接によって最初の選考が行われるのだ。さすがは新聞社。同じく待

機している受験者すべてが自分より優秀に見えてくる。

胸を張り眼鏡の奥底には秘めたる闘志を感じさせるすらつとした体型をした男性、育ちのよさそうな整った顔立ちとピンク色のシャツが似合う女子学生、エントリーシートを何度も読み直し万全の態勢を最後まで崩そうとしない小柄な女子……。ここにいるみんなよりも一歩リードなくては勝てないのだ。宗治は掌に汗をかくのをぐつとこらえて落ち着かせるために深く深呼吸をした。

自分の受験番号が呼ばれるといくつかある面接ブースの指定されたところに行き挨拶をする。受験番号、大学名、名前を名乗ると座ってくださいという合図があった。二人の面接官は渡されたエントリーシートを眺めながら宗治に質問をぶつけていく。

「当社に応募した動機は何ですか？ また何をやりたいですか？」

「私は競馬が好きでブログやHPで自分の予想を公開してきました。ギャンブルは一般にマイナスイメージが強いですが、私はそのイメージを変え魅力を伝えていきたい。予想やコラムで娯楽のイメージを高めていきたいんです」

まるで頭の中にメモでも取るように下を向きながらたどたどしい日本語を連ねているのが自分でもわかっていた。面接官は表情を崩そうともせずそれがなんとも不気味だった。

「なるほど。ではその魅力を伝えるためにどうすればいいと思いますか？」

「競馬はほかのギャンブルと違って、スポーツ性や娯楽性など複数の魅力を持ったギャンブルです。ギャンブルがマイナスイメージなのはお金に汚いというのがあるからだと思います。日本人は特にそのイメージが強い。お金儲けだけじゃないんだよという側面を見せていけばファンは増えると思います。御社は田島記者のコラムなどそういうのに強いと思っています」

宗治は声が上ずりながら面接官の顔色を窺うように話していた。入りたいという想いは伝わっているだろうか。話の筋は通っているだろうか。緊張と慣れない空気で心臓が破裂しそうだった。自分の

手ごたえを確認するような余裕はない。かたかたと動く面接官のチエックするペンの音が遠くから聞こえてくるようだ。自己PRでは考えてきて丸暗記された文章を頭の中で思い出しながらゆっくりつかえてしゃべる。突っ込まれると予期せぬ出来事に動揺してしまう。ものの十分あるかないかの面接の中で宗治にとっては一時間にも二時間にも感じていた。

帰り道、丸まった背中中で歩く宗治はケータイでメールをチェックした。エントリーシートに筆記試験に面接の結果。五通あるうち四通の文面には残念ながらの文字が躍っていた。残りの一通はほぼ全員通過の書類選考による筆記試験のお知らせ。

不合格通知に今後のご健勝をお祈りいたしますなんて見え透いた慰めの言葉はいらない。就職活動で失敗することは自分の人間性に失格の烙印を押されているようで怖かった。自分には社会に居場所がない。見えない未来、孤独への恐怖感が宗治の心を狭くした。このままでもいいのだろうか。寂しさに揺られて誰もいない公園でたそがれていると、斗真から電話がかかってきた。

「おう、宗治。元気か？」

いつもの調子のいい声は道行く車の走行音によってかき消された。

「なんだよ、こっちはお前と話す気分じゃないんだ」

「まあそう言うなって。その様子だとダメだったみたいだな」

「……俺さ、もうダメかもしれないわ」

宗治がぼそつと弱音を吐くのをただ黙ってうなずく斗真がいた。さすがはリーダーである。斗真がみんなに好かれるのもこの性格だからなのだろう。否定ひとつせず受け止める姿勢は見習わなくちゃいけないのかもしれない。

「俺もさ、毎日不安だよ。優等生なんて勝手にもてはやされてプレッシャーかけられて。どこにも受かんなかったらどうしようとか眠れない夜もある。誰だって不安を抱えてるんだし、宗治は宗治のままでいいんじゃないかな。ただお前は自分を信じる気持ちが足りないんだよ」

斗真は穏やかな口調で言う。優等生から発せられる嘆きは一般人から発せられるそれよりもどこか説得力を帯びて威力を増す。

「……自分を信じる？」

目を丸くした宗治は言葉の意味を理解できずに自信のない言葉を漏らした。春風が吹き荒れて何か心の中のわだかまりをより一層切なくしているようだ。

「そう。自信がないから失敗のイメージが先行する。自信がないから周りのライバルが気になる。自信がないから誰かを羨む。けどさ、そんな自信が持てないやつを仲間に入れようと思うか？ 自分たちのチームとして受け入れたいと思うか？ そういうことなんだよ、就職って。もちろん仕事ができるかってのもあるけど、一番は一緒に働きたいかどうかを判断される場所。宗治にもきつと見つかるさ。そういうふうに受け入れてくれる場所が。って臭かったかな？」

電話越しに斗真が照れる姿が容易に浮かんた。宗治の目頭には大粒の涙がたまっていた。心配して電話をかけてくれる人がいる。明日試験だというのに自分のことを省みず言葉をかけてくれる人がいる。宗治にはただそれが嬉しかった。一言ありがとうと言うと電話を切り、また立ち上がるうという意欲が湧いてきたのである。

一週間後に届いたスポジャからのメールは予想通り不合格。宗治は当落に一喜一憂するよりも目先の対策に専念する。ニュースダイジェストという月刊誌を開いて筆記対策としては自己分析を洗い直してより自分をわかってもらえるような自己PRを作成する。今まで闇雲に気になるところすべてに書きなぐりに出していたエントリーシートも的を絞ってそこに集中することで自分を追い込んだ。

ぼくらのグループからは誰かしらのメールが送られてくる。結果報告と何かしらの愚痴。シューカツは自分自身との戦い。それはわかっていても誰かに話を聞いてもらうことで安心できる。不安でしようなない気持ちをし少しでも取り除いてくれる仲間の力はかけがえない財産だった。

あれほど綺麗に咲き誇っていた花びらも散り葉桜へと変容を遂げる頃、東京ドームが見える水道橋駅に宗治は降り立っていた。承保大学で行われる筆記試験に臨むためだ。王手出版社の城南社や中学館や登壇社をはじめとする筆記試験は二、三月にすでに終了しており、宗治も当然のことながらその書類選考や筆記試験でふり落とされていた。それだけに一戦一戦がラストチャンスのもりで挑んでいた。

新鋭社の受験者数はざっと六百人といったところだろうか。よっぽどのことがない限り書類選考は通過するということもあり、受験者の数は多い。雨の中大学の前に作られた列は長く隣の書店の近くまで伸びていた。待っている間隣の子がタイプだとか意外に私服組も多いだとか人間観察をすることで気は紛らわせられる。宗治はそういった妄想の世界を楽しむことも好きだった。

受付で名前を言々とチェックされ、教室の案内が記されたプリントが渡される。432番だった宗治は自分の番号の教室を見つけると、階段で四階まで登る。意外と気が短いのでエレベーターで待たされるのが嫌なのだ。古い校舎は床がきしんでいて、走る振動に敏感に反応して音を鳴らす。いまだきコンクリート製ではなく木製の校舎というのも珍しい。

教室の黒板には席番号の略図が書かれていて、ひとつひとつ確かめながら座る。試験開始三十分前の教室はまだまばらにしか受験生は入っておらず、そこにいる人たちは参考書を開いては少しでも知識を詰め込もうと必死だ。隣の眼鏡をかけたロングヘアーの女性はケータイを使って参考書と睨めっこしながら答えを探している。前にいる筋肉質の男性は花粉症なのか辛そうにティッシュを机の上に置きながら鼻をすすっている。宗治も彼らに負けじと問題集を開き、脳をフル回転させて覚えることに集中した。

新鋭社の筆記試験は一般常識100分、小論文70分である。一般常識は時事ニュースや政治といったものから芸能・スポーツ・娯楽・雑学といったものまで幅広い。難読漢字の読み書きや英語の問

題もある。選択問題ではなく、すべて記述問題でおまけにボールペンで書かなくてはいけないため訂正も難しい。サブプライムローンにより経営破たんし現在の百年の不況の元凶とされている金融会社はどこか、アメンバーブログで2008年芸能人ランキング一位となり殿堂入りした羞恥心のメンバーは誰か、不況下の中で息を吹き返したマクドナルドの社長の名前は、昨年の本屋大賞に輝いた湊かなえの作品は、次の文章を読み複線となっている箇所を日本語で記せ、かわせみを漢字で書け……。そんな問題が百題続いた。

ひとつひとつ頭を捻りながら解いていく問題は難しいながらも趣向がこらされていて面白かった。解けなくても後で調べてみたい。そんな好奇心にかられる問題が多かったのだ。問題をすべて解いていくだけで十五分ほど余り、後は見直しに当てる。証明写真を回収しに来る試験管に気を配る余裕はなかった。手ごたえはまずまず。後は周りの出来との差がどれだけあるかだ。

試験終了の合図があると宗治はふうつとため息をついた。昼間からこれだけ頭を使うと想像以上にどっと疲れが出る。それでも十五分の休憩の間にリラックスさせ、次の小論文のための準備をしななければならない。とはいえ宗治は文章力には自信があった。出版社を受けるくらいだ。きっと周りも同じだろう。それでも不思議と小論文の結果で落とされる気はしていなかったのだ。

筆記試験から小論文の試験が始まるまでの間に数人の受験生の姿が見えなくなった。一般常識の手ごたえで諦めた受験生が早々に次へに乗り換えたためだ。隣の眼鏡をかけた女性も消しゴムのカスだけを残していなくなっている。

試験用紙には何も書かれていない四百字詰め原稿用紙二枚と白紙一枚がホチキスでまとめられて配られた。白紙があるのはメモ用紙に使うためだ。全員に配られたところでテーマが発表される。今回のテーマは『絆』だと大きく黒板に記されると、タイトルの欄に記入した。

宗治は試験が始まってすぐ絆を連想させるエピソードを箇条書き

で列挙していく。家族、友人、クラスメイト……。いくつか浮かんだ中でもやっぱり今の自分のグループメンバーと出会った大学時代が一番しっくり来るような気がする。

ゼミで出会った斗真と容子。食堂で隣になって話しかけてきた大隈。幼馴染のほのか。予備校で一緒だったという理由で近づいてきた浩太。それぞれ個性の違うメンバーがシューカツを通して同じひとつの集団に集合している。それだけでも運命だし、絆だと思った。この世界で六十億分の一だかの確率でたまたま同じ国に生まれ同じ場所にいる。かけがえのないこの時間をすごした日々を書くことはすらすとペンも進み、むしろ制限内の量に収めることが難しいことだったのである。

試験が終わり試験会場である大学を後にすると、マックに入ってオレンジジュースとアップルパイを注文し、オフにしていたケータイの電源を入れる。さっきまで降っていた雨はすっかり止み、晴れ間が差してきていた。メールをチェックすると、グループのメンバーからいくつかの送信があった。

斗真は慶朝新聞の一次面接を無事通過し、次は二次面接らしい。容子は大手食品メーカーの筆記試験を突破。警察官志望の大隈は勉強の傍らいつもメンバーのことを気にかけて重い一言を遺してくれる。今日の彼からの一言は「ありのままでもいいんだよ」。天然のほのかはみんなと違って落ちまくっているというのにまったくへこたれる様子はない。それどころか宗治の心配ばかりなので、宗治は逆にほのかに言葉を投げかけているほどだ。

そんな中ただ一人自分に負けそうになっているメンバーがいた。浩太だ。志望企業すべてに失敗し、自分の方向性を見失っていると斗真から報告される。励ましてやりたいからいつものカフェに来てほしいとメールには綴られていた。あれだけ常識にこだわっていた浩太なだけに心配だった。宗治はすぐに了解と返事を送り、一気にドリンクを飲み干した。

一時間後、カフェの前には斗真とほのかが浩太を囲むように集まっていた。容子は就職試験、大隈は公務員試験模試のためどうしても来られなかったらしい。浩太には青ざめた様子も落ち込んだ様子もなく、むしろ吹っ切れたすがすがしい笑顔をしていた。宗治の近づいてくる姿に気づいた斗真が最初に声をかける。

「遅かったな」

「どうしたんだよ。浩太が落ちてるって言うからこうして来たのに」
「なんかシューカツなんてどうでもいいって考えたら軽くなったんだってさ」

宗治が横にいる浩太の顔を見ると、いつになくテンションの高い笑顔がそこにあった。白い歯を剥き出しにして浩太はにこっと笑いかける。

「久しぶり、元気そうじゃないか。てつきりマスコミの壁に阻まれて落ち込んでいるのかと思ってたよ」

浩太のいつもどおりの皮肉はこちらの心配が杞憂だったことを知らせるには十分だった。

「それはこっちのセリフだろ？ 心配してきてやったのに」

「それはどうも。なんかさー、就活なんてやってるのばかばかしいって思ったら楽しくなっちゃって。何もみんながやってるからって無理して就職する必要はないんだよね。新卒のときに就職しなくて立派に生きてる人もいる。そう思ったら希望に満ち溢れてきたのさ」

宗治は顔を手で押さえて頭を抱える。ここまで急いできたことの疲れがどっと出てきた。

「これからどうするんだよ？」

「フリーターとしてバイトしながら政治家か起業家を目指す。いろいろ勉強してね。僕は今までフリーターというのを否定してた。だけどわかったんだよ。遊びたいがためになった人もいるけど、夢のために自ら選んだ人もいるんだってことを」

得意げに話す浩太に対してかける言葉がなかった。くよくよ落ち込んで自暴自棄になられるよりはいいのかもしれない。新しい目標を持ったのだから。

人は何か目標を持つことで強くなれる。自分を好きになれる。もし自分が就活に失敗したとき同じ選択をするのだろうか。それが不安でたまらなかった。浩太の明るさに素直に笑えていない自分がそこにいることに宗治は気づいていたのだ。

三日後。先日受けた新鋭社から筆記試験通過のメールが届く。宗治は思わずパソコンの画面越しにガッツポーズを上げ、グループのメンバーに報告のメールを打った。次は四日後にグループディスカッションだ。グループディスカッションとは提示されたテーマについて議論し、話をまとめていく面接のひとつの形態である。普通の面接よりもその人自身の個性や役割を把握できるため、近年初期の選考の段階で取り入れる企業が増えている。仲間意識を持てるので受験者側も楽しいのだが、対策が取りづらいことで手ごたえを実感できないのが難点だ。自分では最高のつもりでも面接官にどういふポイントを見られているのかはわからない。ある意味一番怖い選考といってもいいかもしれない。

ここに来てようやく宗治は就活を理解し始めていた。何より自分自身が楽しめるようになっていた。就活を始めたばかりの頃は企業に合わせることをばかり考えていたように思う。その企業に必要な人物を演じようと必死だった。自分を押し殺してまでいい人になろうと繕っていた。

だけど、そんな作られた模造品では目の肥えた面接官には見破られてしまう。本当の自分を受け入れてくれる企業を探していくことのほうが重要なのだ。そのことに気づけただけでも就活は意味があったのかもしれない。人として成長できたということなのだから。

夕方の渋谷の街は春の陽気に包まれていても肌寒い。会社帰りの人の波が押し寄せてきて、動物園の中にほうり込まれた気分だ。流行

物の同じファッション、同じ髪型、同じ音楽を聴いて、同じ話題で盛り上がる若者。そんな大人と子供の間に挟まれてもがいているばかりたち大学生は周りからどんなふうに見えているのだろう。

今日だけはスーツを脱ぎ就職活動から一時的に解放された自分がいる。スーツを脱ぐのなんていつ振りだろう。外出するときには気を引き締めるために就活がない日でもスーツを着ていた気がする。今日はTシャツにフリースとジーパンといったラフな服装だ。宗治は八チ公前から見える時計台が約束の六時を回ったのを確認すると、しきりにケータイの画面と睨めっこを始めた。こちらからメールするのも悪い気がしてやきもきした気分になっている。

「ごめ〜ん、待った？」

少し息を切らしたボーダーシャツにミニスカートの女性ははにかんだ笑顔を振りまきながら宗治に甘える表情を見せた。

「待ったじゃないよ。ほのかのことだからどうせまた道に迷ったんだろ？ わかんなくなったら連絡しろっていつも言ってるのに」

「改札出たら人ごみの波にさらわれちゃってさ。気づいたら自分がどこにいるかわかんなくなってる」

半ベそをかきながらほのかは照れ笑いで必死に本音を隠そうとしていた。長い間幼馴染として付き合っていれば表情を見ただけで相手が何を考えているのか手に取るようにわかる。ほのかはごまかそうとするとき斜め下に視線を移す癖があった。

「ほのかが観たい映画があるって言うから来たんだろ。ほんと、いい加減一人で映画館行けるようになれよな」

「だって、観終わった後おしゃべりで盛り上がるのが楽しいんだもん。ほら、宗ちゃんなら文句言わないし」

昔からほのかの屈託ない笑顔には勝てなかった。彼女の笑顔には怒る気さえ失くしてしまうような幸せのパワーがある。右目の下にぽつんと目立つほくろが魅力を輝かせているのだ。

映画の上映時間まで残り十分。宗治は無邪気にはしゃぎながら走るほのかを追いかける形で道玄坂を駆け上る。単館の小さな映画館

はエレベーターで三階のところにあつた。宗治がチケットを買っている間、ほのかは売店で二人分のコーラとひとつの大きなポップコーンを注文する。ほのかの手と口にはすでにポップコーンが投入されていた。

二人揃つて席に着くと真ん中にポップコーンを置いた。ほのかは映画の番宣を観ながらあれこれと話しかけてきたり声を上げたりするので、周りの視線がきつくなるのが怖い。食べ方も豪快だからかすがぼろぼろと床に落ちていた。

ほのかが宗治と一緒に観る映画は決まってホラー映画。普通の女の子のようにきゃーきゃー叫んで手を握るなんてことはなく、けらけら声を上げて笑つて宗治の肩を叩く。そんなとき宗治は迷惑がからないうちにほのかの口を押さえるのだ。そんなんだから当然映画の内容を覚えていることなんてなく、ただほのかの話にうなずいているだけ。だけどほのかにはそんな時間がたまらなく好きらしい。ほのかの笑いのツボは普通とはズレているのだ。

「面白かったね」

約二時間の映画が終わつてファミレスでの夕食。ほのかはデミグラスハンバーグのソースを口の周りにつけながら映画の内容について話す。そのほとんどがほのか的ツボゾーンであるゾンビの顔の物まねだ。大きな目を突き出しながら舌を出す。

「まあ気分転換にはなつたかな。最近こうやって息抜きすることもなかったし」

「笑つたほうが何もかもうまくいくんだよ。私は宗治の笑つた顔、好きだな」

さらつとそういうことを言ってしまうほのかに少し嫉妬した。宗治には相手が幼馴染で冗談でも好きだとか褒めたりだとか照れくさくてできる自信がない。にたつと笑つてごまかすことでしか返すことができないのだ。

「……ねえ、キスしようか？」

宗治は思いがけないその一言に驚嘆の声を漏らす。目をつぶった

ほのかの体は震えていて、精一杯の勇気を絞ったことは容易に想像できた。ファミレスの店内だ。周りの目がある。ほのかを嫌いなわけじゃない。ただだからといって恋愛対象として意識して見たこともなかった。ほのかを傷つけない。このまま流れに任せて付き合ってしまうえば楽なのだろうか。いや、それでは余計に彼女を傷つけてしまうことになるだろう。宗治の答えは最初から決まっていた。

「ごめん……今はそういう気持ちはないんだ。気持ちはうれしいよ。ありがとう」

「そっか……そうだよ。正直に言ってくれてありがとう。逆に中途半端な返事とかとりあえず付き合おうとかだったらこの場で張っ倒してたよ」

おちゃらけた様子で殴る素振りを見せるほのかを見ると、どこか切なくなつた。

「何だよそれ。これから友達としてよろしくな」

「うん」

ほのかの表情は明るかった。正直ほのかのことだからこの場で泣きじゃくることは覚悟していた。だけど彼女は宗治が思っている以上に強いかもしれない。強がりでも涙一つ見せずいつも通りの自分にいるよう演技できるのだから。もしかしたらこの先振ったことを後悔しているのかもしれないとちよっぴり思ったりもした。それは翌日ほのかから『髪切りました』とメールをもらったときの胸の痛みを感じたことが証明していたのである。

存在価値

存在価値

新鋭社のグループディスプレイスカッション当日。アイロンがけをした紺のリクルートスーツをびしっと着て身なりを整え、水道橋にある本社へと向かう。今日の気温は夏日を超え、少しスーツだと汗ばむ陽気だ。世間がゴールデンウィーク間近で浮かれている間に今一生を左右する敵と戦っている。辛いのは自分だけじゃない。みんな同じなんだ。宗治はぜひ我が社に欲しいと思われる人になろうと、楽しんで選考に臨むことを決めていた。人と人が出会う確率は天文学的な数字で奇跡。なら一生を決める会社と出会うのも奇跡以外の何者でもないのだから。

会社の目の前まで来てエレベーターに乗り3Fのボタンを押した。中には数人の同じように就職試験を受けるのである男女が一緒に乗っていた。緊張で顔が強張っているように見える。ぼくも周りから同じように見えているのだろうか。宗治は周りを見ながら必死に笑顔の練習をしていた。

エレベーターを降りて受付を済ますと、会議室のようなところに案内された。自分と同じ受験生が何人かすでに着席している。大半がスーツの中、ゆるいパーマをかけた女性は私服で目立っていた。ストライプのシャツに茶色のジャケット、靴はスニーカー。まるでヴィジュアル系バンドのライブにでも行くかのような奇抜なファッションだ。髪の色も僅かではあるが、少し茶色い。わざとなのか言っているのか真意はわからない。宗治はとにかく今は自分のことに集中するだけと気持ちを高めることに専念した。

「準備ができましたらお呼びしますので、その間にみなさんと話合っていてください」

係りの女性からそう説明される。グループディスプレイスカッションは今こ

の場にいる六人グループで行われる。最初に一人ずつ自己紹介をした後に試験スタート。制限時間は二十分だ。グループディスカッションにもいろいろある。インターネットやノウハウ本によると、新鋭社は毎年ひとつのテーマを試験直前に提示され、それについて話すというものらしい。その中でまとめる力だったり問題提起する力だったり発想力だったり積極性だったり協調性だったりといった個性を見抜かれるのである。

「とりあえずさ、みんなの名前教えてよ。私は早川瑞希、よろしく」
歯を剥き出しにして笑顔で握手を求めてくる瑞希に対して誰一人反応せず、空気が静まり返った。先ほどの私服の女性だ。澀んだ空気を感じてか、瑞希はきよきよと一人一人の顔を見る。

「早川さんと言ったっけ？ 君は本当に新鋭社に入りたくてここに来たのですか。服装も普段着だし髪まで染めたまま。おまけに妙に馴れ馴れしい」

「私、ファッション誌志望だから。見た目にとらわれず採用してくれるところ探してるの」

瑞希は悪びれる様子もなく、自分のファッションを見せびらかすように前屈みに胸を強調したポーズを取る。眼鏡の男性は怒りを露にするように、差し出されたカップをテーブルに叩きつけた。

「君は自由と自分勝手を履き違えてる。そんなの社会に出たら通用しないんですよ」

「まあまあちよつと二人とも落ち着いて」

眼鏡をかけた細身の男性の言っていることは正論だったが、さらに重たい空気が立ち込めてしまった。爽やかな色黒の男性が止めに入ったことで少しでも明るい空気にしようとする。このままで試験に臨むのは誰だって嫌だ。この空気を誰かに変えてほしい。そう思っているといかにも体育会系といった大柄の男が言葉を切り出す。

「こんなところで揉めてもしゃーないから少しでも話進めよう。GDはチームワークも大事なんだから」

「彼に賛成です。全員突破は無理かもしれないけど、みんなが力を

出し切れたと言えるような議論になるようにしようよ」

綺麗な髪とぱっちりした瞳が印象的な女性がそこに乗ったことで流れは一気に変わった。さっきまで睨み合っていた瑞希と眼鏡の男性にも笑顔がようやく零れる。宗治はこの流れに乗り遅れる格好になったが、一緒に試験に臨む五人を見てすごく面白いなとひとり人間観察を楽しんでいた。

「なんかすごいですね。みんな一人一人個性を持っていて、すでにGDでの役割分担ができてるみたいだ」

「そういう君は今みたいに人間観察してるようだと輪に入っていけなくて苦戦するよ」

「……厳しいんですね」

宗治に対する眼鏡の男性の評価がストレートすぎて、その場に笑いが起きた。たった今出会ったばかりの六人なのにすでに昔から知っている友達のようにさえ思えてくるから不思議だ。

数分の間自己紹介を兼ねて談笑しているうちに係りの女性が戻ってきて、別室の面接会場に案内された。面接官と向かい合うように扇状に六つのパイプ椅子が置かれている。一人一人がその椅子の横に立ち、面接官の合図で一斉に座った。最初に簡単な自己紹介をしてから試験が始まる。

眼鏡をかけた細身の男性は扇大の梶原健太郎。国際ジャーナリズムに興味があり、雑誌編集志望だそうだ。大学でも英文学を専攻している。趣味はインターネット。

私服で登場し驚かせた早川瑞希は慶大出身。先ほど本人の口から言っていた通り、ファッション誌編集が志望だ。知り合いにメイクアップアーティストがいるらしく、コスメについては詳しいとも。大学では心理学を専攻している。趣味は雑誌の切り抜きとショッピング。

爽やかな色黒男性は専大の木村祐一。芸人と同じ名前からか、ついたあだ名はキム兄だそうだ。梶原同様雑誌編集志望だが、こちらはコラムに興味があるらしい。大学ではジャーナリズム論を専攻し

ている。趣味はカラオケと飲み。

体育会系の大柄の男は北洋大の藤堂勇馬。大学での専攻は予想通りというか、スポーツ科学だった。志望はスポーツ芸能をやりたいということ、雑誌編集か営業。趣味は部活でアメフトをやっているらしい。漫画を読むのも好き。

ぱっちり二重の女性は聖女大の雨宮由希子。読書が趣味で文芸をやりたいので、書籍編集志望だ。大学では家族社会学を専攻している。ブログもやっており、文学才女といった感じのようである。

草野宗治は天智大で犯罪社会学を専攻していた。それだけに新鋭社では社会報道をやリたかったので、雑誌編集志望。小説を読むのも好きだったので、文芸書籍編集にも興味があった。趣味は読書とインターネットと競馬。もう慣れたが、競馬と言った瞬間笑いが起こった。

就職試験という場では、世間一般的にマイナスイメージとなるギャブルを自己PRにすると不利になる可能性があるかもしれない。といって隠す人が多い。しかし宗治はあえて言うことでそこを突っ込ませる。なぜなら意表をつく質問をされるよりもこっちから質問される内容を限定したほうが受け答えの準備がしやすいからである。

「それではグループディスカッションのテーマを発表します。テーマは『格差社会』です。制限時間二十分の間に最後にまとめて発表してください。発表者は誰でも構いません」

そう説明を受けると、面接官がストップウォッチを押してペンを持ちながらこちらの様子を窺う。テーマを与えられたばかり受験者はどう切り口を見出そうか頭を捻らす。

「格差社会ってあれでしょ。金持ちとビンボーが両極端になっちゃうっていう。不公平だよ、全然平等主義じゃない」

「不公平ではない。実力ある者が上に上がっていく。年齢で差別されるわけでもなく、仕事の出来で正当な判断がされるんです。これ以上の民主主義に見合った社会はないと私は思います」

「そもそも二人が言う平等って何だろう？ 仮に梶原さんが言うよ

うに正統な判断がされるところでもみんながみんな適性に合った職業に就けるとは限らないですね。明らかに合わない職業に就いてしまった場合、その人の正しい能力を発揮できないかもしれない」

瑞希の発言で口火を切った討論は藤堂の的確な指摘から展開していく。おそらくこの発言で藤堂にプラスの評価が上がったことだろう。宗治もどこで話の輪に入っていこうかと考えながら必死に食らいついていく。

「そもそも平等じゃなきゃいけないのかって思うな。誰にでも向き不向きがあって当たり前。女子にしかできないから女子に、男子にしかできないから男子にとって区別する必要があるでしょうし、何でもかんでも差別というのは問題だと思います」

「木村君の意見はもつともだと思えます。私は女ですけど、本当に女性差別だと思ふのなら男性と同じ仕事をして女でもできるんだってことを実力で証明しないと。できないのに都合のいいときばかり差別差別言うのはわがままです」

「じゃあさ、由紀子ちゃんも女性差別がないって思うの？」

「……そうは思ってますけど」

瑞希のツツコミに雨宮は動揺した素振りを見せ、手の甲に汗をかいていた。少し俯き加減になるのを見て、相変わらずのスロースターターの宗治の口が開く。

「少し論点がずれたので戻しましょうか。元々格差社会は実力主義のスポーツやクリエイティブや芸能の世界では当たり前でした。私は競馬が趣味なのですが、競馬の世界でも圧倒的に強いディーブインパクトがブームになる一方で、まったく勝てないハルウララのような馬のブームもあったのは格差社会を反映していると感じています」

「競馬やらないけど、その名前はニュースで観て知ってるよ。当たらない馬券がお守りになったとか何とかって」

宗治は木村の発言を受けてにんまりと得意げな顔を作る。自分の庭に誘い込んでしまえばこっちのものだった。高笑いしそうになる

のを抑えながら表情を崩さずに続ける。

「木村君の言うとおり、ハルウララは勝てない馬券、つまり絶対当たらないとして交通安全のお守りに買っていく人がいてブームになりました。ハルウララのファンは意外なことに競馬には興味のない一般の人たちばかりなんです」

宗治は得意分野の話題に入ることによって火がついた。話したくてしょうがないと気持ちが先走りそうだった。こうなると止まりそうもない。宗治中心になっていくのは目に見えていた。

「どうして競馬ファンの人たちじゃなかったんですか？」

「由紀子ちゃん、そんなの決まってるじゃない。当たらないのに応援するわけないじゃん」

「……早川さんの言う通りなんですけど、私は一般の人がはまったのにはハルウララを競馬としてではなく、アイドルとして観ていたからだと考えてる。競馬そのものの魅力にとりつかれたのではなくて、ハルウララの一生懸命に走る姿に自分を重ねて観てたんじゃないかなって。競馬ファンは予想やレースや馬券的中の楽しさのために競馬やってるから、観点が違ったということじゃないんですかね」

雨宮は瑞希の悪気のない言葉に対して、肩を落としたように塞ぎこんだ。宗治が目で気遣いを見せてもそれに気づかないくらいに。グループディスカッションというのは一人一人の個性が出る分怖さもある。

「格差社会って何なんですかね？ 一部の上位層に入らなければ負け組と言われて、そこから這い上がることができない。そこで人間としての存在価値を決定付けられている気がしてなりません。勝ち組と呼ばれる企業に就けなければダメ人間だなんて、おかしいと思いませんか」

「確かに私も不安になることはあります。トップに立てない人間はダメな人間だと烙印が押される。でもだからこそトップに立たなければと頑張るのではありませんか。格差社会のすべてが悪いとは私は思わない」

「何でも社会のせい、他人のせいと責任転嫁するのは私も違うと思います。すべてが自分のせいと思うのが怖いから誰かのせいにする。そう思う人と自分自身で何とかなれると思ってる人との格差が起こるのは仕方ないことではないでしょうか」

宗治が梶原の発言を受けて発した言葉を言い切ったとき、ストツプウォッチのピピピという音が鳴り響いた。試験終了の合図だ。面接官の止めの合図とともに会場内が静まり返る。ただ思っていることを発言していただいだけ。安堵の気持ちと同時に通過できることを言えただろうかという不安の気持ちでいっぱいになった。

「最後に誰でもいいです。討論のまとめをしていただいけませんか」
「はい」

いさぎよく手を挙げたのは瑞希だった。宗治たち一人一人の顔を見ては笑みを浮かべ、面接官に目を合わせる。

「格差社会はやっぱりいけないと思う。才能とか能力とかって、そんな簡単に変わるもんじゃないし、評価する方もちゃんとできてるか心配。不安になる社会なんて作っちゃいけないんだよ」

「はい、ありがとうございました。面接の結果は合否に関わらず三日後に連絡いたします」

してやっつたりの表情を浮かべる瑞希と今にも泣き出しそうな暗い表情を浮かべる雨宮の顔は対照的だった。面接官に向かって会釈をすると、挨拶をして六人は新鋭社を後にする。外に出ると案の定雨宮が泣き崩れてしまう。そつと宗治がハンカチを手渡すと、涙声でありがとうと聞こえた。

「これはあれだな。雨宮さんに謝つといたほうがいいぜ」

「なんで私が謝らなきゃいけないの？ 何も悪いことしてないじゃん」

「だから早川さんは常識がないと言ったんだ」

「そうだね。ちょっと早川さんはやりすぎだったかも」

瑞希には厳しい視線が突き刺さっていた。空気の読めない瑞希もさすがに気づいたのかきよるきよる見ては動揺する。最後に雨宮の

顔を見ると、眉をしかめて頭を下げた。

「ごめんね」

震える声で言葉を発した瞬間、雨宮のビンタが飛んだ。雨宮は小さな声で最低と何度も何度も呟く。傍にいた宗治に抱きつく雨宮に対して、瑞希は叩かれた頬を手で撫でると背中を向けてダッシュで走り去ってしまった。

「それじゃ僕たちも帰るので、雨宮さんのことよろしく」

木村と梶原と藤堂はめんどくさいことには関わりたくないと言わんばかりに手を振って、宗治と雨宮に別れを告げた。何かを訴えるような瞳で見つめてくる雨宮に参ったなという気持ちで頭をかくと、宗治は雨宮の体から離れる。

「とりあえずどっかで話でもしようか」

ほのかといい雨宮といい、人生に三度訪れるというモテ期に突入しているとしても言うのだろうか。女性慣れしていない宗治にとって、こういう状況は苦手だった。虚勢を張って意識しないようにしていても心臓のバクバクが止まらず、お店に入るまで終始無言のまま雨宮と一定の距離を置いて歩いていった。

「それでその雨宮さんとはどこまでいったの？」

「どこまでも何も、食事して連絡先交換しただけだよ。ずっと雨宮さんの愚痴聞いて。あれから毎日メール来るけどね」

「それって絶対気があるよ。いいな、宗治ばかりモテて」

大隈はちらつと楽しそうに容子たちと話しているほのかの方を見る。宗治に振られたことはもう吹っ切れたというくらい明るい笑顔だ。

女性は後に引きずらないと言うが、本当なのかもしれない。宗治とほのかの関係はまた元の幼馴染の関係に戻っている。久々に訪れた大学のキャンパスはサークルの新入生勧誘で賑わいを見せていた。

「でもさ、あんまり女の子に現を抜かしてるとうまくいくものもいなくなるから気をつけなきゃな」

「彼女いる斗真にだけは言われたくないな」

「確かに」

恥ずかしそうに頭をかく斗真が妙におかしかった。こうしてみんなで笑いあうのもあとどれくらいあるのだろう。卒業までもう一年とないのだ。容子と斗真が早々に内定を獲得し、ほのかも宗治に振られたのを気に奮起し次で最終面接だそうだ。その最終面接も確認程度でほとんど当確らしい。

残されたのは宗治と公務員試験に賭ける大隈の二人のみ。大隈の場合はまだスタートラインに立ってもいないだけに、宗治は少し置いていかれたような気がして焦りも出始めていた。

「宗治はこの後新鋭社以外にどこ受けるんだっけ？」

「笠村出版とワームレコードと天道新聞社かな。あと十社くらい書類選考結果待ち」

「そっか。まあせいぜい頑張れよ」

斗真は宗治の背中を強く叩いて激励した。どうも最近頑張ってた言葉が好きじゃない。日本では頑張りということに際限はなくて、すでに頑張っている人に対しての頑張りは残酷のように思える。言っている本人に悪気はなくて応援しているつもりなんだろうけど、どうも重く感じていた。頑張りは意外とプレッシャーを与える言葉なのだ。

今の時期、就職課は混んでいた。一年で一番就活が活発な時期で、本当に就職できるのか誰もが不安になる時期だからだ。相談は予約でいっぱいですぐに対応してくれるとは思えない。だから宗治は最初から諦めて外に掲示されている情報やフリーペーパーをこっそり鞆に入れては見比べることにしている。正直今の時代はインターネットと新聞こそが求人最大の情報源になっているのだ。

久しぶりに訪れた卒論ゼミの講義も、宗治と斗真と容子を除いては勤勉な優等生が三人ただけで就活を理由に欠席していた。担当の高崎明教授も少人数でやりにくそうに過去の卒業生の論文をいくつか回していた。高崎先生は白髪まじりの五十代後半で太目の体型。元は警視庁勤務だったらしい。犯罪社会学を専門としており、裁判

員制度の重要性をいつも熱弁してくるのが口癖だ。めんどくさがりやで投げやりな分、単位を取りやすいのでなぜか学生には人気である。

「来月にはテーマを決めといてください。講義のないときは大抵研究室にいますので、相談したい場合は研究室まで来るように」

高崎先生は資料を回収すると、そう言い残して教室を後にした。勤勉な三人が先生を追いかけて外に出て行く中、宗治たち三人は教室に残ってお互いの顔を見合わせてはため息をつく。

「宗治はどうするんだ」

「俺はギャンブルの犯罪学かな。ギャンブルが何でもかんでも犯罪に結びつくという偏見にメスを入れたい」

「宗治らしいな」

斗真はにこりと笑う。二年の頃からずっと同じゼミの仲間である斗真と容子はグループの中でもほのかと同じくらいの仲良しだ。浅い付き合いを求める大衆大学の学生同士で、サークルが一緒なわけでもないのにここまで付き合えるということ自体稀である。大衆大学というのは、授業の間だけ仲良くして別々になっただけならという冷めた関係が多いのだ。

「私は少年犯罪かな。まだ漠然としてるんだけど、ゆとり社会の中で育った今の十代の子たちと私たちの頃ともっと昔の学歴社会だった頃を比較してみようと思う」

「俺はメディアスクラムをやろうと思ってる。新聞記者になるからには報道する側の姿勢も理解しておかなきゃと思ってるな」

「二人ともしっかり考えててすごいな。俺はあまりに軽いテーマで却下されないか不安だよ」

「冗談まじりにはははと苦笑いを浮かべると、宗治ははにかんだ。就活と卒論。両立していかねばならないかもしれない二つの大きな仕事に不安を抱きながら。未来に向かって歩み始めている二人と、未来に向かって近づこうとしている自分。どうしても一緒にいると比べてしまい、劣等感を抱くことがある。友達にそんな不要な

感情を抱く自分自身に嫌気が差したりもしていた。

卒業に必要な単位はすべて習得済みで残すは卒論のみとなっていた宗治にとって、就活のない日は暇だった。卒論ゼミは月に一度しかなく、ほかにすることといったら就職情報サイトを回るくらい。家に帰れば親に就活の近況を事細かに聞かれ、趣味の競馬や小説に没頭しようものならだらだらしていると言われる。居場所を失い、結局は大学の図書館で夜までパソコンを使ったり本を読んだりして過ごすのが宗治の日課となっていた。

「まあ、ここで暇つぶししてる」

「ほのかには関係ないだろ。ここが一番落ち着くんだ」

ほのかは無邪気な笑顔で宗治が読んでいた小説を取り上げた。たまにたま就活帰りに見つけた恋愛小説。あと一ヶ月の命しかないヒロインと恋に落ちる話だ。きわどい性描写を得意とする石神功の渾身の自信作と銘打っていた。今日のほのかはフリフリのワンピース姿で生足が強調されたシースルーのスカートがいつもよりかわいく見えた。

「ふーん、宗ちゃんってこういうの読むんだ」

「……読んじゃ悪いかよ」

ほのかはぱらぱらと流し読みすると、パソコンの前に小説を置く。思えばほのかと二人きりで話すのなんて、宗治が振ったとき以来だった。宗治はなぜか今までなかった距離をそこに感じる。

「……聞いたよ、雨宮さんのこと」

「そっか」

微妙にほのかの表情に暗さが差し、強張っているように見えた。でもそれは一瞬ですぐに元のほのからしい笑顔を取り戻す。

「宗ちゃんはその子のこと、どう思ってるの？」

「どうっていうか、俺にはもったいないくらいいい子だよ。メールしてても楽しいし」

顔を窺いながら淡々と話す宗治が作り出した空気は、微妙な温

度を醸し出した。ほのかは不敵な笑みを浮かべて宗治の手を握る。

「ホント、宗ちゃんはいっつもそうだね。変なとこネガティブで優柔不断で。昔からそういうとこ嫌いだった。もっと自信持っていんだよ。もっと相手に求めていいんだよ。私は宗ちゃんのいいところいっぱい知ってるよ。自分を信じてあげて。自分のこと嫌いな人を好きになる人なんていないんだよ」

いつもへらへらしていて楽天的に思っていたのに、今日は違った。初めて見せる眉間にしわを寄せて親友に届かせた言葉の優しさ。宗治の琴線に触れ、数秒間動けない状態になっていた。止まった瞬間の後に最初に出た言葉は「ありがとう」だった。

「ほのかにそんなこと言われるなんて驚いたけど、嬉しかった。ほのかっていいやつだね」

「なんだよ、今頃気づいたの？ 私はいつだって宗ちゃんの味方だつて言っただじゃん」

自分で言っておいて恥ずかしかったのか、けらけら笑いながらごまかすほのかがかわいかった。

「いつもの顔に戻ったね。でもやっぱり俺はその笑顔のほうが好きだな」

「……それが振られた人に言うセリフ？」

ほのかの膨れっ面がおかしくて、宗治は思わずげらげらと大声で笑ってしまった。するとほのかの目にはぼつりと涙が零れ落ちる。

宗治はそんなほのかの体を抱きかかえ、優しく頭を撫でた。

「ずっと……我慢してたんだよね。ごめん、気持ちに伝えられなくて」

「……そんなことされたら……もっと好きになっちゃうじゃんか、バーカ」

嗚咽まじりのほのかの涙でシャツが濡れるのも構わずぎゅっと抱きしめた。何も言わず今だけは甘えさせてあげよう。ずっとほのかに甘えてきた。不安にさせた。だからこそ今度は自分がしっかりしなきゃって思えたんだ。ありがとうって言葉で表すことは簡単なこと。

口先だけじゃ駄目なんだ。きみのおかげでここまで来れたんだよってこと、これからもずっと見ていてほしい。宗治はこのとき誓った。優しく生きるんだってことを。

人生いろいろ

人生いろいろ

あの日から十日、就活は怖いくらいに順調に進んでいた。就活は独りだと思いがちだが、決してそうではない。すでに内定を決めている斗真と容子とほのか、これから公務員試験を控える武、自ら就活の舞台から降りた浩太、すでにメル友としてお互いを励ましあう雨宮。宗治にはこんなにも心強い仲間がたくさんいた。それは自身に誇れることだった。

大本命の新鋭社は二次面接も無事に突破し、残すは最終面接のみ。笠村出版は一次面接を突破して、次は二次面接。ワームレコードは一次面接を突破し、次は筆記試験。天道新聞社は筆記試験をかううじて突破し、次は一次面接。ほかにも十二社応募した書類選考のうち七社から書類選考通過のお知らせがきていた。あんなに嫌だった企業から来る結果を知らせるメールが今は楽しみでしうがない。

宗治は気分転換にと久しぶりに一人で出掛けた。今日一日は誰とも会わずに過ごそうと。元々趣味が競馬である宗治にとって、一人行動を苦にすることはない。もちろん友達と一緒にいることも好きだが、周りに合わせてしまう性分の宗治としては、自由にできる一人の時間も必要だった。

日曜のG？レースが行われる東京競馬場は十万人を超える人で溢れ返っていて、通勤ラッシュを迎えた満員電車のようだ。身動きをとろうものなら、もう元の位置にレースまでに戻ってくることはできないだろう。本当に儲けるために勝負を賭けに来ている人から、デートコースとして遊びに来たものまでその人種はさまざま。晴天の五月の空に汗を流しながら、新聞と赤ペンを持って大型スクリーンに視線が集中していた。宗治もその中の一人として半袖のポロシャツにジーンズ姿で紛れ込んでいる。

スポーツ新聞を小さく折りたたみ、ケータイで情報を得ながら印をつける。マークカードに一気に今日買うすべてのレース分を記入し終わると、馬券を買って屋内に設置されているテレビでレース観戦しながら、昼食のまぐろ丼を食べる。いつものお決まりのコースだった。レースを生で観るのはメインレースだけでいい。G?のときは混むから二つくらい前のレースが始まるときに外に出て行って、そこから動くのを止めるのが常連の行動となっていた。

この日はG?も含め三連勝で、三万円のプラス。こんなことめったにないので、今日はついていた。ほくほく顔で記念にお土産を買おうとターフィーショップに寄っていると、一件のメールが入る。雨宮からのメールだった。

『突然だけど、今から会えますか？』

唐突な雨宮からのメールに宗治はあたふたした。本当に斗真の言うように自分に気があるのだろうか。毎日メールがあるくらいだから好意を持たれていることは確かなのだろうけど、それは友達としてではないのか。元がネガティブで自信のない宗治には、自分に向けられた好意に対して敏感になっていた。

そんなとき、ほのかがかくれた言葉を思い出した。「自分を信じてあげて」。会いに行けば何かわかるかもしれない。変わるかもしれない。不安がなくなるかもしれない。宗治はその可能性に賭けてみることにした。渋谷のハチ公口で待っていてほしいと返事をして。

日が沈むか沈まないかの時刻になると、さすがに肌寒さを感じる。直接競馬場から向かわざるを得なかった宗治は、ラフなかつこうなだけに、ちよっとだけこんなんで会っていいのかなという躊躇もあった。ただ女の子を一人待たせるのは悪いと思い、急いで雨宮の待つハチ公口前の電話ボックスへと向かっていた。

走ってきたために汗だくになった宗治を待っていたのは、バッグを下げて時計を気にする、グループディスカッション以来の雨宮の姿だった。白のブラウスに黒のミニスカート、あの時とは違う少し茶

色くなった髪。お姫様といった風貌に宗治はドキッとして必要以上に身構えてしまった。

「ごめん、遅くなって」

「私のほうこそ突然呼び出しちゃってごめんね。……ちよつと言いたいんだけど、その」

雨宮が赤面して指をさしたのは宗治の下半身だった。チャックが開いていたことに気づき、慌てて後ろを振り向いてチャックを上げると、雨宮がくすくすと笑い声を上げる。

「草野君つておもしろいんだね。なんか意外だな。初対面ときはそんな感じじゃなかったから」

雨宮が零す爽やかな自分に向けられた笑顔にドキッとして顔が強張っているのが自分でもわかる。数秒眺めたところではっと思いつき、バッグの中からごそごそと馬のぬいぐるみを取り出して、雨宮の目の前に差し出す。

「これ、あげるよ。さっき競馬で勝ったから買ってきたんだ」

「ホント？　ありがとう」

雨宮は無邪気にきゃっきゃとはしゃいで、ぬいぐるみを抱きかかえて頬でこすりながら喜んだ。心から喜ぶ？　ありがとう？　の声が脳内でリフレインして心臓に悪かった。

「それで用って何」

「そうでした。ここじゃなんだからどこかお店に入って話しませんか？」

宗治は深くうなずいてどこか行きつけのお店でもあるのか、すたすたと歩く雨宮の横を合わせるようについていく。若者の街・渋谷の夜は大勢の歩行者で溢れ返っていて、不特定多数という言葉がよく似合っていた。夜とは思えないくらいライトアップされた街の景色には、行き交う足音が隙間なく溶け込んでいる。

そこを男女二人で歩く自分たちは周りにどう見えているのだろう。かたや清楚という言葉が似合うお嬢様。かたや流行になど関心がなさそうなモテない草食系代表のような男。釣り合わないカップルと

でも思われているのだろうか。ほのか以外の女性と二人きりで歩くことなんて初めてだった宗治は、いつも以上に周りの視線が気になり怖かった。

人通りの多い道玄坂からスペイン坂を越えて雨宮が足を止めた先には、少し高級感のある居酒屋の暖簾が見えた。

「私、酔っ払いの人に絡まれるのが苦手でよくここに来るんだ。ここなら個室があって自分たちの空間を保てるから」

「そうなんだ。でもなんか高そうなイメージがあるんだけど……」

「大丈夫、草野君に奢ってもらおうなんて思っただけから。さ、いこ」

雨宮はためらう宗治の腕をぐいっと掴んでそのまま店の暖簾をくぐっていく。女の子の柔らかい腕に触れるのは久しぶりで、にやけてしまいそうな顔を必死にこらえながら観念してお店へと足を踏み入れた。

「二名様ですか」

店員が出てくると慣れた口調で雨宮が前に出て、すぐに宗治たちは個室に案内された。襖の閉まる和室で、靴を下駄箱に入れて襖を閉めると完全に二人きりの密室になった。緊張してのどが渇く宗治はそわそわして、雨宮と視線が合わせられずにいる。

「草野君は何飲む？」

「えっと……とりあえずビールで」

雨宮はメニューを向かい合う宗治にも見えるように広げ、何が食べたいかと聞いてくる。無邪気に笑うほのかと、凜とした表情から色気ある笑顔を作る雨宮は対照的だった。雨宮の少し発達したえくぼは見るものを魅了させるには十分過ぎるほどだ。思わず触りたいという妄想に負けそうになる。

「ここ、いい雰囲気のとこだね」

「でしょ？ よかった、喜んでもらえて」

「ホント言うと、俺も飲んでみんなでドンちゃん騒ぎって言うのが苦手だったんだ。ノリについてけないっていうか……」

「ですよ。よかった、同じ想いの人と一緒にできて」

話に乗ってきた雨宮は、まだアルコールも入っていないというのに上機嫌でテンションが上がって、宗治の側まで体を乗り出していた。初めて会ったときはお嬢様タイプでとっつきづらさを感じていたが、どうやら普通の明るい女の子のようだ。おかげで宗治の緊張もほぐれてきて、置いていた距離も縮まってくる。そうするうちに頼んだメニューが運ばれてきた。焼き鳥の香ばしいにおいがムードをよりかきたてる。

「それで話したいことって何？」

「そうでした。実は私……、内定もらっちゃいました」

雨宮は笑顔でピースサインをした。どこか誇らしげで、頼もしく見える。宗治は驚きのあまり少しの間思考停止する。なぜだか複雑な気持ちになって、すぐに祝えるという感情になれなかった。

「ホント？ おめでとう。どこに」

「吹雪青春社っていう小さな編集プロダクション。私ね、あの時草野君に慰めてもらわなかったら、内定なんか取れなかったと思うんだ。だから直接お礼が言いたくて。あの時はありがとうございました」

なんだかオーバーだなとも思いながらも、お礼を言われて悪い気はしなかった。宗治は雨宮の目の前に手を差し出して握手を求めると、雨宮もそれに応えるように手を捧げた。柔らかく暖かい精錬された小さな掌を強く握り締めて。

「じゃあ乾杯しようか」

「そうですね」

「雨宮さんの内定を祝して、乾杯」

およそ三時間にも及ぶ二人だけの空間は思いのほか盛り上がった。共通の趣味である読書やインターネットの話から大学内のこと、プライベートに至るまで。協調性に乏しく、自分の話にここまで食いついてきてくれる人は宗治にとって初めてだった。こういうのを相性がいいというのだろう。元々メールで話題が尽きないほどだ。緊

張さなければ話し出せば止まらない。お腹が痛くなるほど笑ったのは久しぶりな気がする。

「もうこんな時間ですね。ごめんなさい、話に夢中になってしまつて」

「気にしないで。俺も楽しかった。また一緒に来よう」

宗治が立ち上がり個室を出ようとすると、雨宮が真つ赤な顔をして宗治のジーンパンの裾を掴んだ。立ち上がった雨宮はふらふらと立ちくらみを起こす。

「ごめん、飲みすぎちゃったみたい」

「……大丈夫？ 肩貸すよ」

宗治はない力を振り絞って、雨宮を肩で抱き支えた。雨宮の酒臭さと荒い吐息が首筋に伝わってきて、なんだか変な気分だった。支払いを済ませてどこか休める場所を探した。外気に触れれば少しは酔いを醒ませるかもしれない。女性の扱いに慣れた男ならこういうときホテルを探すのだろうが、宗治にそんな勇氣はなかった。そもそもまだ恋人でもないのに、順序を逆にすることは自分の中で許せない。

宗治は雨宮の様子を気にしながら、近くに人気の少ない公園があることを思い出し、一目散に向かった。ぐるぐる回っているうちに自分もお酒が弱いことを思い出し、ようやく公園のベンチに辿り着いて雨宮を寝かしたときには宗治自身も目眩がしていた。

「また、助けられちゃったね」

「……もう大丈夫なの？」

「うん、なんとか。なぜだか草野君と一緒に調子に乗っちゃって、甘えなくなるんだ」

舌を出して照れ笑いをする雨宮の表情に緊張が蘇ってきて、宗治の酔いはより一層激しさを増し、意識が朦朧としてきた。くらくらは雨宮の顔がぼやけて見える。

「ごめん、俺も酔いが回ってきたみたい。タクシー呼ぶからちょっと待ってて」

宗治がケータイを取り出してタクシー会社に電話をかけていると、ゆっくりと雨宮は体を起こし、ベンチに座る宗治の横に寄り添ってきた。ブラウスがはだけていて、白い肌と鎖骨と胸の谷間を覗かせている。体は紅潮したままだ。

「どうしたの？ まだ寝てていいんだよ」

宗治の振り向きざまに雨宮は唇を奪っていた。酒臭くも甘い香りを漂わせた初キスの味は余りに気持ちいいもので、思考回路が完全に停止するのに時間はかからなかった。雨宮の唇が離れた瞬間、宗治はその場にケータイを落とし気を失ってしまう。宗治にはその瞬間、何が起こったのかわからなかったのである。

あの晩、どうやって帰ったのかはわからない。ただ気づいたら自分の部屋のベッドの上にいて、二日酔いでがんがんと頭が痛かった。あの日のキスは夢だったのだろうか。雨宮からのメールにその話題が出てくることはなく、今までどおりの友達関係が続いていた。雨宮のブログを見ても友達からもらったと馬のぬいぐるみの写メがアップされているだけ。

もしあれが夢または妄想だったとしたらと思うと、本人に直接聞くことなんてできずにいる。仮に本当だとしても酔った勢いでしたものなら、恋愛感情ではないということにもなる。それが怖くて一歩を踏み出せずにいた。

あの日から三日後の今日は新鋭社の最終面接。スーツを着込みバッグを片手にもう通い慣れた水道橋駅に面接時間の一時間前に到着する。今日で辛く長かった就活も終わる。そう思うと最終面接も怖くなかったし、堂々と胸を晴れた。何も恐れることはない。今自分にできるすべてを出し切れば、結果はおのずとついてくる。宗治はそう言い聞かせながら、近くのマックで暇を潰すことにした。

アップルパイを頬張りながらケータイの就職情報サイトを見てみると、一件のメールが入る。雨宮からだ。面接頑張つてねという言葉と絵文字のハートマークとともに、変顔をした雨宮の写メが添付

されていて、思わずオレンジジュースを吹き出してしまった。おかげで肩の力の抜けた宗治は自分自身に気合を入れてやる気を漲らせた。

十分前に着いた待合室には、宗治のほかにも六人の受験者がすでに椅子に腰掛けていた。新鋭社の平均採用人数は五名。よほどのミスをしていない限りはその中の一人に入れるはずだ。いつもは緊張でカラカラになる喉も、この日ばかりは早く自分の番が来ないかと待ち遠しくて仕方なかった。この中のほとんどが来年の春から一緒に働く仲間なのだ。今までのギスギスした雰囲気とは違い、みんなリラックスして交流を図ろうとしている。

「君はどこ出身？」

「……天智大です」

「本当？ 私も天智なんです。よかった、仲間がいてくれて」

心理学科出身だという女性は気兼ねなく宗治に握手を求めてきた。みんなが希望に満ち溢れて、キラキラした瞳をしている。出版社に勤めることというのは多くの大学生にとって憧れで、最終面接まで残っているということはずっと夢にまで見た舞台なのだ。そんな憧れの職業に、今自分たちが飛び込もうとしている。数々の難関を乗り越えて、ここまでできた。わくわくしないはずがなかった。

時間になると、事務のお姉さんが一人ずつトップの待っている面接会場に案内する。面接会場といっても、オフィスの中の会議室である。一人、また一人と呼ばれ、待合室にだんだんと人がいなくなる。出てくる者は皆笑顔で手を振って帰っていく。残すは先ほど話しかけてきた同じ大学の女性と宗治だけになったところで、宗治の名前が呼ばれた。

「頑張ってくださいね」

彼女のハスキーな声に、宗治は親指を立てて返事をした。

失礼しますと言って中に入ると、眼鏡をかけたがたいのいい大柄の中年男性と、ほっそりとした髭面の男性と、濃いめの化粧で年齢をごまかしているのであろう太めの中年女性の三人が面接官として

テーブルに座っていた。順に社長、営業部長、編集長だと挨拶される。

最終面接までくると、やはり独特な雰囲気で、自分をしっかり持っていないと飲み込まれてしまいそうだった。まるで裁判の調停に立たされて尋問されているかのようだ。お座りくださいの合図とともにパイプ椅子に腰掛けると、営業部長から質問が始まる。

「今日で最後の面接となりますが、今までを振り返ってみてどう思いましたか？」

「はい。今まで面接して自分が試される場だと思っていました。自分の人間性をほんの数分の中で判断してもらう場所だと。けれど本当は違いました。今ではお互いの相性を見つめ合う場所だと思っています。それがわかったことで、面接が楽しくなってきました。もっともつと御社で働きたいというイメージがはっきり見えてきたのです」

宗治は自信満々に笑顔ではっきりと言い切った。編集部長がペンを走らせているのを見る余裕すらあるほどだ。営業部長は、これまでの面接内容が書いてあると思われる資料を目で追いながら質問を続ける。

「雑誌編集と文芸書籍編集職を希望されていますが、改めて動機を教えてください」

「はい。私は大学で犯罪社会学を専攻してきました。なぜ犯罪が引き起こされるのか。犯罪者の心理を探り、また動機のない犯罪も実際には多いことを知りました。犯罪には様々な要因があり、一面的に見ただけ、報道の一部を知り得ただけではすべてを説明できない。そうした側面を知ったからこそ社会ニュースについての取材と執筆を自分の目で見て判断していきたいと思い、雑誌編集職を希望しました」

「わかりました。では文芸書籍編集職については」

「はい。私は読書が趣味で、特に小説を中心にたくさんの本を読んできました。そこで自分の手で多くの人に手にとってもらえる本を

作っていききたいと思いました。キャッチコピーや帯の文章など編集次第でもっと売れる作品はたくさんあると思うんです」

宗治は予め用意してあった回答に力を込めて、饒舌に言葉を並べる。面接慣れしてきたからか緊張はなく、面接を楽しんでいた。するとこれまで黙っていた編集部長の女性が、口を開く。

「もっと売れる作品とは具体的に何ですか？　またどうすれば売れるようになると思いますか」

「はい。坂上栄一さんの『語録道中』は読者と一緒に旅をしていくという感じで、読者を置いてけぼりにしがちな冒険小説の中でも描き方がうまいと思いました。坂上さんの作品は今まで経済小説がメインだったがために、初めての冒険小説に手をつけたということで敬遠されがちで、賛否両論の読まず嫌いが増えたように思います。もっとうまい宣伝ができていれればと思うと、残念でなりません」

「宣伝ができていれればということは、営業でもいいのではないですか」

「……えっ？」

宗治にとって思わぬツツコミが入った。これが圧迫面接というものなのだろう。圧迫面接はストレス耐性や予想外の質問が来たときの切り返しや、冷静に対応できるかを試すと聞く。二次面接まではこういうものもあるのだと思って臨んでいたが、最終面接を営めていた宗治は、一瞬冷静さを失った。落ち着かせようと頭の中を整理し、深呼吸をする。

「たしかに宣伝に関しては営業の仕事です。営業によって注目度が上がってくれなければ、たとえいい本だったとしても手にとってもらうことはできません。しかし、そこで手にとってもらってから編集の仕事です。いくら完璧な宣伝ができていたとしても、中身が伴っていなければ評判による売り上げの上昇にはつながりません。私は直接作家やライターの方たちと二人三脚で作品を作っていくと考えています。だからこそ編集という仕事にこだわっています」

社長が黙々とペンを走らせ目を光らせているのが少し怖くて、面接官から一瞬目を逸らしてしまった。自分でも掌に汗をかいているのがわかる。あれだけリラックスしていたのが嘘のように冷や汗もかき始めていた。

「雑誌編集や文芸編集を扱う出版社はほかにもたくさんあると思います。たくさんの方の企業がある中でなぜ弊社を希望されましたか？」

「はい。御社は決して一流出版社とは呼べないです。しかし、だからこそ新しい事業を展開させるのがうまい。私は御社の『週刊新鋭』が好きで毎週購読しているのですが、話題のニュースをクイズ形式でまとめたり、ネット投票によるコラム二ストの入れ替わりは他社より先にいつていて大変面白いです。新しい仕掛け人という御社だからこそ、やりたいことがたくさんあると考え、御社でなければダメだと考えました」

いける。宗治の口調は再び滑らかになっていた。志望動機は完璧だ。ここに入りたいたいという思いから自然と出てきた言葉だった。自信を取り戻し、宗治は拳に力が入った。面接官も納得した表情を浮かべている。ここまで黙っていた社長が、にこやかな顔で質問をぶつけてきた。

「あなたが弊社に入って何か得だと思えるセールスポイントを教えてください」

「はい。私は人の意見をまとめるのが得意です。他人の意見や価値観を抽出し、話をよりわかりやすいように噛み砕いていくことができます。なにより頼られるのが好きで、今までリーダーの補佐という役割でゼミでも話の結論を出すことをやってきました。これは人との話し合いが多い出版社では特に役に立つものだと思っています」

宗治がやりきったという顔を見ると、またもやこの答えにつつかかってきたのは編集部長の女性だった。どうやらこの編集部長は、圧迫質問をする憎まれ役担当のようだ。

「まとめるのが得意ということですが、もう少し具体的にわかりやすくおっしゃっていただけますか？」

「えっと……ゼミではグループでの発表の際、私がみんなで調べた情報をまとめて原稿を仕上げました。ゼミの先生には、問題の論点をはっきり示されていて面白いとの評価をいただきました」

頭の中の記憶をなぞるように、的確な言葉を搜していく。面接官が欲しい答えを導き出すように。女性編集長は大魔神が一瞬見せるそのような笑顔を作って、宗治の目を見る。

「聞き上手ということですね。でもその場合裏を返せば積極性に欠けるということでは？」

「いえ、そんなことは……どんなことも表裏一体で……長所も短所も両面があるんだと思います」

面接官の攻撃に萎縮して、たどたどしい返事しかできなかった。声も次第に小さくなってきている。次で挽回しようと気持ちの切り替えをしようというところに、社長からの救いの手を差し伸べる質問がきた。

「出版社で働くということは体力が要りますが、体力には自信がありますか？」

「はい、あります。大学では健康のために、十階以上で講義があるときでも階段を使って上っていました」

「何かスポーツやアルバイトのご経験は？」

「……何もないです」

ここで怯むわけにはいかならない思いながらも、嘘のつけない性格が邪魔をした。トーンが再び低くなる。

「それで体力に自信があるという根拠は？」

まただ。編集部長の女性は、宗治が答えにくい質問をあえて圧迫で攻めてくる。まるで弱点をわかりきっているかのように的確に。宗治の頭の中はこんがらがってきて、段々とパニックに陥ってきた。そして何かの糸がぷつんと切れたような音がした。

「お言葉ですが、体育会系の人が優秀というのは偏見だと思います。文科系の人をバカにしているとしか思えない。運動ができなくて何が悪い」

自分でも何を言っているのかわからなかった。気づくと口からぞろぞろと本音ともいうべき言葉が虫のわいたように溢れ、発せられていた。面接官も呆然と圧倒されていて、ただこちらの話を黙って聞くほかなかったようだ。面接終了を知らせる結構ですの声を聞くまで、宗治には記憶がなくなっていた。

「草野さん、どうでした？」

会議室を出たところで次の面接を待っていた同じ大学出身の女性が声をかけたが、宗治に返事がないのを見て察したようだ。それ以上話しかけてくることはなかった。宗治は自分でも何が起こったのかわからないまま、俯いた状態で新鋭社の社屋を後にした。

誰だって自分のことがかわいくて

誰だって自分のことがかわいくて

翌日にかかってきた新鋭社からの電話はやはり不合格。長々と不採用の理由を申し訳なさそうに告げられるのが、惨めで仕方なかった。言われなくてもわかっている。同情はやめてくれ。自分のダメさ加減を突きつけられているようで、自分で自分が嫌になる。誰とも今は関わりたくなかった。一人になりたい。この一週間、誰からの電話もメールも無視し、学校や就活にも行かずに、家に引きこもり状態になっていた。

雨宮にだけは不合格のことをわかってもらいたくてメールを送ったが、一向に返信はない。返信に困り、今はそつとしておこうという優しさなのかもしれない。だけど、寂しい気持ちが先行していた宗治には、それが裏切りのように思えて仕方なかった。

今日は家族も出掛けていて、誰もいない日曜日。それをいいことにベッドにもぐって寝ていると、どこから女性の呼ぶ声がした。布団をひっぺがされると、そこにいたのは白いキャップとボーダーのTシャツに迷彩柄のショートパンツを履いた、ほのかがいた。

「ほら宗ちゃん、もう朝だよ。さっさと着替えて出掛けよう」

「ほのか、何しに來たんだよ。出掛けるって何処へ？」

「いいから早く」

急かされるままに、宗治は後ろを向いて立っているほのかの背中を見ながら、急いで身支度をして家を出た。落ち込んでいる宗治とは裏腹に、ほのかはうきうきした気分を充滿させて、宗治の手を引っ張りながら歩く。

日の光に当たるのも一週間ぶりだった宗治にとって、眩しく当たり前のように歩いていた道も違って見えた。こうしてほのかと出掛けるのも、あの映画の日以来だ。宗治は自分が振って傷つけてしまっ

たことで後ろめたさがあつたが、ほのかはそんなこと気にしてないとでもいうかのように明るかった。

「そんなに急いでどこ連れてくんだよ」

ほのかは笑顔を浮かべるだけで答えず、黙々とバスに電車と乗り継いで、目的地を目指した。連れて行かれて降り立った駅は、壮大な山が宗治たちを出迎えるように広がっていて、夏に近づこうとしているこの季節には蒸し暑さを感じた。

「昔ね、今のところに引越してくる前、家族で山登りしたんだ。

誰が一番に山頂まで辿り着けるか競争ってね。そのときはいつもお兄ちゃんが一番で、まだ小さかった私は途中でおんぶしてもらってすごく悔しかった。それで今日再挑戦しようと思って」

「それで俺を巻き添えにしたのかよ」

宗治は眠い目をこすりながら、とがった言い方をした。

「だって、宗ちゃんが一番誘いやすいんだもん。どうせ暇でしょ？」

「

「そうだけど、何か嫌だな。その言い方」

なんだかほのかにはめられた気がした。それでももう長い付き合いだ。口ではそう言っているけれど、落ち込んでいる自分を元氣付けようとしていることはすぐにわかった。宗治は照れ隠しに重そうに持つピンクのリュックサックを代わりに背負い込むと、ほのかの手を逆にぐいと掴んで前を進んでいく。ロープウエーに揺られながら、ほのかの表情はにこにこしっぱなしだった。

「こうして宗ちゃんと出掛けるのって久しぶりだよな」

「そうだな」

宗治はずっと考え事をしながら窓の外を眺め、たそがれていた。これから先、自分がどうなっていくのか見えない。見えない未来に向かうことほど怖いものはない。浩太のように完全に開き直って前向きにいけたらどんなに楽だろう。宗治にはそんな勇氣は持ち合わせていなかった。

「またそんな顔して。そりゃ私は雨宮さんの代わりにはなれないけ

ど、つまらない顔してたらせつかくの楽しいことも台無しだよ。宗ちゃんには笑った顔が一番なんだから。ほら笑って。……そう、ちよつときこちないけどそんな感じ」

無理やり口角を上げて作った笑顔はどこか余裕がなくて、それでもほのかの屈託ない無邪気な笑顔につられた。ほのかといると、等身大の自分でいられる。ずっと一緒だったことから来る安心感があつた。ほのかが持ってきたポテトチップスを頬張ると、無理やりにも自分に喝を入れる自分がそこにあつたのである。

約八百メートルはある山頂は、遠く険しい。いくつか舗装されて階段のようなものはあるものの、土に埋もれてぬかるんだ地面は、滑りやすくなっている。根っからの文科系で運動嫌いの宗治は、生まれてこの方登山とは無縁の生活を送ってきた。本当のところ、体力には自信がなかった。ほのかのリュックサックを背負ったままでは、慣れた足並みですいすいと登っていくほのかに連いていくのがやつとである。

「ほらほら、早くしないと置いてくよ」

「ちよつとは手加減してくれよ。こっちはほのかみたいに鍛えられてないんだぞ」

「何だらしないこと言ってるの。もし辿り着けなかったら斗真君たちや雨宮さんにほのかより体力ないって言っちゃうよ」

タオルで汗を拭きながら、冗談まじりにほのかの毒を吐く。そんな顔を見て、宗治からは自然と笑みが零れていた。気持ちが軽くなると、不思議と体も軽くなる。宗治は一気に力が沸き、ほのかに導かれるまま先を急いだ。

「ちよつとあそこで休憩していこうか」

そうつほのかの指差した先には一軒の出店があつた。中間地点に構える、小さな休憩所とでもいった感じか。還暦を迎えようかという店主からウーロン茶を買い、二人はベンチに座る。

「どう、初めて登山した感想は」

「大変だけど、たまにはこういうのもいいね。気持ち晴れやかに

なるっていうか」

ほのかは自然に笑う宗治を見て、話しづらそうに俯き加減で言葉をかけた。

「でしょ？ …… 実を言うとね、心配してたんだ宗ちゃんのこと。

面接のこと、全部知ってたんだ。最終面接で同じ大学の心理学科の子がいたの覚えてる？ 美里ちゃんは私の友達なんだ。それで合格の電話もらったとき気になって宗ちゃんのこと聞いてみたんだって」

「…… そっか。バカだよな、俺。受かるもんだと思ってたから浮かれて、圧迫面接なんかに負けちゃって、切れちゃって。せつかく目前まで取れていたチケットを逃しちゃうんだからさ」

苦笑いするしかなかった。ほのか相手に気持ちをこまかしても仕方がない。何でもお見通しなのだ。同情されることで、ここまで自分の不甲斐無さと惨めさを痛感させられるなんて思わなかった。それならまだ放っておいてくれたほうがマシだ。自分が自分で悔しくて仕方なくて、可愛そうな物語の中で悲劇のヒーロー像を産み出している。そのことが今この瞬間に気づかされた。

「宗ちゃんはバカなんかじゃないよ、バカなんかじゃない。誰だっ て自分が一番かわいくて、守ろうとする。それは何も宗ちゃんだけじゃないんだよ。圧迫面接でプライドを傷つけられたかもしれない。自分が嫌になったかもしれない。だけど人はやめたりできないんだよ。自分で自分を殺すことはできないんだよ。だから怖くても前に進まなきゃいけないんだよ」

「…… わかったような口叩くなよ。同情してるつもりかもしれないけど、こっちはいい迷惑だ。偽善もいいところじゃないか。俺はお前のそういうところが昔から嫌いだったんだ」

「私はそういうつもりじゃ……」

宗治は立ち上がり、止めようとするほのかの手を振り解いて、来た道をなぞるように下っていく。わかっていた、本当は自分が悪いんだって。わかっていた、ほのかの優しさを。心の奥底でもう一人の自分が泣いていた。自分自身でさえも信じられない自分がいる。

自分を偽る自分がいる。孤独になるのが怖かったばくは、今独りになったのである。何もかも棄てることで。

次の日の夜、父に居間に出てくるようにと呼び出された。母が引きこもって大学にも就活にも行かないどころか、家から出ようともしない宗治を心配して告げ口したようである。父は大手食品メーカーに勤める営業部長。典型的なA型で、昔気質の頑固で厳格な父親だ。人望が厚く、よく部下や同僚に飲み会に誘われては能力を引き出す手腕に長けていると、自慢話のように父に聞かされていた。立派でふくよかな体型に無精髭で、貫禄がありオーラを放っていることに關しては宗治も尊敬に値すると思っている。

「……入るよ」

「宗治か、そこに座りなさい。最近どうなんだ、その、うまくいっているのか」

「お母さんから聞いてるんでしょ？ 就職活動がうまくいかなかったことも、家に引きこもってることも全部」

父は真剣な眼差しで、暗くなつていく宗治の表情を見つめていた。久しぶりに見た父の顔は以前より輝きを失っていて、年を取ったように感じる。仕事に家族のことで心労も重なり、疲れているのだろう。そんな父に、何の言葉も何の恩返しもできていない。自分はなんて親不孝者なのだろうと胸が痛んだ。

「父さんは何もお前を責めるつもりはないし、怒るつもりもない。今は百年に一度の世界的な大不況と言われる時代だ。就職するのが難しいこともわかつてる。自分の人生、一度きりの人生だ。どう過ごそうがお前の勝手だ。ただどな、後悔するような道には進まないでほしい。お前が賢いことはわかつてる。それは父さんも誇りだ。しかしお前はいろいろ考えすぎて悩んでうちに、閉じこもってしまったのが欠点だな。何度壁にぶち当たったっていいじゃないか。誰だって、最初は失敗ばかりなんだ。その失敗の中から成功を学んでいく」

「……お父さんも？」

父はにこりと笑うと、深くうなずいた。普段の怒る父と、時折見せる優しい父。叱るという行為は、相手との信頼関係が成り立っていないと効果がない。叱ってばかりでも、慰めてばかりでもいけない。普段いい上司を演じる父には、そのメリハリや距離感はわかっていた。だからこそ時に厳しく、時に優しい理想の父親がそこにいる。

「父さんの時代は、バブル全盛期で今とは逆に企業が優秀な人材をいかに確保するか争奪戦が激しかった。たしかに一部上場企業に内定をもらうことは難しかったが、選びさえしなければどこにでも入れたんだ。だからこそ今みたいに安易にフリーターやニートを選択する人はほとんどいなかったし、いたところで今以上に非難された」

「でも就活をまじめにやってなくても就職できるなんて羨ましいよ」

宗治は皮肉まじりに鼻で笑って、父の話に言葉を挟んだ。父の目は鋭くなる。

「そう思うか？ そうなのかもしれないな。あの頃の世代の人たちは多くが生活するためにどこかで働かなきゃと思っていて、今みたいに志望動機なんてなかったかもしれない。ただひたすら、がむしやらに働くだけだった。でもその間に適当にやってきた人たちは今やリストラ対象者だ。優秀といっても、今みたいに人物重視で見えていたわけではないから、どこどこ大学出身だからというだけで勝手に優秀な人材と決め付けた。そこで産まれてしまった多くの無能な社員が今首を切られている」

少しでも父の時代に生まれたかかったと思った自分を恥じた。あの時代はあの時代で厳しかった。今のようには許されなかった。まるで産業廃棄物のように、使い捨ての駒とされてきた。それでも自分は会社のためにいなくてはならない存在だと思い込むことで、余計な雑音をシャットアウトしてきたのかもしれない。

自分はどうかだろう。怖いから就活から逃げて、自分から逃げて、甘えているだけじゃないのか。そう思うと、なんだか申し訳なくなっ

てきた。

「働くっていうのはな、お前が想像してる以上に大変なんだ。父さんは大切なものを守るために人は働くんだと思ってる。それは何も家族だったり、生活のための金銭だったり、建前だったり、友達だったり、恋人だったりといった目に見えるものだけじゃない。好きでいられる自分自身だったり、誰かに好かれる客観的な評価だったりといういろいろだ。働くことで見えてくることだって多いんだ。嫌いな自分を好きな自分に変えることだって、できる。お前も働くようになればわかると思うんだが」

宗治は今改めて父の偉大さに圧倒されていた。父が自分の父でよかったと、心の底から思えた。宗治とは違い話し上手の父。その言葉ひとつひとつには説得力がある。だてに三十年以上も営業の仕事はしていない。人間関係を円滑に進める術を心得ていた。働くことで自分を変える。それは父自身の体験談のようで、深みと重みがこもっていた。

父は決して一流大学を出たわけではない。それどころか大学すら出ていない。高卒で大手食品メーカーに就職できたのは、たしかに時代というのもあったのかもしれない。だけど、それ以上に父は努力してきた。だからこそ、今の営業部長という役職に就けている。会社人間にもならず、家族をこんなにも大切にできる人がどれだけいるのかは知らない。けれど仕事をする意味もすべて家族と自分を守るためにやってきたこと。父のような生き様は理想の姿だった。

「……ありがとう、お父さん。なんとなくだけど、勇気が湧いてきたよ。また少しずつだけど、就活を再開してみようと思う」

「そうか。あんまり心配かけるなよ。母さんも明美も心配してたんだからちゃんと言っておくんだぞ」

大きくうなずいて立ち上がり後ろを振り向くと、襖からこっそり覗く母と妹が怪しい笑みを浮かべているのがおかしくて、腹の底から笑いがこみ上げてきた。「もう大丈夫だから」と言っただけの明美の顔を撫でると、なぜかわんわんと泣き出してしまい、宗治は慌てて

明美の背中をさすっていた。

あの晩の後、宗治はみんなにメールを送った。ほのかにごめんと送ると、「また遊ぼうね」と返事が来た。宗治と違つてくよくよ悩まない典型的なO型のほのかには、心配無用だったようだ。

雨宮からは相変わらず返信がない。最後のメールのとき、卒論で忙しくなると言っていた。日課となっていた毎日のメールができないほど卒論に負われているのかもしれない。内定が出たとき一緒に喜んでくれればそれでいい。距離を置くことで、お互いの気持ちがつきりすることもある。宗治はとにかく就活に集中することを心に決めた。

引きこもっていた間に、いくつかの進んでいた選考は終わってしまっている。一からの出直しだ。一度とはいえ、後一步で内定というところまで辿り着けたのだ。自分に自信さえ持てればそう遠い未来ではない。六月に入ると、徐々に求人も減ってくる。宗治は今までマスコミ一本だったのを方向転換し、他業界へのエントリーも始めていた。

とはいえ現実は一筋も通らなかった。他業界にエントリーしたところで、志望動機がない。マスコミに入りたいという思いが強すぎるがために、ほかの職業で働いている自分の姿がイメージできない。そんな気持ちのまま書かれたエントリーシートは、当然のことながら薄っぺらで、書類選考すら通るのが稀。通ったところで、面接でうまく伝えられない。受ける企業の九割が、結局はマスコミ業界に絞らざるを得なくなっていたのである。

そんな疲れ切った毎日を過ごすうちに月日は流れ、七月の半ば。大学のテスト週間に入ったが、宗治は卒論ゼミしか取っていないためテストはない。事実上の夏休みである。いつもの大学近くのカフェで、同じくテストのない斗真と大隈とで話しこんでいると、久しぶりに雨宮からのメールが入った。

「なんだよ、噂の彼女からか」

「そんなんじゃないよ」

「で、何て？」

「今から逢えない？ って」

ケータイ画面に映った由紀子の後のハートマークに、斗真と大隈はふふふと不気味な含み笑いを浮かべて、宗治の顔を覗き込む。

「なんだ、返信来ないとか嘆いてたから破局期待してたのに」

「そろそろだな。ここは大きく彼女ゲットしちゃえよ」

「何だよ二人とも、面白がって。そりゃ雨宮さんのことは好きだけど……」

「好きだけ何？」

背筋が凍る思いがした。斗真や大隈とは別の柔らかく高い声が、頭上から聞こえたのだ。後ろを振り返ると、そこにはノースリーブにチエックのミニスカート姿でソフトパーマをあてた雨宮の姿があった。宗治は慌てて中腰を浮かし、雨宮のために席を作る。にやにやした二人の表情を見て、後ろに雨宮がいることを最初から気づいていたことがわかり、宗治は二人をぎんと睨みつけた。

「来るなら来るって言ってくればよかったのに」

「久しぶりだったから驚かせようと思っちゃって。お元気でしたか？」

「そりゃもちろん」

二人の世界を創り出していると、二人からの視線が目に入った。今にも吹き出しそうなのを我慢して、にやけた顔でじつと眺めている。

「想像以上にかわいいじゃんか。俺たちにも紹介してくれよ」

「草野君のお友達ですよね？ 私、聖女大の雨宮由紀子って言います。草野君とは就活で出会ってよくしていただいて」

「聞いているよ。俺は円谷斗真、宗治とはゼミが一緒ってことで長かつるんでる。でこっちが大隈武」

「よろしく」

「皆さんのことは草野君からメールで聞いています。すっごく仲の

いいグループだって」

「……そりゃあどうも」

爽やかに笑みを浮かべる雨宮に対して、斗真は謙遜の意味も込めた心のこもらない返事をした。それを見た大隈は、何か思いついたように一人メールを打ち始める。何かに動かされるように、親指はかたかたと音を立てている。

「ところで雨宮さん、この後暇？」

「えっと……これから少し草野君に話があつて」

「武、何企んでるんだよ」

大隈はへらへらと笑うだけで、聞く耳を持たない。大隈そっちのけで、三人で話し始めて数分、大隈が大きな声を上げた。ブーブーとケータイの着信音が鳴り響いている。

「決まったよ。じゃあ行こうか」

「話が見えてこないんですけど。行くつてどこへ？」

「……カラオケ」

大隈はさも当然とでも言うかのように、さらりと目的を告げた。典型的な体育会系の大隈には、こうやってノリで物事を進めることが間々ある。もう慣れたし嫌いではないが、計画性のない行動は典型的なA型の宗治は時にイライラする原因となっていた。

四ツ谷から総武線を経て新宿に降り立ち、歌舞伎町を抜けていった先に、大隈の行きつけのカラオケボックスはあった。閉館したコマ劇場を背に、交通量の多い道路から走行音が鳴り響いている。派手な外装は、まるで富裕層が毎晩通うカジノを連想させるような造りだ。エレベーターを三階で降りると、待合室ともいうべきソファの上に、ほのかと容子が座っていた。宗治は驚きのあまり、一昔前の芸人がやっていたようなずっこけ方で足を滑らせる。

「ちよっと待て。なんでほのかがいるんだよ」

「何でつて……、大隈君に呼ばれたからに決まってるじゃん。それとも何。宗ちゃんは今がめちゃダメな理由でもあるわけ？」

「そっというわけじゃないけど」

宗治はちらつと容子に挨拶している雨宮を見た。雨宮は宗治と目が合うと、こっちに近づいてきて、会釈をする。

「星川ほのかさんですよ。私、聖女大の雨宮由紀子って言います」

「あなたが雨宮さん？ 宗ちゃんから聞いてるよ。ふーん、そういうことか」

ほのかは怪しい好奇の目で、宗治を見た。宗治は突き刺さるほのかの視線を避けるように、眼を泳がしている。そうこうしているうちに、受付していた大隈が大声を上げて宗治たちを呼んだ。

「三階だつてよ。早く行こうぜ」

エレベーターに揺られ三階に着くと、一番奥の真正面の部屋が宗治たちの番号だった。円状に囲まれたソファとテーブルに、客の顔を色鮮やかに照らすミラーボール。角には歌本とタンバリンも設置されている。壁には何点以上取るとサービスがあるとか、お勧めのメニューだとかのPOP広告が貼られていた。荷物を置き女子を部屋に残したまま、男子はドリンクバーを取りに行く。

「武、ほのかまで呼んで何企んでんだよ」

「何って別に。浩太が来れないのは残念だったけど。もしかして雨宮さんと星川がバトるとでも思ってたんの？」

「……そんなんじゃないけど」

宗治は語尾が弱くなり、大隈から目を背ける。そんな宗治の肩にぽんと斗真は手を置いた。

「心配すんな。星川は間違ったことは絶対しない子だよ。それはお前が一番わかってんだろ？」

宗治は深くうなずいた。雨宮とほのかの分だと言って、渡されたウーロン茶を持って部屋に戻ると、女子三人は仲良く談笑の真っ最中だった。宗治はその様子を見て杞憂に終わったことにほっとし、肩を撫で下ろす。

「お待たせ。ほら、女子チームからじゃんじゃん曲入れちゃって」「それじゃ私からいきます」

そう言つて、ほのかはノリノリで最近流行のポップソングを選曲する。みんながタンバリンや手拍子で盛り上げる中、宗治は隣に座る雨宮に声をかけた。

「ごめんね。俺の友達こんなばっかでさ」

「うっん、とっても楽しいですよ。草野君は素敵なお友達に囲まれてるんだなつて。星川さんつておもしろいですね」

「ほのかと何か話したの？」

「うんと、私のこといろいろ聞かれたかな。何か私がどういう人なのか探つてみたいで」

宗治にはすぐにほのかの魂胆がわかった。まるで嫁のことをふさわしいかチェックする姑さんだなと思ひ少しむっとしたもの、ぐっところえて口角を上げる。

「そう言えば話があるつて言つてたけど」

「うん、そうなんだけど帰りに話すね。今は楽しもう」

雨宮は端末を手につつて、操作し曲を入れる。宗治はこの空気になんか馴染んでいないようで、少し寂しさを感じていた。なんとも言えない喪失感と虚無感に襲われる。それはただ雨宮を独占したいというわがままでしかなかったのかもしれない。いたたまれない思いのまま無理に笑顔を作つては、場に溶け込んでいるように繕うのが精一杯だった。

二時間を超え終盤に向けて盛り上がつてくると、少しずつ疲れが見え始めてくる。大隈と斗真はお酒も入り、高いテンションだけで黙々と歌い続けている。

「ちよつとトイレ。うんと、宗ちゃんもついてきてくんない？」

「何で俺が」

「いいから早く」

宗治は言われるがままに、ほのかと一緒にそそくさと部屋を出ていった。ほのかはあえてなのか女子トイレではなく、男女兼用の個室トイレに入つて宗治を外で待たせる。

「一応お前も女なんだから、連れションとかしたら怪しまれるだろ」

「何言つてんの。昔は一緒にお風呂まで入った仲じゃん」

「お風呂って……何年前の話だよ」

宗治が照れていると、ほのかはくすくすと笑う。長い間ほのかの
ことを見てきているけれど、いまだにそのすべてをわかるには困難
を究めた。横を通り過ぎてトイレに入っていく人たちの視線が痛い。
「雨宮さんが言ってたよ。宗ちゃんは何でも真剣に受け止めてくれ
るって。今の人たちって興味のあること以外はスルーしちゃうけど、
宗ちゃんは違う。どんな些細なことにも一緒に笑って、一緒に泣い
てくれる人だつて。そんな人だから惹かれたんだろうなって」

「……そんなこと話してたのかよ」

褒められるというのは悪いことではない。その実は本人に言われ
るよりも第三者に言われるときのほうが嬉しいのだ。けどどこか
恥ずかしくて、むず痒い。人はどうして怒られると嫌な気分になる
のに、褒められても反発してしまうのだろう。

「彼氏はいないってさ。よかったじゃん、きつとうまくいくよ。雨
宮さん、すごいいい子だし。うん……もうさ、うじうじしてないで
告ちゃえよ」

「ほのか、ひよつとして泣いてるのか？」

鼻をすする音がドア越しに聞こえてきた。なんだか自分が泣かし
ているようで罰が悪くて、今すぐこの場を離れたいのを我慢するよ
うに目をつぶって後ろを向く。それを見た女性二人組が噂話をして
いるのが耳に入ってきて、居心地が悪い。

「泣いてなんか、ないよ……ただ私は宗ちゃんに幸せになつてもら
いたいだけ。女の子泣かせちゃ……ダメだからね」

涙声で一つ一つの単語が濁音になっていた。ほのかの気持ちに痛
いほどに伝わってきた。好きだからこそ相手に幸せになつてもらい
たい。そう踏み出す勇氣はどれほど難しいか宗治にはわからない。
憎しみも悲しみも越えて相手を想う優しさほど強いものはない。宗
治はほのかの想いひとつひとつを受け止めながら、自然ともらい泣
きしていた。

部屋に戻るともう終了の時間だったので、慌てて支度を済ませて一階に降り支払いを済ませた。ほのかの目の周りの化粧が落ちていることにみんな気を遣ってかスルーしてくれたのは、思いやりのように感じられた。

「俺らはここらで帰るわ。雨宮さん、また遊びましょう」

「いえ、こちらこそ」

酔ってふらつく大隈を斗真が抱えて、駅の方へ消えていく。その後ろを容子がついていつていた。前を歩くほのかがくると後ろを振り返る。

「それじゃあ私も帰ろうかな」

「大丈夫か」

「何心配してんの。大丈夫に決まってるじゃん。駅すぐそこだよ？ まだまだ宗ちゃんに心配されるほど落ちぶれてないつもりだよ、私。そんなことより雨宮さんをちゃんと送ってあげるんだよ」

ほのかはアイコンタクトを送ると、背中を向けて左手でさよならを言っ、先に行く斗真たちに追いつこうとダッシュで走り去っていった。ぽかんと呆氣にとられた宗治と雨宮は、お互いの顔を見合わせて顔を赤くする。

「何なんだろうね」

「……さあ」

二人の間に一瞬の沈黙の間ができる。重くどんよとした空気は二人の間の距離を一層遠くさせた。その一步を埋めようとすると、二人の声は重なりを見せる。「あのさ……」と息ぴつたりになつた言葉。くすつと笑いを誘った。

「あの……話って何？」

「うん、私も今話そうと思ってたところなんだ。草野君って星川さんのこと好きなの？」

雨宮の視線は、遠のくほのかを追っていた。これは遠回しに気持ちを伝える合図だろうか。踏み切りで信号待ちしている人の気分だった。

「ほのかのこと？ ほのかとはずっと昔から一緒にいて、大切な友達だと思ってる。腐れ縁って言うけど、そんな泥臭いのとは違って友達を超えた信頼関係って言うのかな。絆で繋がってるんだ。けどそれだけ。恋愛対象として好きっていうのとは違うんだよね」

「……そうなんだ、よかった」

雨宮が零す笑顔と、その一言。宗治は確信していた。もう迷わない。もう逃げない。雨宮は自分の言葉を待ってくれている。言うなら今しかない。頭で考えるよりも早く、口が宗治を動かしていた。「俺、雨宮さんのこと好きだよ。言葉で表すのは難しいんだけど、一緒にいるとドキドキしてどう喜ばそうって考えてる自分がいる。君の笑顔を見ると、頑張ろうって思える。君のメールが来ると、どうしようもなく胸が熱くなる。雨宮さんに出逢えてよかったと思ってるよ」

「そうなんだ。……嬉しい。そういう風に思ってくれて。私もね、同じ気持ち」

雨宮がした照れ笑いは今まで宗治に見せたことのない表情だった。今までより優しく、今までより等身大な笑顔が溢れている。夜風になびく向日葵のように、温かく明るい顔だった。

「僕の君になってくれないかな？」

「もちろん。これからよろしく願います」

雨宮は宗治に体を預け、抱き合った。夏の夜空にライトアップされた二人だけのステージは、お互いがお互いを必要とするように支え合っている。二度目のキスはあるときよりも甘く切なく、大きな意味付けを持って誓いの種を育んでいた。

厳しい現実

厳しい現実

あの日を境に、雨宮とはメールよりも電話のほうが多くなっていた。声が聞けるだけで今まで足りなかった自信が湧いてくる。ひとりじゃないってことを思い知らされる。電話が嫌いだったことが嘘のように、なくてはならないものになる。恋の力は偉大だ。就活のない日に、お互い連絡を取り合って会える日が励みになっていた。雨宮の笑顔を見るたびに、恋愛しているということを実感して嬉しくもなる。

夏が始まると、就活もいよいよクライマックス。秋採用に突入する。秋採用を行うのは、大手か通年採用か春をあえて避けて秋採用のみ行っている企業かに限られる。就活前線のピークである三ヶ月に比べると、その半分あるかないかという求人。それとは反対に、春採用以上に本気で勝負を賭けてくる受験者。双方の間に大きな溝ができる。

それはそうだ。この機会を逃せば、ほとんどの人が就職浪人を選ばざるを得ない。就職浪人は新卒という恩恵も受けられず、かといって経験がないから中途採用枠で潜り込むのも難しい。事実上のラストチャンスであり、ここで勝ち組と負け組に分類されるといっても過言ではないのだ。

宗治は春に落ちた東経新聞社と斗真が就職を決めた慶朝新聞社の新聞社二社、RASのテレビ局、真実出版と回向舎の出版社二社の合計五社に賭けることにした。ここまでくると量よりも質で勝負。暇な時間は筆記と面接対策にすべてを尽くした。

八月中旬。みんなが最後の夏休みを満喫する中、第一関門がやってくる。RASの一次面接だ。番組制作の仕事でエントリーし、無事に書類通過を受けての面接の地は赤坂にあった。ライブコンサー

トやイベントを行うことで有名な赤坂サカスと赤坂ブリッツの隣に位置するR A Sの放送センターは高いビルになっていて、敷地内に入るとすぐに入社試験と書かれた立て看板がある。真夏のスーツに汗だくになりながら、宗治はほかの受験生と一緒に中に入って受付を済ませた。

百人はいるのではないかという受験生に簡単な説明があった後、流れ作業のように面接が始まった。パイプ椅子がきれいに並べられていて、順番が近づいてくるとそこに案内される仕組みだ。

今回の募集は番組制作職と営業職だけなので、男性が多いように見える。七対三といったところだろうか。一人当たり僅か五分の面接に、その五倍以上の待ち時間で緊張を誘う。宗治は空気に飲まれないうよう、自分の世界に入り込むことに集中した。

二人前の女子学生が面接ブースから出てきたところで、宗治の番号が呼ばれた。いつも通り、等身大で。面接として言うてはいけないN Gワードだけを避け、宗治は思いのままをぶつけて受け入れてもらう作戦に出た。

五分しかない面接の中ではインパクトが大事。じっくり長々と熱い志望動機で勝負するよりは、わかりやすく簡潔で印象に残るフレーズがあるほうがいい。ほかの受験生がやらない語り口であえて挑むことで、アバンギャルドな世界観を産み出す。これが功を奏すかどうかはわからない。だが他人と差別化するためには、こういう賭けも時に必要なように思えていた。一度最終面接まで行けたことで、自信がついていたからこそできたことも言える。

五分の面接の中で楽しんで挑めた。それだけで十分だ。結果は後からついてくる。面接が終わると、すぐにみんな海に出掛けている斗真に電話した。

「どうだ、就活は順調か？」

「まあそこそこって感じだな」

落ち着いた語り口で、ゆっくり話す。街の雑踏も、電車の去り行く音も、小鳥のさえずりさえも、切り取られた日常の断片として添

えられていく。

「そういうところ聞くと、余裕ありそうだな」

「焦ってもしようがないから」

「星川が心配してたぜ」

宗治はその言葉を聞いて、ドキツとした。雨宮と付き合い始めてから、ほのかとは一切連絡を取っていない。雨宮はほのかのことを知っている。宗治にとって、ほのかは切っても切れない縁だ。連絡を取り合うことで、雨宮との関係が悪化することを恐れていた。もちろん恋愛感情があるわけではないけど、どこか後ろめたさがあるのも事実だった。

「……あいつは心配性だからな」

「最近俺らのところに顔出さないけど、たまには顔出しに来いよ。俺らは明日までこっちにいます。お前、明日予定なかったよな？」

「そうだけど」

宗治の声はトーンが低かった。みんなに会いたくないわけじゃない。だけど怖かった。一緒にいると、一人だけ取り残されたような疎外感に襲われるんじゃないかって。自分に負けてしまうんじゃないかって。その重圧に耐え切れるほど人間できちゃいなかった。宗治はその胸の内を洗いざらい、親友である斗真にぶちまけた。斗真は宗治の話に相槌を打ちながら、真剣に受け止めてくれる。大人な斗真だからこそ、宗治は素の自分をさらけだすことができるのである。

「宗治、お前完璧な人間なんていると思うか？」

「……どうしたんだよ、いきなり」

宗治はぐくりと生唾を飲み込んだ。電話越しでも、相手の表情はひしひしと伝わってくる。今斗真が何か大事なことを伝えようとしているのは、容易にわかった。

「弱くない人なんていない。その反対に強くない人なんてのもいない。本当に強い人って、自分のことを強さも弱さも知ってて信じてやれるやつのことを言うんだと俺は思う。自分のことを信じられな

いやつに、他人を信じられるはずがない。その前に誰もついていかないよな？ 人は欠けてる部分があるからこそ誰かで補おうとし、前に進もうとするんだよ。他人と違うとか比べる必要なんてない。

お前はお前でいいんだよ」

「……斗真、ありがとう」

すつともやもやが晴れたようだった。斗真が言ったことは、ごく当たり前のことなのかもしれない。誰でも口にできるようなありふれた言葉なのかもしれない。そんな台詞じみた言葉だけど、その重みは計り知れないものがある。今まで斗真と過ごしてきたかけがえない日々があるからこそ、同じ言葉でもきつとほかの人から放たれるそれとは違うのだろう。自分を知ってくれている人から言われたからこそ響くのだろう。宗治は改めて出逢いの素晴らしさをかみ締めながら電話を切った。

「この問題は……」

来週から新聞社の秋採用筆記試験ラッシュが始まる。力になりたいと雨宮が宗治の部屋まで毎日通って筆記の勉強に付き合ってくれるのは嬉しいが、正直気が散って捗らなかった。今まで女性が部屋に入ったのは、家族とほのかくらいしかない。初めてできた恋人に振り回されて、どうも調子が狂っていた。恋人と自分との距離はどれくらい取ればいいのかわからない。

今日の雨宮は水色のノースリーブにミニスカート。軽く茶色く染まった髪から滴り落ちる汗は、艶っぽさを助長している。エアコンが苦手な宗治のために、扇風機で我慢しているのが申し訳なくて仕方なかった。雨宮の教え方はさすがに家庭教師のバイトをしているとあってうまいのだが、眩しい横顔を意識してしまつて集中力を欠いた。雨宮はとびっきりの美人というわけではないが、はつとさせられる魅惑的な香りを漂わせている。

「今日はこの辺で終わりにしましょうか。なんだか集中できてないね」

「そんなことないよ。明日も頑張るから、俺」

慌てて笑顔を作ると、雨宮も愛想笑いで返していた。お互いの距離感がまだ定まっていけない付き合い始めの時期だけに、微妙な空気が流れて動きが止まる。そこへその空気を遮るように、トントンとノックする音が聞こえた。

「お兄ちゃん、ちよつといい？」

宗治が軽く返事をする、入ってきたのは制服姿の明美だった。兄とは違い、ちやほやされ甘やかされて育ってきた妹は、派手で人付き合いもつまみ。あどけなさを残しながら整った綺麗な顔立ちとは裏腹に計算高く、都合が悪くなると逃げる癖がある。そんな生意気な妹だけど、何かがあると兄である宗治に頼るかわいらしいところもあった。

「へえ、これがお兄ちゃんの彼女か」

明美は入ってくるなりじろじろと四方から動き回って、雨宮のことを見回した。赤面して俯く雨宮から遠ざけるように、宗治は明美の肩を掴んでぎろつと睨んだ。

「明美、何の用かな？ 用がないなら、とつと出て行ってくれないかな」

「用がないなんて言っていないじゃん。ガنزのCD貸してもらおうと思って」

「だったら早く持ってけよ。いつものところに置いてあるんだから」

明美はぶつきらぼうにあたる兄の目を睨み返して、「こそごと棚を漁りだした。がさがさと散らかされるのが嫌で、結局はいつも宗治が探している間から目的のCDを手に取り手渡す。」

「これでいいんだろ」

「ありがと。……雨宮さんだっけ？ こんなお兄ちゃんじゃ大変でしょ」

「そんなことないですよ。すごく優しいし」

明美は目を丸くして、宗治と雨宮を交互に見比べる。

「優しい？ 私にはそんなとこ見せたこともないくせに」

「うるさいな」

明美が疑いの目を向けると、宗治は照れたように目線を逸らす。宗治が明美の背中を押してドアを出ようというところで、明美はくると振り返り雨宮の顔を見た。

「お兄ちゃんをよろしくね。馬鹿正直で、そのくせナイーブだから。しっかり支えてあげて」

明美は捨て台詞を遺して、宗治の部屋を後にした。明美がいなくなったことで、再び静かな沈黙の時間が訪れるのを遮るように、宗治が声をかける。

「どうしようもない妹でごめん」

「そんなことないですよ。お兄ちゃん想いで、かわいくて羨ましいな。私、一人っ子だから」

「あいつ、口悪いけど俺なんかよりずっとしっかりしててさ。生意気なんだけど、憎めないやつなんだよ」

笑って話す宗治を、雨宮は後ろからそっと抱きしめた。十秒ほどだろうか。その瞬間、時が止まったように緩やかな風が流れていた。雨宮は体から離れると、バッグを取り立ち上がる。

「また明日も来るね。そろそろ慣れてくれなきゃ困るけど」

「なんだ、ばれてたのか。夜も遅いし送ってくよ」

「じゃ今日の授業料」

宗治は財布から二千元を取り出し、雨宮の手の上に乗せた。勉強を教える代わりに、家庭教師代としてお金を払うのが当然のようになっていた。本来五千元は下らないところを、恋人割引で二千元なんだそうだった。雨宮ははにかんで、立ち上がった宗治の腕に自分の腕を回した。

雨宮は自分にはもったいないくらいいい子だ。大切にしたい。出会えたこと自体が奇跡なのだから。きみと同じ道を、同じ速度で歩けることが幸せなんだよ。その気持ちを伝えるには言葉なんていらなかった。ただ近くで同じ息を吸うだけで、通じ合えていると思うているのだから。

RASの一次面接は、まさかの不合格。それなりに自信があっただけに、落胆は大きかった。真実出版と回向舎は、エントリーシート書類選考結果待ち。雨宮や斗真たちがいなければ、がくつと崩れていたかもしれない。独りじゃない。そう思うだけで、気が楽になった。

今日からは、三週連続の新聞社筆記試験週間である。就活に余裕が出てきたこの時期となると、新卒でもスーツではなく私服で筆記試験に臨む人も多い。堅い一般企業とは違い、マスコミ業界の筆記試験では服装は自由だ。宗治も第一弾となるこの慶朝新聞の筆記試験に、半袖のポロシャツとジーンズで風通しのよさを重視した。慶朝新聞の筆記試験は全国紙五紙の中でも難易度が最も難しいとされているだけに、そこにいる誰もが時事問題集などを広げながら歩いている。

全国紙は書類選考がないだけに、受験者数は多い。全国五つの会場で行われているにもかかわらず、この東京会場には二千人以上の受験者で溢れかえっていた。全国紙の筆記試験では、九割の受験生がふるいにかけられて落とされる。マスコミの中でも、新聞社は筆記の比重が特に大きいのだ。とはいえ、宗治にもここまでやってきた自信がある。自分の力を信じるほかない。

試験開始直後張り切って問題用紙を広げると、解ける問題を探してから問題に取り掛かる作戦に出る。今まで頭から順番に解いていく方法で臨んでいたが、それだと躓いて時間がかかった場合せっかくのラッキー問題も逃してしまうことになりかねない。得意な問題を一気に確実に解いていき、その後で苦手と思われる問題に取り掛かった。その作戦も功を奏したのか、全問埋めたところで時間終了。では確実に合格ラインとは言えないのだろうが、問題の難易度が高いということはほかの受験生も解けていないはず。そこは大学受験も就職試験も変わりはない。

新聞社筆記試験第二弾は、滑り止めとして急遽エントリーしてお

いた毎朝新聞社。あくまで慶朝新聞の結果次第で、受けるかどうかを決めるつもりだった。慶朝新聞の筆記落ちの通知を受けて受験を決意する。緑山学園大学のキャンパスで行われる筆記試験の会場には、受付前から受験生の姿が多い。

慶朝新聞の筆記試験が行われた週は、大手筆記試験のゴールデンウィークと呼ばれ、国営放送のMHK、慶朝新聞のライバルである徳売新聞、通信大手の合同通信、経済新聞である月経経済新聞、そして慶朝新聞と五社が同日にぶつけてくる。同じ日に同業他社と採用試験をかぶせるのは、本気度を見るためでもあるらしい。その翌週として組まれている毎朝新聞は、いわば二番手としてそれらに落ちたか滑り止めとして受けに来る受験生が多く集まるのだ。

慶朝新聞に比べて若干スリツ率が多めだろうか。また新卒組よりも社会人経験者と思われる三十近くのつわものも多く見られる。売り上げでは慶朝と徳売に敵わないが、紙面の見易さでは定評を得ている新聞である。問題集ではなく、毎朝新聞を広げて熟読している姿も目立つ。新聞記事が問題に出ることもあるので、それも有効だった。普段慶朝新聞を家で購読している宗治は、企業研究のために何度か読んだ程度。その点では不利だった。

慶朝新聞のときと同様に、わかるところから回答を埋めていく。雑学問題の多い出版社に比べて、新聞社は社会・経済・政治問題がメインだ。そういう点では、勉強しやすいとも言える。犯罪社会学を専攻している宗治にとって社会問題は得意としているが、経済問題は弱い。政治に関しても、犯罪絡み以外は苦手としていた。およそ半分を占める社会問題と雑学問題で、いかに点数を稼げるかが問題となってくる。問題数が慶朝新聞に比べて少なめなので、ちょうど一度見直しをしたところがタイムアップだった。

小論文のテーマは『価値』。文章を書くのを得意としている宗治にとってテーマだけが問題だったが、こちらは完璧と思えるものが書けた。

しかし、その二日後にケータイの着信音が鳴り響くことはなかった。

さすがに二連敗ともなると、焦りが出てくる。後ろで勉強を見ていた雨宮にその不満をぶつけるように、ベッドに押し倒した。雨宮は無理やり嬉しそうな笑顔を作って、宗治の目を見つめる。

「どうしたの？ そんなの草野君らしくないよ」

「うるさい。こんなんじゃない……こんなはずじゃないんだ、俺の力は。なんで社会は俺をちゃんと見てくれない。筆記ができないからって、何だって言うんだ。人柄重視と言いながら、結局は外しか見てないじゃないか」

我慢の限界だった。何もかも我慢して溜め込んできたストレスが爆発したのだ。すべてを社会のせい、他人のせいにして責任転嫁しようとする。そんな自分は最低だなんてことわかっていた。自分でも何をしているんだかわからなくなっており、気づけば目の前にいる雨宮を傷つけようとしていることは。

「……いいよ。草野君の苦しみが少しでも和らぐというのなら」

雨宮の目からは、大粒の涙が零れていた。表情ひとつ変えず、宗治の想いを受け止める彼女に触れるたび、宗治の胸にズキッと痛みが走っていた。まるで餌を貪る野獣のように、宗治は何度も何度も雨宮の身体を求める。何もかも忘れて現実逃避するように。雨宮は寝ている宗治の家族を気遣ったのか、一度も声を漏らすことはなかった。声を殺して、ただ宗治専用の性欲を処理する人形になり続けたのである。

翌日から雨宮は宗治の家に来なくなった。メールの返事もなく、電話に出ることもない。宗治はあの夜の満足感よりも、失望感の方が強くなっていた。溜まっていたストレスこそ解消されたものの、雨宮を失った悲しみで勉強に集中できない。ぽっかり心に穴が開いてしまったかのようだ。自分がしでかした罪の重さを実感している。そんな気持ちのまま、新聞社最後の皆である東経新聞社の筆記試験の日を迎える。

東経新聞は二年前までは国語と作文のみの筆記試験で、全国紙の中

では最も難易度の低いということでは有名だったが、その後一般常識の問題に切り替えてきて、難易度はぐっと上がった。全国紙の中で売り上げも最下位だけに、採用に本腰を入れないと勝ち残れないとも思っただろう。ここは一般紙のほかに経済新聞、スポーツ新聞、競馬新聞、専門紙、さらには出版と幅広い分野に及んでいるのが特徴だ。それだけに試験もユニークな問題が多い。国語がメインだった時代には、十二支を順番に漢字で書け、カップルになった組み合わせを選べなどが出たこともある。

問題用紙を開くと、皮肉にも雨宮と一緒に頑張ってきた分野が多く出ていることに気づき、しとしと涙が零れ落ちてきた。何のためにここにきたのだろう。何のためにここを受けようと思ったのだろう。何のために……。自分を責める言葉ばかりが出てきて、なかなかペンが動かなかった。それでも必死に雨宮とやってきた日々を無駄にしたくないという思いで解いていく。いつものように得意な問題から解いていくことはできず、三分の二を解いたところで、時間終了の合図があった。

小論文のテーマは『涙』。なぜ今このときにこのテーマなんだろう。運命の悪戯というものだろうか。宗治は雨宮との思い出以外浮かばなかった。悲しみは無駄じゃない。乗り越えて大きくなることなんて、たくさんある。ぼくの道はまだ続いていくのだから。

それから二日後、あれだけ無理だと思っていた東経新聞の筆記試験通過と一次面接の連絡が来る。それと同時に、真実出版と回向舎の書類選考落選のお知らせも届いた。持ち駒は残り一。もう後はない。ここを逃せば、新卒として受験できる企業は限りなく少なくなる。しかも往々にして経験者もひっくるめての採用となるために、未経験である新卒は不利な戦いが続く。宗治は雨宮のことを引きずりながらも、ラストチャンス逃すわけにはいかないと気を締めつけた。そんな大事な面接の前日の夜、斗真たちが元氣のない宗治を励まそうと飲み会を開いてくれた。ほのかが言い出したことだそうだ。就活を早々に諦めた浩太の姿も、久しぶりにそこにはある。秋とは言

つても、さんさんと太陽の光が降り注ぐ残暑で、まだ半袖のシャツが似合う季節だ。ほのかは半袖のＴシャツにハーフパンツ、容子はノースリーブにミニスカート、斗真はＹシャツに第三ボタンまで全開でズボンの裾をまくっている。痩せ我慢が好きな浩太は、暑そうにしながら長袖シャツにジーパン。大隈は気分転換に後輩の稽古をつけてきたらしく、一際目立つ柔道着姿で来ていた。

「筆記、通ってよかったじゃんか」

「……ありがとう」

「その様子だと素直に喜べないって感じだな。やっぱり雨宮さんのことか？」

返す言葉が見つからなくて、ただ口を塞いでしまう。あの日のことは宗治から斗真とほのかに話しており、周知の事実となっている。斗真は空気が重くなることは覚悟の上で、あえてその話題に触れたのだ。

「そんなに気にしなくても大丈夫だよ。宗ちゃんにはいざとなれば私がいるじゃん。それにさ、雨宮さんだって集中できない宗ちゃんを気遣って距離を置いたのかもよ。試験が終わる頃にひよこつと久しぶりとか言って出てくるよ、きつと」

「……ほのか」

励ましているんだかよくわからないほのかの明るさに救われた気がした。冗談ぼくもあり、冗談に聞こえない。場の空気をがらつと変える力がほのかにはあった。そこが彼女の魅力なのかもしれない。「まあその話はこのくらいにして乾杯といこうか」

乾杯がされると、宗治たちは日頃の鬱憤を晴らすかのように楽しんだ。内定を得ている斗真、ほのか、容子は来月の内定式で正式に入社を確定させる。大隈もみんながいなくてここで頑張り、二回目の試験の結果待ちだそうだ。浩太はアルバイトをしながらＭＢＡの資格を取り、起業を目指す。冗談で「どこも雇ってくれなかったら僕の会社で雇ってあげる」と言っているくらいなのだから、自信があるのだろう。

「お前はどつするんだ。もし東経新聞が駄目だったら」

「俺は駄目だったらのことなんて今は考えられない。ただやるだけだと思ってる」

「……そっか。でもな、マスコミ以外も考えてみたらどうかかなと思つて」

「何が言いたいんだよ。俺がマスコミに向いていないって？」

「そういうわけじゃないけど」

焦りと不安がネガティブな方向へとシフトしていく。

わかつていた。マスコミ向きじゃないと判断されているって。

わかつていた。自分には向かないかもしれないと思いはじめているって。

わかつていた。やりたいと適性があるは違つて。

だけど自分以外の誰かにそれを言われると、無性に反発してしまう自分がいた。自分にはマスコミの仕事しかないと思いたいだけなのかもしれない。そう思うことで自分を正当化したいだけなのかもしれない。暗くなった窓の外を眺めながら、宗治は一言ごめんの言葉を続けた。

「とにかく明日頑張るよ。自分自身に負けないように」

切り開いた道を閉ざしたくない。ラストチャンスに向けて志を新たにすると、あまり強くないビールをぐいっと一気に飲み干して気合を入れた。みんなと同じようにスタートラインに立ちたい。その一心で。

昨日飲み過ぎたせいか、軽く頭痛がする。二日酔いだろうか。しかし、なぜか気分だけは明るい。なぜだかいけそうな気がした。面接の二十分前に到着した宗治は、面接の質問を想定して作成した受け答えのメモを熟読し暗記したことを確認すると、東経新聞本社ビルの近くにある自販機で水分補給して暇を潰していた。ケータイには、次々とみんなからの応援メールが届く。

斗真『負けるなよ』

容子『頑張つてね』

大熊『己を信じる』

浩太『君が選んだ道なのだから後悔するな』

ほのか『宗ちゃんはやればできる子だよ』

宗治はひとつひとつにほっこり笑みを浮かべ、胸が熱くなった。開始十分を切った頃、自分に喝を入れて正面入り口から面接会場へ向かう。

待合室で待っている間は、いつもながら緊張感が漂う。喉がかれてしまわないように何度も生唾をぐくつと飲み込んで意味のない発声音を上げる。掌にはズボンの裾が湿るくらいの汗で、べとべとになっているのがわかる。さっきまでの余裕はなくなりつつあった。今にも何もかも捨てて、ここから逃げ出したい。そんな気分だ。

「失礼します」

番号が呼ばれて面談室に入ると、六人もの面接官の視線が宗治に集中する。面接の場数を踏んできた宗治にとって、面接本番に入ってしまったら緊張を通り越して順応できる適応能力を身につけていた。座ってくださいと合図があると、いつも通りパイプ椅子に浅く腰をかけて胸を張る。

志望動機、自己PR、記者の仕事のイメージ、何を担当したいか、趣味、学生時代に頑張ったこと、休日の過ごし方、最近感動や関心を持ったこと。一次面接ということもあり、当たり障りのない一般的な質問の応答が続く。半分雑談のように和やかな雰囲気のまま、面接は終了した。大きい声でありがとうございましたと言って面談室を出ると、小さく拳を握ってガッツポーズをする。

外に出ると、ざあざあと雨が降っていた。そういえば今日の夕方から台風が接近すると、天気予報でやっていたのを思い出す。幸い常時折り畳み傘を持ち歩いていたので、こんなときでも困らなかった。傘を開いてケータイの電源をオンにした瞬間、着信を確認した。

履歴を見ると、同じ番号から五分置きに六件入っていることに気づく。すぐにかけて直そうとすると、再びその番号からかかってきたので電話に出る。

「やっとながった。……よかった」

「その声は……雨宮さん？」

あまりの動揺に声が裏返ってしまう。そりやそうだ。十日ぶりの彼女の声である。嬉しくないはずがなかった。壊してしまったと思っていたもの。覆水盆に返らずだと思っていた。もしこれが別れ話だったら、わざわざ出るまでコールし続けないう。このまま何も言わずに自然消滅だったところだ。それをしなかったってことは安心していい。面接で張っていた気と雨宮が帰ってきた安堵感で、宗治は一気に力が抜けた。

「ごめんなさい、ずっと連絡できなくて」

「ううん、気にしないで。それよりあのときは俺もどうかしてた。

……ごめん」

沈黙が何かを語っているような気がした。過ぎたことを悔やんでも仕方がない。

「今どこにいます？ 私、傘忘れちゃって」

「わかった、すぐそっち行くよ。待ってて」

偶然にも近くの駅にいた雨宮の元へ、傘を差しながら走り出した。走るのなんて何年ぶりだろう。昔から運動が苦手だった宗治にとつて雨宮はそれほど特別な存在になっている。はあはあと息を切らしながら、雨が横殴りに降りしきる並木道を駆け抜けていった。汗だか滴だかわからないくらいに、スーツは湿ってきている。履き慣れない革靴は底からびしゃびしゃに濡れていて、水溜りに入ろうが入らないうが変わらない有様である。

五分近く走り続けて辿り着いた駅の改札前で、雨宮はにこやかなスマイルを振りまきながらこちらに気づき、手を振っていた。茶色かった髪は真つ黒に戻り、肩より少し下まで伸びて、ゆるいパーマがかかっている。透き通った二の腕が垣間見えるくらい袖をまくっ

たピンクのシャツ。胸元を大きく開けて覗かせる鎖骨が眩しかった。黒いタイトスカートも、雨宮の健康的な美脚にはぴったりだ。

「お久しぶりです。ちょっと見ないうちにまた綺麗になったね」

「久しぶりですね。そんなかしこまらなくても大丈夫ですよ。お世辞なんて今更いらないでしょ」

久しぶりに会う雨宮は、どこか垢抜けたように見えた。ドキドキが止まらない宗治とは対照的に、何か吹っ切れたようである。以前はいかにもお嬢様という雰囲気で引け目を感じていたが、今は親しみやすい女の子のようだ。たった十日で女性はこのも変わることができるのか。自分の知らない空白の時間に、何があったのかわからないことが悔しくてたまらない。

「そうそう、ちゃんと責任は取ってくださいね」

「……責任？」

「そう。この間のことは水に流してあげるから、三万がいいところかな」

雨宮はそうにつこりと、白い歯を剥き出しにした笑顔で言った。

宗治はまた一緒に雨宮と過ごせることが嬉しくて、財布からすぐに三万円を取り出しがっちりと握手で渡すと、雨宮はそのまま宗治に抱きつく。宗治の差していた傘は、路上に転がり落ちる。

「ありがとう。やっぱり草野君大好き」

濡れたスーツに構うことなく身体を寄せる雨宮が健気で、通り過ぎる人々が羨ましそうにする視線がたまらなく快感だった。思えば雨宮が直接的に好きという言葉を口にしたのは、付き合ってから初めてかもしれない。明日、台風が去ったのなら、きっと虹が架かることだろう。二人の愛を照らす七色に輝く橋のように。

世界恐慌

世界恐慌

離れていた十日間のことを、雨宮は一切話そうとはしなかった。宗治から追及しようとは思わない。すべてを知る必要などないのだ。世の中には知らなくていいこともたくさんある。ただ目の前にいるきみが真実ならば、それでいい。信じることができなくなったらおしまいだし、人として悲しいから。

メディアではここにきて百年に一度の世界的大不況に突入したと頻繁に報道されるようになる。マスコミに就職を目指す宗治にとって、関心を持たずにはいられない事実だ。まだ実感は沸かないが、これからますます就職難に突入することになるだろう。ただでさえ窮地に立たされているというのに、これからいったいどうなってしまうのだろうという不安が頭の中によぎった。報道に惑わされない力を大学の四年間で身につけてきたつもりだが、それでも受け止めないわけにはいかなかった。

先日受けた東経新聞の一次面接は無事に通過、二次面接に駒を進めることになる。世間では祝日による連休だが、就活生にとってはそんなの関係なかった。秋採用は十月一日の内定式に間に合わせるために、春以上に過密スケジュールで行われる。一次面接が終了してから僅か三日後に、二次面接が組まれているのだ。そこからさらに三日後に三次面接があり、その三日後に健康診断と最終面接が行われて選考終了となる。一ヶ月かかる春採用に比べて、半分以上の日数ですべてを終わらせるのである。

これは何も新聞社に限ったことではない。新聞広告の求人情報は三分の一以下に激減し、就職サイトは徐々に次の三年生用のサイトに移行しつつある。大学の就職課でも、秋採用の募集はそれほど多くはない。大学生が新卒で内定を勝ち得るのは、圧倒的に春採用の

ほうが多かった。だからといって、既卒になるとより風当たりが強くなる。宗治は自分に負けられないように兩宮とマンツーマンで面接の練習を繰り返しては、本番へのイメージトレーニングをした。

面接当日。この日は午後三時からと余裕があったので、新宿のラーメン屋で斗真とランチをすることになった。新宿御苑に囲まれた道の木々は鮮やかに色を変え、散りゆく葉に彩を添えている。ようやく残暑も落ち着き、冷やかな季節を風が運んできた。秋という季節はどこか儚さと切なさを感じさせ、何とも言えない気持ちにさせてくれる。そんな感情揺さぶられるこの季節が、宗治は一年の中で一番好きだった。

「おう、遅くなってごめんな」

斗真は上二つボタンを外したYシャツとジーンズで颯爽と現れた。いつもどこか余裕がある斗真は、男の宗治から見てもかっこいい。長身で体格もよく頭もいいのだから、理想の男性なのだろう。面接前という大事なときにランチに誘ってきたのは斗真のほうだった。

暖簾をくぐって入ったラーメン屋は、祝日ということもありぎっしり埋まっていたが、十分かそこら待つと二人分の席が空いた。入り口の壁には、主演俳優のサイン入りのミュージカルのポスターが貼ってある。券売機で食券を買う仕組みになっていた。宗治はミネギ、斗真はその店の名物のラーメンを注文する。

「どうなんだ、就活の方は」

「正直言つて厳しいと思う。だけどやるだけやってみなくちゃね」

宗治は必死に作り笑いを浮かべた。自分自身に言い聞かせるようにした強がりかもしれない。斗真が、一瞬見せた宗治の不安な表情を見逃すはずがなかった。

「……そっか。どうあろうとお前が選んだ道だ。俺がとやかく言うつもりはない。けどな、これだけは言わせてくれないか。どんな人にも向き不向きがあって当たり前なんだ。宗治には、ほかの誰にも負けないいいところがたくさんある。お前は気づいてないかもしれないけどな。それを生かして見抜いてくれる企業がきつとあるは

ず」

斗真の言葉に箸を止めて聞き入り、言葉が出なかった。斗真はいつもそのときに欲しい言葉をくれる。強がっていた自分がちっぽけに見えて、涙が流れてきた。涙で湿った麺は海水のようにしょっぱい。「なんだよ、泣くやつがあるか。まあ俺は頑張ってるお前にこれ以上頑張れとは言わない。無理せず自然体で行けとしか言えない。だけど応援してるからな」

「ありがとう」

二人は顔を見つめ合うと、一気にラーメンをすする。晴れた気持ちで食べるラーメンはより一層おいしく感じた。

「ところで斗真、話したいことって？」

「そうだ、まだ言ってなかったな。俺さ、容子にプロポーズしようかと思ってるんだ」

宗治はすすりとすすっていたラーメンを吹き出してむせた。容子といい雰囲気なのは知っていたが、そんなことを考えていたなんて初耳だったからだ。

「大学の卒業式が終わった後式を挙げるつもりだ。お前は思う？」

「……そんな急に言われても」

急な話に宗治は動揺していた。斗真の目は本物だ。この話は初めて他人に話すのだろう。宗治からしてみれば、自分と違って大人で完璧をこなす斗真ですら自分で答えを導き出すことのできない問題を持ちかけられても答えられるはずがない。そう思っていた。

「お前だったらどうだ。お前言ってたよな。戻ってきたとき雨宮さんが変わったって。それに何度かお金で解決したとも。宗治の中にひとつも雨宮さんに対して疑いの念がないって言えるか」

「ちよつと待ってくれよ。なんで俺らの話が出てくるんだ。それとこれとは関係ないだろ」

斗真の目には力が入っていた。まるで猛獣を威嚇しているかのようだ。

「本当にそう思っのか。付き合うつてことは相手を信じられるかどうか、そして自分を信じられるかどうかが一番大事なんだ」

「何が言いたい？ 俺と雨宮さんじゃ、その信頼関係が成り立たないって言いたいのか」

冷静に淡々と話す斗真に尋問されているように、宗治は追い詰められていく。息が上がり頭に血が上る。お互いの想いが交錯したところでお互いがお互いの目を睨み付けるように、初めて二人が見せる表情がそこにあった。

「……やめよう。俺も大人気なかったな、悪かった」

斗真は立ち上がると何も言わずに宗治の肩を叩いて、店を出て行く。なんだか気まずくなつて、宗治はその背中を眺めているほかなかった。

宗治にとって重要だった面接は、会場に着く前から終わっていた。斗真に言われた一言が胸に突き刺さつて、脳裏から離れない。質問に対して感情が剥き出しになり、面接官は言葉を失っていた。当然のことながら翌日、ケータイの着信音が鳴り響くことはなかったのである。

それから二週間後。夏休みが明けたのと同時に、地元の本屋でバイトを始めた。宗治は最近の学生には珍しく大学の勉強が好きだったから、専念するためにアルバイトやサークルといった類のものは一切してこなかった。今回がバイトとはいえ初めての就業体験である。建前上は仕事をする意義を見出すためと言っていたが、本音は気を紛らわせるため。

斗真とはあれからぎくしゃくした関係のまま。雨宮と会うつと、今まで見えてこなかった欠点がどうしても見えてくる。そんな自分に嫌気が差して、就活する気力もなくなるほど自己嫌悪に陥っていた。いつも自問自答し、どうしてこうなってしまったのだろっと思ひ悩む。バイトをしている時間がそのことを唯一忘れられる瞬間だったのだ。

「もう上がっていいですか」

「草野君は時間になるといつもそれだね。君には熱意が感じられないよ。お客様相手に無愛想、返事が適当、仕事を終わらせていないのに上がるうとする。そんなんじゃ君が面接で言っていた社員になるのも当分先だな。やる気がないんじゃどこ行っても通用しないよ」

「……すみませんでした」

五十歳くらいと思われる痩せ型の店長は、タバコをぷかぷか吸いながら宗治の目を見て言うが、宗治の心には届いていなかった。結局は上辺だけの返事。臭いものに蓋をして逃げているだけ。言い訳ばかりが日に日に増していた。宗治にはこれから目指すべき道が曇って見えていなかったのである。そんな気持ちで働いていても、仕事をする楽しさやすることの大切さが見出せるはずがなかった。

「お疲れ様です」

事務所に入ると、笑顔で出てきたのは宗治より半年先にバイトに入ったという河野ひかりだった。小さな書店であるこの金田書店には、更衣室やロッカールームといったものは存在しない。事務所に一人分のスペースがカーテンで仕切られていて、そこにロッカーもあり、男女が共同で着替えるのである。もちろん鍵などないから、女子が使っているとき宗治は必要以上に緊張していた。

「草野先輩は就活終わりました？」

「……いや」

「そっか。今不況不況って大変ですもんね。私も来年就活だから心配で」

まるで人事のように話す河野の無神経さに少しいらっとしながらも、カーテンを閉めて着替えを始める。いまどきのギャルといった印象で、宗治のグループにはいないタイプだ。そして苦手とするタイプでもあった。こういう相手とは適当に口裏を合わせるのが一番いい。

「やっぱりさ、河野さんもどこか狙ってるところはあるの？」

「うーん、アパレルとかアナウンサーとか華やかな職業になれば」

いいなつて。別に失敗してもバイトでつないでればいいし」

「やっぱりだ。こういう人間とは合わない。一生懸命やろうとしない人を見ると、無性に腹が立った。」

「あんな、そんな甘い考えで何とかなるもんじゃないんだ。就職つて。そうやって適当に生きてきたやつが内定もらってる現状が一番腹立つんだよ」

「……何ムキになってんの？ それって単なるひかりへのあてつけじゃん。帰る」

ドアをバタンと強く閉める音がした。何をやっているんだろう。自分の思いを他人にぶつけたって何にもならないのに。これじゃ本当にあてつけだ。自分で自分がかわいそうな独り善がりの世界の中に閉じこもって、酔ってしまっている。どこにぶつけていいかわからない怒りはどこに行くわけでもなく、自分自身に返ってくる。どこにも居場所がない。そんな気がしていた。

夏休みが終わったといっても、授業は卒論ゼミのみ。月に一回、現在の進行状況を教授に伝えてアドバイスをもらうだけだ。正直卒論ゼミは卒論さえちゃんとできれば単位はもらえるし、研究室にならいつ行っても構わないので、出る必要性はあまりない。どうせ最近の犯罪問題を取り上げて、議論して終わりなのだから。まるで教授がレギュラー司会者で、学生たちが番組に招かれたコメンテーターとしてお昼のワイドショーに出ているかのようだ。

そう考えた宗治は斗真と顔を合わせたくないというのもあつて、図書館で資料を参照しながらPCで卒論を書いていた。夏休みが終わるまでに資料についてはすべて集め終わっており、後はまとめて書くだけだったからだ。

「やっぱりここにいたんだ」

PCに向かっている宗治の後ろから現れたのは、ほのかだった。空いていた宗治の隣の席にPCと何冊もの本を置き、LANケーブルにつなげる。秋も深まってきたこの時期に合わせるようにグレーの

Tシャツにジャケットを纏い、ハーフパンツから太もを覗かせた姿は、久しぶりに見た宗治にとってどこか懐かしさを感じさせた。

「何しにきたんだよ」

「何って、そんな言い方ないんじゃない？　一緒に卒論やろうと思ってきたのに」

「そっか、悪かった。邪魔だけはしないでくれよ」

ほのかから目線を逸らすと、再びPCの画面に立ち向かう。今宗治に夢中になれるものはこの卒論を書くことしかないのだ。自分が好きなテーマだから、スラスラ書ける。元から文章を書くことは、宗治にとって嫌いではなかった。誰かに伝えたい思いを文章にすることで、自己実現ができるのだから。

「もうそんなに書けてるんだ。やっぱり宗ちゃんって文才あるよね」
「文才っていうか、雑誌や小説読んでて自然とこういう書き方が身についただけだよ。俺よりうまいやつなんて、五万といるだろうから」

「せっかく褒めてるのに素直じゃないんだから」
「ほっとけ」

昔からお互いを知る二人にとって、隠す必要などなかった。ありのまま、何一つ飾らない自分がそこにいる。だからこそ憎まれ口を叩かれても、本気で怒るようなことはない。これが本当の親友ということなのかもしれない。

「大熊君、受かったんだってね」

「そうみたいだな。本人からメール来たよ」

公務員試験合格。そううれしいお知らせが届いたのは、前日の朝だった。警察官としての第一歩をしっかりと刻んでいる。それは羨ましくもあり、悔しくもあった。

「なんか他人事みたいだね。もつとさあ、ないの？」

「そんなこと言われても、ほのかにおめでとうって言っても仕方ないだろ」

「……それはそうだけど」

ほのかが必死に話をつなげようとしているのは、すぐにわかって
いた。おそらく斗真とけんかしていることを知っているのだろう。
けどどうしてか言葉を選べない。ここに気持ちがないせいだろう
か。冷たくあしらうことしかできない自分が嫌だった。

「宗ちゃんは今うまく笑えてる？　自分が不幸だなんて思っ
てない」
「なんだよ、いきなり」

「人ってね、予想外のことが起こったときに笑うんだって。いつも
当たり前前の生活、当たり前前のことをやっている人は笑えないんだ。
幸せすぎても不幸のどん底でも笑えないのって、そのせいなんだ
って」

にこつと微笑みかけるほのかの顔を見て、自分の胸に聞いてみた。
最近いつ笑っただろうって。自分に余裕がないから、他人に厳しく
あたる。自分に自信がないから、言い訳ばかりで嘘をつく。自分を
知っているようで知らないから、悲劇のヒーローぶって自暴自棄に
なる。ここ最近の自分は、他人からも自分からもそう見えているよ
うに思えて仕方なかった。

「もっと笑おう。しかめっ面は宗ちゃんには似合わないよ。宗ちゃ
んはなんでマスコミにこだわっていたの？　何がしたかったの？
もっとよく考えてみて。諦めなければ答えは出てくるんだから。道
は開けるんだから、ね」

宗治が返したありがとうは、誰よりも優しい笑顔だったに違いな
い。ほのかの言葉がすつと胸に入ってきて、穏やかな心になれた。
何かを諦めないことがどれだけ大切かって、教えられた気がした。
誰の言葉よりも、ほのかの言葉が一番宗治にとってよい薬なのだ。
もう一度自分を見つめ直そう。やり直しはまだ間に合う。負けたく
わじゃない。負けと自分が決めるまで負けなんてないんだ。気がつ
くと、宗治はインターネットでまだ募集している求人情報を探して
いた。

十一月も終わりに近づくにつれ、紅葉も枯れ落ち、風とともにぶ

るつと震えるような寒気を運んでくる季節となる。人々は厚着にマフラーを巻き、本格的な冬の訪れを予感させていた。

宗治は一度だけハローワークにも出向いたが、これといった仕事は見つからない。世間では派遣切りという不況による影響で、打ち切られた派遣社員がこぞって仕事を求めてハローワークにおしかけているという現象が起こっていた。これにより二時間三時間待ちは当たり前で、派遣切り以外の求職者にはただネットサービスを勧めるだけという体たらくな扱いしかできていない。ましてや未経験者や若者を対象にした求人情報など皆無に等しかった。この現状を知り、それ以来ハローワークに出向くこと自体がばかしくなった。

とはいえインターネットや新聞の求人も、この時期となると厳しくなる。就活サイトは軒並み来年度用に移行され、閉鎖されるか求人が極端に減るかのどちらかだ。新聞の求人広告は元々経験者中心の募集のため、新卒募集があつたとしても経験者優遇であつたりして、書類選考の時点で足切りされることも少なくない。そもそも新聞広告はバイト・パートの募集か、マスコミか、派遣か、事務かくらいしか仕事がない。ほぼ経験者中心で回っている派遣社員は、新卒にとつては高い壁なのである。それ以外となると、キャリア・転職採用サイトの中から未経験者OKの求人を探すしかないが、この手の場合未経験者には敷居が高いのが現状なのだ。

面接までこぎつけられる企業はほんの僅か。一戦一戦が勝負だった。大学四年生は新卒として一緒に受けられる場合もあるが、大抵の企業は大学三年生を対象としている。大学受験のときのように、浪人組が有利というわけにはいかないのだ。ただ中途採用枠というのは、筆記試験を行わない場合が多い。さらに面接回数も新卒の三〇四回が平均から、中途の一〇二回が平均とぐつと減少する。そういう点では負担が軽くなつたとも言えた。

テレビのニュースでは、今までも増して派遣切りされた労働者の難民化、さらに自殺にまで追い込まれるケースが後を絶たないと報道されている。メディアには事実を大きくする効果があるだけに、

そのまま受け取ることができないとしても、不況の波が激しいことは確かだった。

「きつと大丈夫」

そう笑顔で言う雨宮の笑顔に、素直に答えられない。斗真に言われてから、疑心暗鬼になっている。本当は信じてあげなければならぬのに、そんな余裕はない。たまにデートに出掛けても、二人の間には温度差が生じていた。それは雨宮自身も感じているのか、ときどき寂しそうな目をして見つめるのがたまらなく痛みを感じていた。いつしか卒論を書くために一緒に作業するほかとの会話が、最大の楽しみになっていく。

十二月の半ばに入った頃、宗治は卒論を完成させた。教授から直しのポイントをアドバイスされ、後は手直しして最終的な完成である。ほぼ同時にほかの人も卒論を完成させ、二人で完成のお祝いを居酒屋で行うことにした。今日はクリスマススイブ。雪は降っていないものの、寒波の影響でかなり冷え込んでいた。

「おめでとう。宗ちゃん頑張ったもんね。でもいいの？ 今日クリスマススイブだね。雨宮さんと一緒に過ごさなくて」

「……実はさ、あんまりうまくいってないんだ。だからクリスマス」の予定とかも全く」

「そうなんだ」

ほのかはほっけをつつきながら、嬉しそうな表情を浮かべている。子どものように無邪気に笑う顔が好きだった。宗治はふと頭の中によぎっていた。思われるのと思うのと、どっちが幸せになれるのだろうか。何かに押しつぶされそうで不安な今だからこそ、確かなものが欲しかった。人は考え方、感じ方次第で、樂園にも地獄にもすることが出来る。今いる大切な場所を樂園にするには、ポジティブな想いが必要なのだ。

「そうそう、斗真君と容子ちゃんが結婚するんだって」

「そっか」

「……あれ、あんまり驚かないんだね？」

宗治は表情に影を落とした。斗真と距離を置くことになった原因。それなのに今はあれほど信じるために反発した雨宮ではなく、ほかと一緒にいる。いったい自分は何がしたいのだろう。何を求めているのだろう。優柔不断な自分に少し嫌気が差した。

「実はさ、前に斗真の口からプロポーズしたいって聞いてたんだ」
「そっか。式は卒業式の三日後だって。宗ちゃんに斗真君からこれ渡すように言われたんだけど」

ほのかはハンドバッグから手紙を取り出す。手渡された手紙の中身を見ると、直筆と思われる便箋と結婚式の招待状が封入されていた。

『宗治へ

なんかこうして改めて文章で伝えるのって照れるな。だけどお前にはちゃんと想いを伝えたいと思って、手紙を書こうと思う。お前言ったよな？ 信頼関係が築かれてないって言いたいのかって。俺思うんだけど、信じるってすごく難しくて、そのくせ簡単に壊れるし、壊せるものなんじゃないかな。ただでさえ嘘や偽善、建前で蔓延ってる世の中で、本当に正しいものなんて自分自身で見極めるしかない。自分のことだってよくわからないのに、他人の気持ちなんてわかるわけないよな。

だから信じるしかないんだ。人は信じられないと誰かを傷つけて、自分を傷つけて、すべてを見失う。どんな人でも人は一人では生きていけない。絆はそう簡単には切れないんだよ。信じたときの力は、ほかの何よりも強いんだ。

お前は今雨宮さんのことを信じているか。俺のことを信じられるか。今でもまだ自分のことが大嫌いなんて嘆いていないか。俺は今でもお前のことを最高のダチだと思っているよ。お前は気づいていないかもしれないけど、俺はいつもお前の持つ優しさに救われてきた。今回のプロポーズだって、お前に言われて迷いが勇氣に変わったんだ。いつもありがとう。

もっと自信持てよ。お前は素直になれば、もっともっとやれる男だ

って信じてる。

長くなったけど、この言葉が伝わることを願って。

追伸　ちゃんと結婚式には両宮さんと一緒に参加しろよ。　円谷斗真[㊦]

手紙は宗治の目から零れる涙で濡れている。意地を張っていた自分が馬鹿らしく見えた。こんなにも自分のことを思ってくれる友達がこんなに近くににいるのに、なぜ信じていることができなかったのだろうか。なぜ自分に嘘をついてまで、自ら壊すようなことをしたのだろうか。

そんな子どもな自分にも、手を差し伸べてくれる。斗真は優しいと言ってくれたけれど、そういう斗真こそ本当の優しさを持っていることも宗治にはちゃんとわかっていた。

「悪いとは思っただけで、読ませてもらったよ。斗真君、いい人だね。なんだか関係ないのにこっちまで感動しちゃった」

「盛大にお祝いしなきゃな。二人のためにも、自分たちのためにも」
宗治は今まで抱えてきた気持ちが一つと一気に晴れ、ビールをぐいぐいと喉に通した。久しぶりに話すほのかのトークは不況や社会問題といった硬い話題からエロトークまで、長い間一緒にいたからこそできるような話。ほのかにしか話せない話もたくさんした。信じていることはとても難しいこと。だけど何かを信じているから、今ここで生きている。越えられない壁なんてない。それは越えようとせず、端から諦めている人の言い訳に過ぎない。本当の幸せを得るために、いくつもの傷や痛みを乗り越えて大人になっていく。奇麗事ではなく、そこにあるものから目を逸らさずに。笑って泣いて過ごせる日々がいつまでも続くようにと。

約二時間語り合った後居酒屋を出ると、外はより一層冷え込み、かすかに雪が降っていた。触れるとすぐなくなるような淡い雪。まるでそれは白いライトのように、彩を添えている。寒がりのほのかに、宗治はそっと自分のマフラーをかけた。道ゆくカップルの多さに赤面しながら、少し離れて先を歩くほのかの背中を追いかける宗治は、

周りから見たらどう見えているのだろうかと想像を膨らませている。
「懐かしいな。宗ちゃんが隣に引越してきたときもこんな雪の日だったよね」

「あの頃は今と違って、よく雪が降ってたイメージがあるな」

「滑って、転んで、よく泣いたよね。そのたびに私が頭を撫でて」

宗治は照れて、酔って紅潮した顔がさらに赤く染まった。手でそのときの様子をジェスチャーしながらほのかは立ち止まり、追いついた宗治の指がほのかの背中に刺さる。その瞬間、ぴくつとほのかの背中が反応した。

「そういうほのかだって、上級生に立ち向かっていって大変だったじゃないか。友達助けに行って、逆に囲まれて」

「そのとき宗ちゃんが助けてくれたんだよね。あれ、ホント嬉しかった。そのとき大きくなったら宗ちゃんのお嫁さんになるって言うて。実はね、私の初恋は宗ちゃんだったんだよ」

宗治は突然の告白にドキツと感じながらも、過去形になっていることに寂しさを覚えていた。自分から終わらせたこと。そんなことはわかっていいる。けどまだ心のどこかで、雨宮と天秤にかけているところがあるのかもしれない。ずるい最低な男だ。ほのかの自分に向けられた笑顔が、胸に突き刺さる。ほのかは後ろを向いて、手振り身振りで出逢った頃の思い出を描いていく。

「またあの頃行った公園に行ってみたいね。砂場でこんなでっかい山作ってたさ」

「なんだ。少しは大人になったと思ってたけど、まだまだほのかもガキだな」

「またそんなこと言って、馬鹿にする宗ちゃんだって子どもじゃん」
むっと膨れっ面でオーバーアクションをすると、突然躓いて後ろにいた女性にぶつかかった。宗治はほのかの手を引いて、立ち上がりざまにほのかは後ろを振り向く。

「すみません、大丈夫でしたか」

「ちよ、何するんだよ」

金髪に豹柄のロングコートを着た女性は、突っかかるようにこつちを見た。その眉間にしわを寄せた顔は、二人の知っている顔。初めて見せる彼女の顔に驚きを隠せず、思わず宗治は名前を口にしてしまった。

「……雨宮さん？」

雨宮もまさかこんな形で会うと思っていたのだから、目を見開き数秒間止まっていた。顔の表情を無理やり変えて違うと否定すると、人ごみの中に走り去っていつてしまった。追いかけるつもりも、もう彼女の姿は見えない。電話してみても電源を切られていてつながらなかった。動揺する宗治の手を握るほのかの気持ちは温かったけれど、どこか罪悪感にかられていたのである。

押し付け

押し付け

電車に乗っている間、宗治とほのかは一言も言葉を交わさなかった。ため息ばかりが増える。ほのかの家の前で別れるときは、お互い苦笑い。微妙な空気のまま家路に着くと、家族が寝静まった家は真つ暗だった。一人部屋に入ってベッドの上で目を瞑っても、頭の中には鮮明にさっき見た雨宮の奇抜な姿が具現化されて、フラッシュバックしてくる。あるとき見た雨宮由紀子は、宗治が知る純粋で真面目なお嬢様ではなく、どこか社会に反抗した不良かぶれしたギヤルだった。自分の知らない姿を目の当たりにして、どうしていいのかわからなかった。受け止める勇気も、拒絶する勇気も、持てそうにない。頭の中がパニックになってその晩、宗治は一睡もする事ができないでいた。

年末に差し掛かってくると、求人がないどころか企業も選考をストップさせ休業に入る。エントリーこそできても、選考に入るのは休暇期間が終わってから。この時期はどの就活生も情報収集とエントリーとエントリーシート作成に時間を費やす。宗治も雨宮のことが頭をよぎりながらも、卒論の最終作業とエントリーを同時にこなしていた。

この時期まで内定が取れないと、留年してもう一年就活を選ぶ者もいる。そうすれば新卒という恩恵をもう一度受けられるからだ。だけど宗治にはそんな選択肢はない。一年分余計に学費がかかる。頑固である父に反対されるのは目に見えているし、何よりそんなことしたら自分自身が許せなかった。たしかに新卒のほう扱いはいいい。新卒という枠から外れると、ほとんどの企業が経験を求めてくる。そんなことはわかっていた。残された最後の望みに賭けるしかないことは。

大晦日。今年も一年の最後の日がやってくる。去年はみんなで神社まで初詣に行き、内定祈願をした。結果願いが叶わなかったのは宗治と、早々に就職することを諦めた浩太の二人だけ。今年もまた一年前に願った事を込めた明治神宮に行く約束を交わしている。この一年何もしてこなかったわけじゃない。どうしてこうなってしまったのだろう。そう思うこともある。だけど今ここに立っている。未来に向かって足踏みしながらも進んでいる。嘆いていてもどうにもならないのだ。ここに行き着くまで随分時間はかかったけれど、もう迷わないと覚悟を決めていた。

今日は両親も妹も出掛けていて一人だ。年内に完成させようと思つてクリスマスが終わってから始めた卒論の推敲も、お昼を回る頃には完成。遅いランチとして母が置いていった昨日の夕食の残りを食べていると、ピンポンとチャイムが鳴った。ドアを開けると、そこには一人の女性が笑顔を振りまいていた。

「お久しぶりです」

宗治はぎこちない返事と苦笑いを返していた。そこに立っていたのは、久しぶりに見る雨宮の姿だったのだから。クリスマスイブのあの日に遭遇した後、音信不通になっていた彼女。金髪だった髪は真っ黒に染まり、黒でまとめた上下にカーディガンを羽織ったいつものファッションに戻っている。あのとき見た雨宮は人違いだったのだろうか。出掛けるまで時間があり、準備をしていなかった宗治はなんだか髭面ボサボサ頭に、スウェット姿の自分が急に恥ずかしくなってしまった。

何事もなかったかのように、雨宮は元気だった。いや、元気があり余り過ぎてはしゃいでいる。初めて来たわけでもないのに、きょろきょろ落ち着かない様子で、階段を上る宗治にペタッとボディタッチをしては連いていく。そんな雨宮の考えがまったくわからない宗治は、ただ口を閉ざしたまま自分の部屋に入った。

「……ですよね。って聞いてます？」

「うん、大丈夫だよ」

「本当に？」

今日の雨宮はいつもより積極的だ。甘えたい、触れ合いたいという思いがひしひしと伝わってくる。とつくに冷めていた感情のはずが、再び湧き上がってくる。離れていた距離が近まってくるのを肌で感じていた。四つんばいになって迫ってくる雨宮の頭を撫でると、まるで猫がじゃれているかのようにスキンシップを取るうとする。そんな雨宮の顔を見るとつい情が移り、気がつく彼女の唇を奪っていた。

「この後みんなと初詣行くんだけど、一緒に行こう」
「はい」

夜も十時を回ると、原宿駅周辺は初詣客でごった返していた。家族連れに、外国人旅行者に、着物を着た女性に、友達同士に、恋人たち……。真冬の凍えるような寒い夜空を凌ぎながら、境内に向かつてゆっくりと森林に覆われた砂利道を歩いていく。途中の休憩所には多くの屋台が並んでいて、そこに斗真たちが片手にビール、片手にたこ焼きを頬張りながら待っていた。

「遅かったな。まさか雨宮さんも一緒だとは思わなかったけど」

「お久しぶりです。これからよろしくお願いしますね」

雨宮は笑顔で宗治と腕を組み、体を寄せた。そのとき一瞬だけほのかに雨宮を睨む視線を感じ取り、宗治は雨宮から離れてほのかのところに寄っていく。

「大丈夫なの。雨宮さん、何か言っただけだった？」

「いや、特に。どうしたんだよ、いきなり」

ほのかは困ったような目をして雨宮の顔をちら見した。高くそびえる鳥居を、物珍しらしそうに撮る外国人の姿が目につく。

「あのときの姿見たら、そりゃ心配するでしょ。宗ちゃん、騙されてるんじゃないかって」

「そんなに心配しなくても大丈夫。俺も最初は不安だった。雨宮さんのこと、信じ切れていなかった。だけど俺は俺の知らない雨宮さ

んより、俺の知ってる雨宮さんのことを信じてるし、好きだ。それでいいんだと思う」

宗治は自分に言い聞かせるように、ほのかの目を見て言った。ほのかの言っていることも十分に理解していた。不安になればなるほど、人は人を信じられなくなる。誰かを羨んだり、妬んだり、嫉妬したりする。ほのかは宗治以上に宗治のことを知っていてくれる。だから否定はできない。宗治にとって、雨宮もほのかも同じくらい大事な人だから。

時刻は十二時まで十分を切っていた。遠くから除夜の鐘がゴーンゴーンと鳴り響く。今朝の天気予報で言っていた通りのすっきりした快晴で、星空が上空にキラキラと舞っている。宗治たちは、今にも新しい年が迫ってこようとする空を見上げた。

「なんだかこうして空を見上げてると、なんて自分はちっぽけなんだろうって思うよな」

「昔の人は、お天道様はどんなことも見ててくれるから頑張らなきゃって思ったそうだよ」

「来年はみんなバラバラになっちゃうんだよね」

「ずっと会えないわけじゃない。心はいつでもつながってる」

「大熊君の言う通り。絆はそんな簡単には切れないよ」

冷たい空気がびゅうつと流れ込んでくる。何度味わっても、年明けの瞬間は特別だ。カウントダウンを待つそわそわ感は、これから何が始まるんだろうとわくわくさせる。年が明けるからといって、何か変わるわけではない。何がおめでたいのかもわからない。数え年が主流だった頃は、元旦が訪れると誰もが平等にひとつ年を取るだけど今はそうではない。それはわかっていても、どこか年明けの瞬間というのは神秘的なおいがするものだ。宗治は空を見ながら涙を流した。そっと雨宮がハンカチを差し出す。

「どうかしましたか」

「……ううん、何でもない。ただ俺もここにいていいんだって肯定されてるのが嬉しくて」

宗治が涙を拭いて笑顔を零すと、時計はちょうど十二時の針を指した。初詣客がざわつき始め、ゆっくりと境内に続く列が動きを見せる。一年前も見えた光景。同じ場所、同じ景色のはずなのに、まったく別の顔を見せるのだから時の流れというのは恐ろしい。一瞬一瞬、今この何年何月何日何時何分何秒という瞬間は今しかなくて、戻って来ないからこそ刻まなければならない。過去を振り返ることよりも、明日を夢見ることよりも、今を大切に生きることこそが本当に大切なことなのだ。宗治が心から願うことは最初から決まっていた。

（今年こそみんなに羽が生えますように……）

この時期にしか見ない芸人たちがすべてを出し切るように、寒い芸を披露する番組ばかりが横行する華やかな正月が終わる。二十歳を迎えた女優が、お酒が飲めるようになって嬉しいとマイクに向かってコメントしている。自分たちも二年前に経験した成人式の映像が、どこか懐かしい。十代の頃は早く大人になりたいと憧れ、いざ大人になると子どもに戻りたいと嘆く。ただ社会という枠組の中で責任という二文字を押し付けられ、重圧がかかる。

大人になるって、どういうことなんだろう。何かを諦め、何かを捨ててこれから先を歩いてゆくことは、本当に大人へ変わっていくことなのだろうか。変わらなきゃいけないものと、守らなきゃいけないもの。その答えはどこにあるのだろう。宗治は時々窓の外を眺めて現実逃避しながら、ふとそんなことを考えていた。

「何考えてるんですか？」

「いや、別に」

「食事できたので、一緒に食べましょう」

宗治がそっけない返事をする、雨宮はさりげなく笑顔を送った。今までにも増して優しく接してくる雨宮の心が読めない。あの日、ほのかと一緒にの場面を目撃するまで、雨宮との仲はたしかに冷め切っていた。宗治は雨宮を信じ切れなかったし、雨宮も距離を置いて

いた。あの場面を目撃したことで、別れるきっかけになると感じたはず。実際それから約一週間、雨宮の姿は見えなくなった。ならばほのかと一緒にいたことを怒っているとも思えないし、むしろ都合がよかったはずだ。女心はわからない。

大学の授業は一月に入って一週間しかない。その後にテスト期間が設けられていて、二月初旬から春休みに入る。卒業式は大抵の大学が三月後半に設けているので、卒業が決まっても丸々二ヶ月は空くのだ。宗治たちも雨宮も無事に卒論を提出し、卒業を確定させた。宗治は今にも雪が降りそうな雨雲の空の下、今日も面接に出掛ける。バイト代のほとんどは、この就職活動費に消えていってしまう。

「今日も頑張ってくださいね。自分を信じれば、きっと大丈夫だから」

雨宮は、通い妻のように毎日宗治の出て行くのを大手を振って送り出すのが日課になっていた。悪い気はしないのだが、その突然媚びるように造られた優しさは、逆に不安を誘う。優しさは求めるものではないし、押し付けるものでもない。どこか自分に何かを求めるように与えられているもののように感じて仕方なかった。

今日の面接は、社員が十人にも満たない小さな編集プロダクション。大手からの下請けでもなく、新聞広告に小さく求人が載っているだけだ。簡単な小論文と校正問題を短い時間で解いた後そのまま説明に入り、その中で質問をしていくだけの簡単な面接。これだけの数の面接をこなしていると、段々といろんなことがわかってくる。温度差、態度、さりげなく遠回しに伝える「厳しい」の声……。それらはすべて面接の最中に気づき、気づいた時点でこちらのテンションも下がり、早く帰りたくなる。

勝つために訪れる求職者と、落とすために粗探しをする面接官とでは、確実に大きな溝がある。その溝が埋まらない限り、内定という勝利の二文字は手に入らないことはわかっていた。

「お帰りなさい。今日は何が食べたい？」

「……今日はいいや、ごめん」

笑顔を振りまく雨宮の顔が眩しくて、まともに見られない。平日の昼間は、宗治たちのほかに誰もいなくて静かだ。階段を上ろうとする宗治を、雨宮は呼び止める。

「大丈夫？ 元気ないけど」

「ほつといてくれ。なんかさ、そういうの鬱陶しいんだよ」

その一言が雨宮を傷つけたことはわかっていた。ものすごい剣幕で怒鳴る宗治に必死で涙をこらえているのが、手に取るようにわかる。ただ固まって宗治を目で追っている雨宮が胸に突き刺さる。面接に疲れて帰ってきた宗治には、雨宮の優しさを受け止める勇気がなくて、鬱陶しいとさえ思えた。人は時に残酷で、醜い。自分で最低だと思っただけでも、過ちを繰り返す。部屋に入ると何もかもが空っぽになって、自分で自分がわからなくなっていた。

だけど雨宮は宗治が思っている以上に強く、自分を好きでいてくれている。その次の日も、また次の日も、いつもと変わらず雨宮は宗治に会いに来た。笑顔を連れてきた。それが逆に宗治には辛かった。応えることができない気持ちには、猜疑心が突き刺さる。罪悪感にかられる。思われる想いに、ぼくは何がしてあげられるだろう。雨宮の笑顔を見るたびに、そんなことを思っていた。

二月に入ると、求人もより一層少なくなった。内定を得られないまま卒業を迎えるのだろうか。不安が頭をよぎる。あれだけ馬鹿にしていた、自分はああはならないと思っていた未来が現実になる。一度フリーターを経験した人がそこから這い上がって上まで上り詰めるのは、ほぼないと言っている。逃したチケットの重みは大きい。だからこそ新卒のうちに必死で活動をするのだ。

それでもどうしても結果が報われない者も出てくる。この不況下においてはなおさらだった。派遣切りが横行し、ハローワークがクビを切られた派遣社員でパンク状態になっていると報道が流れる。新卒者の内定取り消し問題が新聞の一面トップに躍り出る。物が売れない。自殺者の増加。百年に一度と言われる不況の波は、身近な生活の中にも現れていた。

「お疲れ様でした」

「草野君、大丈夫？ 疲れてるみたいだけど」

「いえ、大丈夫です。失礼します」

本屋でのバイトも四ヶ月目となると、慣れもあってやりがいも感じてきた。頭の片隅に、ここに就職するのも悪くないという考えがよぎる。もちろん今のままじゃ無理だということもわかっていて。それは逃げかもしれない。だけどそんな選択肢があってもいいかなと考えるだけで、心が軽くなれたのである。

あれだけ打算でやっていたアルバイトが、いつの間にかストレス発散の場所になるなんて、入った当初は思いも及ばなかったことだ。求人が減り就活が停滞していることで、アルバイトへの依存度が高まったからかもしれない。いつのまにやらなじみ、バイト仲間とも打ち解けるようになっていた。

店を出てケータイを覗くと、一件の着信が入っていた。いつものように雨宮からかと思ひ履歴を見ると、それはほのかからだったことに気づく。大晦日に会って以来メールで少し話していた程度だったのに、急に電話してくるなんてどうしたのだろう。余計なことを考える前に、宗治の親指は通話ボタンをプッシュしていた。

「どうした？ ほのかから電話がくるなんて珍しいからさ」

「……会いたい……」

小さく囁くほのかの声は、泣いているようだった。行かなくちゃいけない。本能的にそう悟った。何の飾り気もないありふれた一言なのに、今までで一番心に引っかかりを覚えたのである。自分に助けを求められているような気がしたのだ。

誰もいない公園のライトの下にあるベンチに、一人ぼつんとほのかは座っていた。俯いた彼女はどこか儚げで、どこか寂しそうだ。こんなほのかを見るのは初めてかもしれない。いつもの明るく元気で、笑い飛ばしているほのかの姿はそこにはなかった。そつと足音を立てずに後ろから近づき、宗治はほのかの首に手を回す。

「彼女、これからお茶しない？」

声色を使つて後ろから近づいた宗治の声に、ほのかの体がびくつと震えて反応したのがわかった。驚きの声を上げると、彼女は後ろを振り返る。いつものほのかなら返ってくるはずの反応がない。ただ潤んだ瞳で宗治の顔を見上げたまま、黙りこく。

「どうしたんだよ、そんな顔して。らしくないぜ」

「……私らしさって何なのかな」

ほのかは何か思いつめたように、じつと宗治の目を凝視して静止した。ほのかに何かあったということは誰にでもわかる。これだけ長く傍にいたのに、悩んでいることを見抜けなかった自分が悔しかった。

「なーんて嘘。びっくりした？」

「なんだよ、人が心配してやれば調子に乗りやがって」

「ごめん。でもね、ちよつと凹んでたのはホント。実を言うと、内定取り消されちゃったんだ」

ほのかは、何か開き直ったかのような平然とした笑顔で言う。

「そんな……大丈夫なのか」

「全然平気。むしろ何度も何度も電話越しに謝られて、こっちが申し訳なくなっちゃったもん。新卒で社会人って夢はダメになっちゃったけど、これからは宗ちゃんと一緒に就活頑張らなくちゃだね」我慢して強がっていることが、うわずった声色から如実に伝わってくる。こんなとき、ぼくはきみに何をしてあげられるだろう。今の宗治には、自分で自分の気持ちが変わらなくなっていた。本当に好きなのは雨宮なのか、ほのかなのか。どちらと同じくらい大切で、かけがえのない人。比べられるわけがなかった。

「なあほのか、ちよつと散歩しないか？」

宗治はほのかの目の前に回り、優しく手を引く。寒がりのほのかのコートの上から自分のマフラーを巻いて。どこか行くあてがあるわけでも、何かしたいわけでもなかった。ただこうして二人で歩きたい。そう思った。二月の夜風は、立春を過ぎても春の訪れを運ぶわけではなく、白い吐息が漏れる。

何年振りだろう。何の目的もなく、二人でこうして人が擦れ違うだけの道を歩くのは。十年前はとくに閉店時間を迎えていたお店の電気が、まだ点いている。何もなかった場所に高層ビルが建っている。どこか懐かしく、どこか温かい。それでいて、変わってしまった街並みに寂しさで憂いでいる。

ほのかの手は雨宮のように精錬されたすべすべなものとはかけ離れていたが、肉厚があり温かい。人の温もりに触れる喜びを感じられる。ほのかはどういう思いで宗治の手を握り返しているのだろう。もう昔のように、ただ一緒に楽しければそれでいいという二人でないことは確かだった。

「見てみて。もうすぐバレンタインデーなんだね」

ショーウィンドウに陳列された、きらびやかなチョコを指差す。ほのかはショーウィンドウの前でしゃがみこみながら、好奇の目を光らせていた。

「思い出すね。私が初めて宗ちゃんに手作りチョコあげたら泣いて喜んで、私の前でバリバリ食べて、鼻血出して。明らかに失敗作で苦いはずなのに、うまいうまいってそのままほっぺにちゅーしちゃって」

「あれ、俺のファーストキスだったんだぜ」

鼻をすすりながら照れ笑い。そこにあるのは誰よりも近い絆そのものだった。十五年もの間同じ時と一緒に過ごしてきたからこそ分かち合える気持ち。思い出せる景色には、いつもお互いの笑顔があった。

「今年も……今年もチョコあげていいのかな。やっぱり雨宮さんに悪いかな」

「そんなこと、気にするなよ。いつも通りアーモンド入りのやつ期待してるよ」

「うん」

ほのかは満面の笑みとともに、大きな声を返していた。一緒にいる人を幸せな気持ちにする力がほのかにはある。不安に思っていたこ

とも、辛くて逃げ出してしまいたいときも、ほのかの笑顔でほつとするのだ。自分を肯定されているように感じる。この場所は失くしてはならない大切な場所だ。

てくてくとゆつくり繁華街を歩いた先に辿り着いたのは、幾重にも重なって立ち並ぶホテル街だった。行き交うカッパルが何かに吸い寄せられたかのように、ラブホテルの中に消えていく。中には同じように間違えて迷い込み引き返す者や、強引に連れ込まれ隙を見て逃げようとする女性もいる。

「……戻ろうか」

振り向いて逆方向に歩き出して数歩すると、ほのかが宗治の手を強く引いて立ち止まった。俯いた顔を宗治が振り返ることと上げると、照れ隠しの笑みを浮かべる。

「帰りたくない。今夜は帰りたくないんだ」

「……帰りたくないって」

ほのかが目で訴えているのがわかった。もちろんほのかが自分のことを好きだということは知っている。けどその想いは振ったあの日に置いてきたものだとばかり思っていた。ましてや今、宗治は雨宮と付き合っている。二人の間にズレが生じてきているとはいえ、それは紛れもない事実だ。

それでももし、今の今まで我慢して気持ちを押し殺していたのだとしたら。いつも自分を頼ってきたのは、恋愛感情がまだあったからだとしたら。何もかもわかったような振りをしてわかっていなかった、ほのかを苦しめてきたのは宗治だったということになる。今の自分にほのかを受け止めていい資格があるのだろうか。いずれにしても雨宮とほのか、どちらを選ぶかここで結論付けなければいけない。でもなぜだか答えはすでに出ていたように思える。気がつくと、宗治はほのかの体をぎゅっと抱きしめていた。

「……後悔はないんだよね？」

「私は宗治と一緒にいい。宗治じゃなきゃダメなんだ」

きみがきみでいられる場所になりたい。宗治の願いはそのただひ

とつだった。十五年以上の間言葉と顔を交わすことで、二人の絆はいつの間にか恋人以上のものになっていた。雨宮には求められなかったお互いが必要とする関係が、ほのかとの間にはある。それだけでほのかを選ぶには十分すぎるほどの理由があった。遠回りしたけれど、本当に大切なものに気づかせてくれるためには必要な時間だったに違いない。

雨宮のように均整の取れた体ではないけど、しなやかさと温かさを感じられるほのかの身体は、波打つように激しく揺れ、快感を与える。もう後戻りできない。幼馴染という関係を超えて、一歩先に進まなければいけないんだ。明日雨宮に別れをどう切り出せばいいだろう。綺麗に別れられるだろうか。目の前に広がる樂園に対してこんなこと考えるのは失礼かもしれないな。宗治はただ目の前のかだけを見るだけのために、唇に唇を重ねて何度も好きと呟いた。

「話って何ですか？」

「……もう終わりにしたいんだ」

毅然とした態度で、宗治はその一言を言い放つ。数秒の沈黙が起こった後、雨宮はその場で泣き崩れた。予想していたこと。宗治の決意は、そんなことくらいで揺らぐことはない。

「どうして？ 私は草野君のこと好きだよ」

「俺には雨宮さんとの未来が想像できない。それだけじゃダメか」

雨宮は宗治の服を掴んで、何度もぽかぽかと胸を叩く。

「別れたくない。もっと一緒に思い出作りたい」

「ごめん、期待には応えられないんだ。雨宮さんにはきつともっと俺よりふさわしい人がいる」

雨宮の涙に何度も負けそうになるのを、必死にこらえていた。女の涙は相手が男なら相当の武器になる。男は誰かの、何かの上に立ちたがる。その自尊心を崩すのに、女の涙は最適なのだ。涙が止むと同時に、雨宮の目つきが鋭くなるのがわかった。

「そんなこと言って、ほかに好きな女ができたんですよね？」

「それで雨宮さんが納得するなら言った方がいいのかな。俺はほのかのことが好きだ。俺が悩んでるとき、落ち込んでいるとき、いつも傍にいて前を向かせてくれたのは、ほのかだった。雨宮さんじゃない。雨宮さんというとき、どこかで不安を感じてたんだ。君を信じ切れなかった。だからほのかを好きってことに気づいたことは事実だけど、それだけがすべてじゃない。わかってくれるよね？」

精一杯の誠意のつもりだった。こんな優柔不断で、悲観的で、何もしてあげられなくて、信じ切るどころか疑いの目まで向けていた自分を好きでいてくれた。それだけで嬉しかった。それだけで幸せだった。そんな彼女を傷つけてはいけない。裏切った最低な人間は自分なのだから。恨むなら恨んでくれたらいい。そんな宗治の心の底から滲み出た優しさだった。雨宮は必死に作り笑いで応えようとする。強い口調で声を荒らげた。

「わかりました。星川さんのこと、大事にしてあげてくださいね。」

私の二の舞にならないように」

「それはもちろん」

雨宮はさつと宗治の目の前に右手を差し出す。それに応え同じように右手を出して握手を交わすと、雨宮は一言「ありがとう」と声を漏らした。

「もう、……もう私たち会わないほうがいいよね？」

「そんなことないよ。俺のほうはいつ会いに来てもらっても大歓迎。もちろん今までみたいに毎日つてのは勘弁してほしいけど」

「ありがとうございます。今は辛くて会えないけど、気持ちの整理がついたらまた遊びに行きますね」

「うん、待ってる」

手を離してお互いに手を振ると、それから先振り返ることはなかった。ただ別々の方向へと歩いていく。これから別々の未来に向かっていく二人。もうお互いが交わることもない。ただ雨宮と出会ったからの十ヶ月間、本当に楽しかった。かけがえのない日々の連続だった。

人はいつか忘れる生き物だ。悔しくて泣いた日々も、楽しくて仕方なかった笑いの絶えない日々も、何事もなかったかのように忘れてしまう。楽しいことばかり覚えていれば、人の痛みがわからない。辛いことばかり覚えていれば、生きる目的を失ってしまう。だから人は、忘れたくなくても忘れなければならない。だけど、だからこそ人は生きるんだ。その先に待っている未来にわくわくしながら。ぼくはこの日を忘れないよう刻み込もうと誓った。止まらない涙をかみ締めることで。

信じたい未来

信じたい未来

次の日の寝起きは最悪だった。最後に見た雨宮の笑顔が脳裏に焼きつき寝付けず、起きたのは正午を回っていた。カーテンを開けると、日差しが照らすように眩しく視界に入ってくる。ボサボサ頭をセツトして慌てて着替えると、ピンポンが鳴った。階段を駆け下りてすぐに玄関を開けると、ピンク色のコートに身を包んだほのかの姿があった。

「遅い。本当なら二時間前には出発できる予定だったのに」

「ごめん。だけど大丈夫、もう迷わないから」

「ホント、宗ちゃんって昔からそういうところ変わらないよね。馬鹿みたいに優しい宗ちゃんだから好きになったんだけど」

その微笑みは見慣れているようで、初めて向けられる笑顔のようだった。今まで何気なくいつも一緒にいて気づかなかったけれど、意識して見てみることで見えてくるものがある。それはお互いに同じだった。宗治が意識する前から、ほのかは恋愛対象として見ていた。ほのかには自分の姿がどう映っていたのだろう。恋人として付き合っていくことで、何度も当たり前だったことを驚くようになっていくのだろうか。雨宮と付き合っていたときにはわからなかったことだ。

今日はバレンタインデー当日。世間は恋人同士愛を育むカップルと、これを機に告白しようと決意する女子と、友達同士絆を深めようと友チョコを渡す女子、そしてただの平日と割り切って見て見ない振りをするモテない男子に分散される。こうしてほのかと手をつないで歩けていることは奇跡なのだ。恋人として初デートとは言っても、今まで二人きりで出掛けることはよくあったせいかな、なんか実感が沸かない。ドキドキよりも安心感が先に来ていた。

「どう、似合う？」

「うん、いいと思うよ」

「ほんとに？ 幼馴染から恋人に変わったからって、遠慮するこ
とないんだからね。宗ちゃんは宗ちゃんです今まで通りなところが好
きなんだから」

ほのかは試着室でファーのついた牛柄のジャケットを着て、くる
りと回ると齒を剥き出しにして目を細め、宗治の目をじっと睨む。
雨宮が草食女子を装ったしたたかな隠れ肉食女子なら、ほのかは純
粋な肉食女子。飾った素振りなど見せず、ガンガン心の中をえぐつ
ていく。そんな気持ちに応えるかのように、相手を奮い立たせるの
が得意なのである。

買い物が終わるといつの間にか日は沈み、薄暗い冬の景色に染ま
っていた。ファミレスの店内は暖房が効きすぎというくらい効いて
いて、頭がボーっとする。上着を脱いでも、汗が体から噴き出して
くる。ほのかは大胆にも胸元を手で掴みながら風を集めていた。

「あつついね。冬ってこと忘れそう」

「こういうのどうにかならないのかな。明らかにエコからは逆をい
ってるよね」

「ホント。夏は夏で凍えるくらい寒いもんね」

ほのかは何か思い出したように、バッグから包装された箱を取り
出した。中からは、香ばしいにおいが漂ってくる。

「はい、これ。今年も頑張って作ったんだよ」

「ありがと。ほのかはチョコだけは得意だからな」

包み紙を破って中を開けると、星型のクッキー上にアーモンドが乗
ったチョコプレートが出てきた。おいしそうに頬張る宗治を、頬
杖をつきながらほのかが見つめている。

「なんか食べづらいな」

「いいのいいの、気にしない」

これだと思った。雨宮にはなくて、ほのかにはある感覚。ほのか
はひとつひとつに反応してくれる。自然体でいられる。そんなほの

かなら、今度こそ信じられると感じた。ほのかも同じように思ってくれているのだろうか。パフェのクリームを口元につけたほのかの表情には、一点の曇りもないように見える。

「ベタかもしれないけど、これからもずっと一緒にいような」

「なにいきなり。あつたり前じゃん」

ふわっとした笑顔で手を握るほのかの手は、温かった。宗治はようやくわかった。本当に欲しかったものは、ドキドキする気持ちでも、ありふれた言葉でもなく、温もりだったのだと。ぼくがいて、きみがいることを実感できること。いつでもそこにあることのように、理想と現実のギャップは大きい。自分が求めたら相手も求めてくる。そんな関係を恋人に求めていたことを改めて思い知ったのである。それは雨宮には求められないものだった。

「これからどうする？」

「うんつとね……ひとつ寄りたいところがあるんだけど」

上着を着て会計を済ますと、ほのかに先導されるがまま連いていく。電車を乗り継ぎ、人ごみを掻き分けて向かった先は、上野公園にある西郷隆盛像の前だった。その隣にはパーカーに身を包んだ斗真と容子の姿もある。やきもちをしまいそうなペアルックが眩しい。「久しぶりだな」

斗真は相変わらずの存在感を示している。結婚も決まり、自信に満ち溢れているからだろうか。どこか余裕すらあるように見えた。がつちりと握手を交わすと、ほのかと口を揃えておめでとの第一声を上げる。

「あと一ヶ月だよな。結婚か」

「俺たちのために、卒業旅行までできなくなっちゃって悪いと思ってるよ」

「そんなこと気にすんなよ。旅行行くより結婚式出る方が記念になるんだし」

斗真と容子は、二人揃って照れを隠すように俯いた。ほのかはそんな二人を下から覗きこむように、パチリと写真を撮る。

「それにしてもお前たちがくつつくとはな。俺はてつきりなんだかんだで雨宮さんとゴールインすると思ってたよ」

「ほのかを選んで本当によかったと思ってる。相性がぴったりだと思ってるから」

ほのかはにやにやして、宗治の腕に抱きついた。間違いは何もない自分が選んだ道に不正解は存在しなくて、本当はそれが自分だけの道なんだ。誰もが迷い、寄り道をする。迷子になったり、立ち止まったりすることもあるだろう。だけど最終的に行かなければならないゴールへと辿り着く。雨宮は間違った道に行かないために用意された立ち看板だったのかもしれない。

「そういえば、なんでほのかはここに俺たちを集めたの」

「決まってるじゃん。私たちの結ばれちゃった&斗真君たちの独身最後の夜記念に写真撮るんだよ」

相変わらず、こういう思い付きでのほのかの行動力には恐れ入る。

ほのか以外の三人にはなぜこの場所なのかが不思議に映ったが、気にしないようににこっと笑いかけていた。ほのかは自分の考えに反対すると、むっとして機嫌悪くなってしまうことをみんな知っていたからだ。

ほのかは目の前にいた若いカップルの女性にカメラを渡し、西郷隆盛像の前に四人でくつついてピースをしてにっこり笑う。ほのかがふざけて宗治の頬にキスをしたところで、シャッターが切られた。

ほのかはごまかすように舌を出してウインクをするので、どうにも怒りようがなくなり、ただただ笑うほかなかった。

何気ない、切り取られた映画のワンシーンのようなバレンタインデーのある一日。ほかにある日常と特別変わったことはないのかもしれない。ただどいつか未来でこの日のことを振り返るときがきたら胸打つことがあるだろう。刻み込まれた今日という日は、もう二度と帰ってこないからこそ輝くんだ。過去に戻れないからこそ、今を一生懸命生きるんだ。青春のページは、何かを失くしてしまった大人のページよりも読み応えがある。がむしゃらに生きること

価値を見出す。そんな青い季節を生きているのだから。

「あつた、あつたよ。早速エントリーだね」

パソコンの就職サイトと睨めっこしながら、おやつのだーナッツを頬張る。新宿に売っているクリスマスピーククリームドーナッツは、いつ食べてもうまい。食感が今までにない感じで、甘いものが苦手な宗治でも食べられる。さすがに行列ができるだけはある味だ。

宗治とほのかの働きたい職種は似ているので、こういうとき二人で仕事を探すのは楽だ。同じ企業で働く必要はないが、本来倍はかかる就活が半分の時間で済む。競争心も生まれて、相乗効果にもなっていた。ここまでくると、仕事へのこだわりは特にならない。絶対やりたくないというのでなければ、働ければそれでいいという感覚になっていた。こうなってくると働く意欲は高いものの、その会社、その仕事にどうしても就きたいという志望動機は薄くなってくる。それだけが、問題といえば問題だった。

企業からの返事も「経験があれば……」「応募者多数のため……」といった回答ばかり。大学四年生のこの時期は新卒と扱わない企業も多く、新卒以外の未経験者には厳しい洗礼を浴びせるのである。企業には、不況の影響で本当に優秀と思える人しか採用する余裕がない。溢れ出した非正規雇用者と正規雇用者との格差は、広がるばかりだ。エントリーできる企業自体が限られてくる。今日も四件エントリーして、すべて面接に呼ばれることのないまま不合格。現実には厳しい。

三月に入り、卒業式もあと二十日と迫ってきた頃、久しぶりに父に呼び出された。ここ数ヶ月、家族と就活についての話をした記憶がない。聞かれると、「またその話か」とうんざりして、結論をはぐらかせていたからだ。活動状況も今の活動方法も知らない父にとっては、ただ遊んでいるようにしか見えていないのだろう。面接の頻度が減った、家にほのかが毎日のように出入りしている、気分転換に遊びに出掛けている、出掛けるのはバイトと遊びくらい。そん

な状態を外から見れば、怠けていると思われても仕方がなかった。もう十分以上正座で眉間にしわを寄せて、宗治を睨んだまま動こうともしない。

いつものように、明美と母が隙間から覗き見ている。足を崩して何度も痺れそうなのをほぐしながら、下から父の目を見て目が合った瞬間、ようやく父の重い口が開いた。

「最近どうなんだ、就職活動の方は？」

「まあぼちぼちやってるよ」

自分でも目が泳いでいるのがわかった。早くこの場をやり過ごしたい。その思いだけが先走っていた。

「ちゃんと仕事は探してるのか。ちゃんと働いてもらわなきゃ困るぞ。これじゃ何のために大学まで行かせたのか。職種にこだわりすぎなんじゃないのか。毎回毎回同じじゃダメなんだぞ。少しは学習しないと。遊んでばかりじゃダメだ。これからは社会に出るんだから、しっかりやっていつてもらわないと」

「……うるさい。お父さんは何もわかってない」

自分の中で、何かがぶつんと切れた音がした。突発的に発言したその一言は父も驚いたようで、面食らった顔をしている。宗治は頭の中が真っ白になり、感情的な言葉を続けてしまう。

「お父さんは、ただ体裁を気にしてるだけなんだ。だからそんなことが言えるんだ。俺が遊んでるだけ？ 何も知らないくせに適当なこと言うな。もっと言い方ってもんがあるだろ」

「……それは悪かった。お父さんもそんなつもりじゃ。お前自身が一番不安だっことはわかってるつもりだ」

父の言葉が耳に入ってこない。立ち上がってすごい剣幕で怒鳴りたてた宗治は、鬱憤を晴らすかのように息を切らしていた。数秒して我に返ると、とんでもないことをやらかしてしまったと罪悪感にかられて、自分の部屋に駆け込んでしまった。父の言うことはわかっている。わかっているけど辛いんだ。自分の努力が無駄だったような気がして。自分を否定されることがこんなに怖いことだなんて、

生まれて初めて思い知った。その日の夜、宗治は泣きながらほのかに電話した。一緒に暮らそうと。

「いいところあってよかったね。にしても家賃とかは大丈夫なの？」
「バイト代が少したまってるから、それが尽きる前に仕事探さないとね」

「なんか今日の宗ちゃんはポジティブだね」

ほのかは茶化すように、宗治の脇腹に腕を捻じ込む。これから自立していこうという気持ち、態度を大きくさせていた。都心から少し離れた吉祥寺のアパートでの二人暮らし。新しい一歩が始まるうとしている。それが嬉しくてたまらなかった。隣を歩くほのかの横顔を見るだけで、幸せな気分になれる。きみがくれた感情は尊いものであり、愛しいものである。

まだ肌寒さが残る三月のこの時期に、アイスクリームはダメージが大きい。それでも体が欲してしまうのだから不思議なものだ。ほのかの口の周りにはカラフルで、ピエロのようなアイスの広がりを見せている。拭いてあげると、無邪気な子どものように笑う顔が宗治はたまらなく好きだった。

「一年前には、こんな風になるなんて思いもしなかったよな」

「普通に就職先が決まって、みんな揃って笑顔で卒業する。そんな未来しか浮かんではなかったよね」

「きつと後悔のない人生なんて、存在しないんだと思う。どの道を選んでも、できたこととできなかったことがあって当たり前なんだよ。だけど自分で選んだ道だから、否定も言い訳もできない。ならそこに笑顔があるかどうかじゃないかな。よく同じ後悔ならやっつて後悔する方がいいって言うけど、そういうことなんじゃないかと思う」

宗治は自分とほのかを説得するように諭した。幸せを掴み取るには、いくつもの痛みを乗り越えなければならない。何の努力もなしに幸せは訪れないし、幸せとは自分自身が決めること。頑張ってい

るか頑張つてないかは自分で決めることで、そういう意味では頑張つていない人なんていないのだ。そもそも人の目に届くところで努力する人など、ごく僅かだろう。自分が知らないだけなのに人を馬鹿にするようなことはしてはいけなないと、いつも心の底から肝に銘じていた。

将来のこと、他愛もない趣味の話、卒業のこと、大学の仲間のこと……。二人でいると話が尽きない。いつの間にか日が暮れ、薄暗さと肌寒さを感じる時間になって店を出ると、宗治のケータイが音を立てた。雨宮からの着信だった。別れてから一度も連絡がなかったのに、今になってなぜ。動揺している間に着信が切れたと思ったら、今度はメールが送られてきた。『大事な話があるから今から会えませんか？』と。宗治は冷や汗を垂らしながら、ほのかの顔を見て首をかしげた。

「ずっと連絡なかったんだよね？」

「いつでも会いにきていいよって言ったけど」

ほのかは俯いて、何か考えるように数秒の沈黙を保った。顔を上げたかと思ったら、歯茎を剥き出しにして笑う。目が笑っていないことくらい、宗治にもわかっていた。

「行つてきなよ。うだうだ迷つてよりその方がすっきりするでしょ」

「いいのか。ほのかはそれで」

「私は宗ちゃんのこと信じてるから。恋愛つて、お互いがお互いを信じられなくなったら終わりだから。いつだか宗ちゃんも言つてたでしょ？」

「強いんだな、ほのかは。だけど、無理だけはしないでほしい。少なくとも俺の前では」

ほのかが涙ぐむのをこらえているのを見て、宗治は優しく頭を撫でる。ほのかが人前で弱さを見せるのが苦手なのはわかっていた。今ほのかがどんな気持ちなのかも手に取るようにわかる。以心伝心、心は通じ合っている。不思議とそんな自信に満ち溢れていた。何を

根拠にそう思うのかはわからない。ただ信じているからこそ、確信があつたのである。

宗治は、雨宮が待つていという中野まで急いだ。平日の夕方、帰宅途中のサラリーマンとともに揺られながら電車を降りる。思えば、中野駅に降り立つのは初めてかもしれない。少なくとも自分の記憶の中には存在しなかった。新宿から徒歩でも行ける距離なのに人通りは少なく、どこか都会から切り離された断片という感じがする。広がるのはマンションと飲食店をはじめとする、小さな商店が立ち並ぶ街。大きな道路に二分され、複雑な構造を見せる。そんな町並みに気を取られていると、宗治を発見した雨宮がいきなり横から腕をタッチした。

「お久しぶりです。すみません、急に呼び出してしまつて」

「ううん、嬉しかったよ」

少し太つたように見える。長かつた髪もばつさり短くなつている。純白のワンピースに身を包んだ雨宮には、以前よりも丸みと柔らかさを帯びたように感じる。女性は少し見ないうちに変わる生き物だ。たつた一ヶ月ほど見なくなつただけで、これほど印象が変わるのだから。雨宮は何か言いたげに、もじもじして顔を赤らめている。宗治は気を遣つて、「どうした？」と声をかけた。

「大事な話があるつて言つてたけど、俺にできることがあつたら何でも言つて」

雨宮は目線を逸らし、ためらいを見せているようだった。お腹を触りながら目線を下に移すと、声にならない声で囁く。繰り返し二回目に聞こえた言葉には、耳を疑つた。宗治は思わず驚嘆の声を漏らしてしまう。

「本当なのか、妊娠つて……」

「はい、今五ヶ月つて言われて」

五ヶ月前、宗治には思い当たる節があつた。就職活動に疲れて、雨宮を傷つけたあの夜だ。あの日の宗治は我を忘れて、避妊など考え

もしなかった。ただ快樂だけを求めていた。あの日一夜だけの過ちが、まさかこんなことになるなんて。じわじわと罪悪感に襲われ、口から出た言葉は「本当に俺の子か」。雨宮は申し訳なさそうにうなずき、訴えるような目で宗治を見つめる。

「本当になんて謝ったらいいのか。いや、謝ったって許されるわけないよな。俺が責任を取るしか……」

「ちよつと待つてください。私はそういうことを言いに来たんじゃなくて」

雨宮はいつになく声を荒らげて、自分の言い分を告げようとする。宗治の頭の中には、たくさんの「？」の文字が浮かんでいた。雨宮は左手の肘を右手で掴みながら、俯き加減に話を切り出す。

「……堕ろしたいんです。私には産んで育てる自信なんてないから」「本当にそれでいいの？ 後悔しないって言える」

「それは……。私思うんです、この子は産んじやいけないんだって。草野君と私はもう終わったんだから。両親の愛情が注がれずに生まれてきた子どもは、迷惑なんじゃないかって」

雨宮は無理やり笑顔を作っていた。無理をしているのがはつきりとわかる。迷惑をかけないように、自分の気持ちを押し殺しているのだと。宗治は自分でも一番正しい答えなのかわからず迷っていた。頭の中に、たびたびほのかの顔がちらついている。

「草野君には絶対迷惑かけません。星川さんとの関係を育んでいつてほしいと思う。だけど、一つだけお願いがあるんです。中絶費用を払ってくださいませんか？ 二十万でいいんです。中絶できるのがあと一週間しかないらしくて……」

雨宮は潤んだ瞳で、宗治に訴えかけてくる。こんな純粋な目で見つめられたら、断れる男などいないだろう。何より雨宮に責任はない自分が悪いのだ。自分自身に負けて本能を剥き出しにした、あのときの自分が。宗治は考えさせてほしいとだけ雨宮に伝えて、その場を離れて歩く間、ただ俯いてこれから先どういう決断をすることがベストなのかをひたすら考えるほかなかった。

誰より優しく

誰より優しく

「それで、俺のところに来たってわけか」

「ごめん、斗真しか相談できる人いなくて……」

「本当だよ。こっちは結婚式の準備で忙しいってのに」

そうは言いながらも好意的に笑顔で応えてくれる斗真が、宗治は大好きだった。平日のおやつどきのファミレスはがらがらで、学校帰りの女子高生のグループがたまに来店するくらいだった。こういう話は、たとえ見ず知らずの他人にも、あまり聞かれていい気分のものではない。

「お前自身はどう思ってるんだ」

「俺は……俺はほのかを大事にすると決めた。ほのかのことが好きだから、あいつを守ってやりたい。だけど、雨宮さんにしたことこの責任を取らなくちゃいけないとも思ってる。正直どうしたらいいか自分でもわからないんだ」

宗治は頭を抱えて、悲痛の声を言葉にする。天秤にかけてもどちらにも振り切れない、二人に対する気持ち。一度は完全にほのかに傾いていた。ここに来て一度犯した過ちの清算を求められるなんて思いもよらなかったのだから。斗真は呆れたように、ため息をついて言葉をかけた。

「めんどくせえな。お前にとって、本当に大切なのはなんなんだ。体裁か。二人ともにいい顔してる偽善か。そんなもん、お前が一番嫌ってたことだろ？ 何が正しくて、何が間違ってるかなんて、本当はないんだよ。自分が選んだことがすべて正しくて、過ちでもある。要は自分がどう考えるかってことなんだよな」

「……俺にとって大切なもの」

宗治の脳裏には雨宮とほのか、二人の顔が浮かんでいた。いくつ

もの思い出がフラツシュバックしてくる。辛いとき、悲しいとき、いつも傍にはほのかがいて、手を差し伸べてくれた。楽しいとき、嬉しいとき、いつも傍にはほのかがいて、一緒に笑ってくれた。ほのかが悲しむ顔は見たくないと言った。本当に大切なものはいつもそこにあつて、気づかない。零しちゃいけないもの、斗真の言葉で見えてきた。そんな気がした。

「人ってな、簡単に分かり合えないものなんだって思うよ。その人にとっては目の前で見せてくれてる姿がすべてなんであつて、本当はその人のほんの一部分しか見てないのかもしれない。だけど、それがその人の性格なんだって思い込んでしまう。たまたま優しい一面を見ただけでその人を優しい人だと思うし、たまたま悪乗りして嫌なイメージを与えたら、その人は苦手と感じてしまうかもしれない。本当は逆なのかもしれないのにな。だから宗治もいつまでも自分に自信がない顔してつと、星川に不安を与えてしまうよ。もつと堂々としなきゃ」

斗真の話はどこか抽象的で、哲学的だけど、真に迫っている。だから説得力があつた。宗治にいつもそのとき必要な言葉をくれる。気持ち奮い立たせる薬のようなものだ。

「とにかく星川に相談しろ。お前は何でも一人で抱え込んでしまうところがあるからな。話してくれることで、星川も嬉しいはずだから」

「ありがとう。やっぱり斗真は頼りになるね」

「あつたりまえだろ。何年お前のお守りやつてると思ってるんだよ」この日初めての笑い声が二人の間にこだました。善は急げと、宗治はすぐさまほのかに呼び出しのメールを送った。ほのかの返信は一分もたたないうちに了解とだけ。宗治の心にもうさっきまでの迷いは消え、穏やかな気持ちが残っていたのである。

「それでね、派遣の仕事なんだけど私にも宗ちゃんにも合つてると思うんだ。一緒に登録会行かない？」

「……うん、そうだね」

「どうしたの。あんまり嬉しそうじゃないね。考え込んでるみたいだし。そういえば話ってなあに？」

プリントアウトされた求人広告が、二人の目の前に広げられている。アパレルの販売スタッフ大量募集という派遣社員のネット募集広告だ。新卒可と書いてある。時給千円。悪くない条件だった。しかし、宗治の頭の中にあつたのは別のひとつの言葉だけである。

「あのさ、心して聞いてほしいんだ」

宗治がすごんだ顔をしているのを見て、ほのかの頭にはクエッションマークが飛び交うように首をかしげている。宗治はほのかと目を合わせるのが辛くて、何度もぱちぱちと瞬きを繰り返した。宗治は雨宮と付き合っていた日々のことを順を追って事細かに伝えた。あのときの感情、あのときの風景、あのときの状況がわかるように。ほのかはただ真顔でうなずくだけ。じつと話し終わるのを待っているように、言葉を挟まず相槌を打っている。そして最後の言葉に辿り着く。

「妊娠したらいいんだ。それで中絶費用を払ってくれって」

ほのかの表情は一気に曇った。いつもは弱みを見せないほのかも、不安をかき消せない様子だ。今にも涙が零れ落ちそうである。うるうるした瞳を見ると、つられそうになる。宗治は構わずほのかの体を抱きしめた。

「悪いのは俺だ。ホントごめん。ほのかは我慢する必要なんてないんだよ」

その一言に、張り詰めていた想いが一気に溢れ出したのかほのかは徐々に嗚咽を伴いながら涙を流していく。およそ十分もの間、宗治の胸の中でわんわんと泣き続けると、けろっとしたように涙を拭いて宗治の目を見て言う。

「……別れよう、私たち。雨宮さんもきつと待ってるよ。お金がほしいって言うってるけど、ホントは産みたいんだと思うよ。好きな人との子だもん。宗ちゃんと私に気を遣ってるなら、私はそんな優し

さは受け取れないな」

一番聞きたくない答えだった。想像できないわけではなかった。だけど、どこかで期待していた。ほのかがそれでも自分を選んでくれることを。待っていてくれることを。信じていたかった。信じさせてほしかった。それはほのかのことが本当に好きだったから。

「俺は……ほのかのことが好きだ。我慢する必要なんてないって言うておいて矛盾するかもしれないけど、これからもずっとほのかと一緒にいたい。それだけじゃダメなのか？」

ほのかはにっこりと笑って、宗治にでこぴんをした。力はこもっていないけど、そこに心がある気がして、どこかちくつと痛みを感じる。

「ありがと。私も宗ちゃんのこととは好きだよ。でも、だからなのか。今は一緒にいちや駄目なんじゃないかって思うんだ。宗ちゃんって誰にでも優しいから、きっと私にも雨宮さんにも涙を流させたくないって考えてるんじゃないかな。だけどね、いざっていつときどちらかを選ばなきゃいけないときってあると思う。それが今だと思うんだ。だから……」

ほのかの瞳には、大粒の涙が枯れることも知らず溢れていた。僅かに露出した肌が、涙で潤っている。我慢していた想いが一気に溢れ出して、こちらまで涙を誘われそうになった。

「今まで楽しかったよ。一緒に宗ちゃんと過ごせたこと、ずっとずっと幸せだった。恋人じゃなくなっても、私は宗ちゃんの一歩の理解者で、友達だと思ってるから。でも今日のところはバイバイだね」涙でくちやくちやになりながら宗治に向けられた笑顔は、とても爽やかだった。宗治にはこれ以上引き止める理由がなかった。受け入れるほかなかった。ここで何を言っても変わらない気がしたからだ。言葉が出ないとはこういうことを言うのだろう。ただひとつだけ願えるのは、目の前にいるきみが幸せになってくれること。それだけだった。犯した過ち許されるならば、きみを傷つけないためにこの選択しかなかったように思う。「今までありがと」と別れ際に言

うことだけが、宗治にできる精一杯の優しさだったのである。

どこをどう通ってきたのかもわからない。ほのかと別れた後、気がつくと新宿の歌舞伎町に来ていた。夜の歌舞伎町は多くの会社帰りのサラリーマンがはびこっていて、悲しみに暮れている暇を与えてくれない。なんとなく勧誘された居酒屋に一人入ると、勢いに任せるまま、大して強くもないアルコールをぐいぐいと一気飲みしていく。二時間は飲み続けただろうか。歩様もぐらつくほど泥酔した宗治は、壁伝いに這いながら店を出た。角を曲がった人気のないところで、気持ち悪くなり吐き出す。しばらくしゃがみこんで体調を整えていると、近くで罵声が聞こえてきた。

「ふざけんな、まだ金ができてねえってどういうことだよ」

「だから、しょうがないでしょ。私だって頑張ってるんだから」

女性の方はどこかで聞いたことのある声だった。金髪に黒いキヤミソール姿で、すらっとした体型。酔いで目がかすんで僅かしか見えなかったが、その姿には見覚えがあった。いつも見る姿とは雰囲気が変わっていても、宗治にはほぼ確信があった。「……雨宮さん？」そう呟いた直後に、驚いた顔をして女性がちらつと宗治の顔を見た瞬間、男はいきなり女性に向かって殴りかかっていた。一発、二発、三発……。血みどろになっていく雨宮を放っておけなかった宗治は、気がつくとも男の目の前に立ちはだかつて雨宮を庇っていた。「なんだ、てめえは。知り合いか？」

雨宮は首を横に振った。それと同時に、宗治に目で逃げてと合図しているようだった。宗治には、二人の問題がどうなっているのかわからない。けれど、ここは逃げちゃいけないような気がした。女性に暴力を振るう男。それが誰であろうと敵であることに変わりはない。ましてや暴力を振るわれた女性は、自分にとっても大事な人。それは偽善なんかじゃなく、宗治自身にも無関係ではいられない相手である。

「雨宮さんに指一本触れてみる。俺はあんたを許さない」

「傑作だな。お前と由紀子がどういう関係かは知らないが、この女がどんなやつだか知ってるのか？ 男騙してお金巻き上げる詐欺師それがこいつの本当の顔。……そっか、お前も由紀子に騙された口か。かわいそうに」

男は見下した口調で、けらけら笑い声を発している。自分自身の悪口よりも、自分の大切なものの悪口のほうが胸糞悪い。宗治はタシ力を切っていた。

「でたらめなこと言うな。どんな理由があるにしろ、女に暴力を振るような最低な男に、他人をとやかく言う資格なんてない」

怒りに任せて男をぎよろつと睨みつけると、男は宗治の脇腹に蹴りを二発入れた。その重たい痛みは飲みすぎたお酒を逆流させて、汚物が外に吐き出される。後ろに隠れている雨宮は泣き崩れ、一言「ごめん」と呟く。

「草野君、ごめん。今言ってること、本当なんだ。目の前にいる男は、私の彼氏。彼に言われて仕方なく、草野君からもお金をもらったり盗ったりして渡してた。妊娠したっていうのも真っ赤な嘘。そうすることでしか男の暴力から逃れることができなかったから」

「そういうことだよ。まあ由紀子が俺にぞっこんだったってことだ。わかったらさっさとどいて女をこっちに渡しな。それともこの女に本気で惚れちまったのか？ かわいそうに」

負け犬を嘲笑うかのように宗治を見下す男に対して、力の限りの体当たりをしていた。男は一瞬のけぞったが、力のない宗治のパワーでは対抗できるはずもなく、逆に殴り返されてしまう。地面に叩きつけられた宗治は、雨宮に逃げてとだけ告げて、男を再び睨み返す。

「度胸だけはあるみたいだな。泣いて詫びてももう遅いぜ」
雨宮が視界から消えるまでの間、宗治はただ殴られ続けた。何度も何度も必死に歯を食いしばりながら。意識が朦朧としてくる。何のために戦っているのだらう。何のために守ろうとしているのだらう。自分でもわからなかった。自分の存在価値がわからなくなっていた。

ほのかに振られ、就活もうまくいかず、雨宮には結果的に裏切られた。何のためにこれから生きていけばいいのだろう。殴られるたびに未来が見えなくなっていた。そして、気がつくとも目の前が真っ暗になり、孤独な闘いが終わったことを告げる朝が来た。

「一体どうなつてんだよ。宗治はな、人を信じることで生きてきたようなやつなんだよ。それを……」

手術室の前でベンチに座って、斗真は雨宮を責めた。誰を責めようとも、どうしようもないことはわかっている。だけど、誰かのせいになければこの怒りが収まりそうにもなかった。

「ごめんなさい。私が……私がこんなこと……」

雨宮が泣き崩れていると、走って駆けつけた宗治の両親が雨宮を睨んで、いきなりビンタをかました。

「斗真君から電話で全部聞いたよ。雨宮さんと言ったな。本当に取り返しのつかないことをしてくれた。このことは裁判で訴えようと思ってる」

「……そんな」

宗治の父は、さも当然という顔をして、するどい眼光で見つめた。「君に拒否する権利はないだろう？ でもこれだけは言わせてくれ。今回のことは嘘を見抜けなかった息子も、そして息子にひどいことを言った私も悪いと思っている。あいつの気持ちを理解しようと思わず、頭から否定したらそりゃあ怒るよな。私もまだまだ子どもだったというわけだ」

宗治の父は、優しい顔で肩を落とした。雨宮とその彼氏が有罪なら、自分も同罪。潔く自分の非を認めることは難しい。頑固親父にどこか引っ掛かりがあったとすれば、自分自身の未熟さだったのかもしれない。

「こうしちゃいられねえ。俺、星川探してくるよ」

「え……でもほのかは草野君には会わない方がいいって自分から」

「今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ。あいつにとって、宗

治にとって、今一番必要なのは星川なんだ。無理やりにもここに引っ張ってくる」

斗真は覚悟を決めた顔で病院内を駆け出し、バイクに跨った。友のために、二人のために今できること。やらなければ後悔してしまう。必死に生きようと頑張っている宗治のためにも。

何度電話を掛けても、メールをしても、連絡が取れない。心当たりがある場所を徹底的に探すしか方法はなかった。友達だ、仲間だなんて思っている、いざ探そうと思うと意外と見つからないものだ。

「何かないのか……何か……」

斗真は今までのことを思い出していた。宗治やほのかと一緒にいたあのかげがえない日々を。宗治はなんだかんだでいつもほのかを気遣っていた。ほのかのことを逐一斗真に語ってくれた。ほのかはほのかで、ずっと宗治に片思いだった。いつも宗治を助け、大切に思っていた。

こんな二人ならば、二人の思い出の場所を目指すはず。斗真は今まで二人から聞いていた思い出話を振り返り、答えが見えた。それは、とある公園。案の定、ほのかは公園のブランコに揺られながら、一人寂しくたそがれていた。

「星川、探したんだぞ」

ほのかははっと気づいて、ブランコから降りて近づいてくる。

「ここ、宗ちゃんと子どもの頃いつも遊んでた思い出の場所なんだ。いつか一緒に来ようねって約束してた。……不思議だね。本当に大切なものは簡単に掌から零れ落ちてしまうのに、どうでもいいものはいくらでも手に入る。大好きなのに手放さなきゃいけないのってどうしてなんだろうね」

ほのかは焦点の合わない状態で、笑って見せた。その笑顔からは、涙が滴り落ちている。かなり無理している様子は、斗真にも自然と伝わってくる。子どものはしゃぎまわる声が空回りして、楽しかつ

た思い出を汚そうとしている。

「星川、今宗治が危ないんだ。一緒に病院まで来てほしい」

「宗ちゃんか？ でも……」

「何迷ってるんだよ。宗治が、あいつが本当に好きなのはお前だけなんだ。あいつの傍にはお前がいないと駄目なんだよ。このままだと、ホントに生きる希望を失くして旅だっちまう」

斗真はほのかの肩をがしっと掴んで、訴えかける。ほのかは無言で頷き、斗真のバイクの後部座席に跨った。宗治が無事であることを祈りながら。

長い長い夢を見た。どこか懐かしい緑に囲まれた公園で、小さな男の子と女の子が砂場でつかい山を作っている。泥だらけになって、それでも楽しそうに笑って、日が暮れるまで走り回っている。日も落ちて暗くなると、母親と思わしき女性が女の子を連れて、バイバイ。男の子は毎日この瞬間が訪れるのを嫌い、本来は五分で行ける道のりを三十分かけて帰った。いつも二人でいる時間だけが自分でいられる場所だった。

やがて夏がやってきて、秋が過ぎ、冬を越えて、再び春がやってくる。その繰り返しの中で、男の子はすすくと成長していく。バレンタインデーには、いつもその女の子からのチョコをもらった。アーモンド入りのチョコレートは彼女の気持ちを食べているようでどこか恥ずかしく、甘酸っぱい味がした。本当は気づいていたのかもしれない。彼女の気持ちに。だけど、見ない振りをして歳月は過ぎていく。

「宗ちゃん、私がいなくちゃ何もできないんだから」

ほのかの表現はどこか不器用で、だからこそ宗治には素直になれなかった。馬鹿にされているような、見下されているような、悔しい気持ちだけがこみ上げてきたのである。何度も言われるうちに、見返してやるうという気持ちになった。今思えばほのかに認められたくて、ほのかを守る自分になりたくて、頑張りたかったのかもし

れない。自分自身を否定し、優しさという言い訳に逃げていた。自分自身に打ち勝つことを最初から放棄していた。それが駄目だと気づかせてくれたのも、ほのかだった。

「あなたは、何を信じてここまでできましたか」

翼を広げた顔のない天使が、小さな羽根をつけた宗治に問いかける。天使の隣には純白のドレスに包まれ羽根を生やした雨宮とほのかが、じつと宗治を見つめていた。宗治はどうしたらいいのか、呆然として答えが出ない。ここは、雲の上だ。

「私はずっとずっと宗ちゃんの味方だよ」

「私も本当はあんな彼氏じゃなくて、草野君と一緒にいたいんです」
二人の笑顔が、同時に宗治の心に突き刺さる。答えは最初から出ているはずなのに、言い出せない。選ばなかった方を傷つけないためには、どうしたらいいのだろうか。両方を選ぶことや、どちらも選ばないという選択肢は端からない。誰にでも優しくすることは、いけないことじゃない。だけど、何かを守るために出る嘘の優しさは誰かを傷つける。今までそうした偽善を振りまいてきたのではない。気づかずに誰かを傷つけてきたのではない。誰かのために何もできない自分の未熟さに、強い苛立ちを覚えてきたのではない。宗治が選ぶことに躊躇っていると、天使の顔が斗真の姿に変貌する。

「ホント、お前はめんどくせえな」

斗真はほのかと雨宮の首筋を噛み付いた。すると、みるみるうちに二人の全身は青ざめ、昏睡状態になって倒れこむ。

「二人に何をしたんだ」

「いやよ、お前がいつまでもぐずぐずしてるから荒行事をと思ってな。心配するな、お前が口付けすれば毒は解ける」

宗治はすぐさま二人のところに駆け込み、ほのかの唇に重ねようとすると、斗真が止めに入る。

「待て。もうちょっと考えてからにした方がよくないか。いくらなんでもお前一人に二人分の毒を吸い込むのは無理だ。どちらかを選

ばないとお前の方がやばくなるぞ」

助けられるのは一人だけ。よくありがちな天秤にかけたゲームだった。金の斧・銀の斧にも似た御伽話のようなシチュエーションは、容赦なく宗治の心を揺さぶっていく。その心を落ち着かせるように、宗治の手を握ってきたのはほのかだった。それに続くように、雨宮も宗治に寄り添う。

「私のことは気にしないでいいよ。雨宮さんを助けてあげて」

「うん。ずっと騙してきたのは私の方だから。これは天罰と思って、星川さんを救ってあげてください」

お互いがお互いを譲り合う光景は、奇麗事に映るかもしれない。偽善者に映るかもしれない。だけど、二人が思っていたとおりの清らかな心の持ち主でほっとした。穏やかな気持ちになれた。だからこそ、宗治はこういう選択をしたのかもしれない。誰よりも優しくなれるのなら、自分を犠牲にしてもいい。気がつくと、宗治は二人ともにキスをしていた。いつまでも大切にしたいあなたには、いつまでも笑っていてほしいから。

それでもほのかの傍にいたいと、強く願った。生きたいと願った。真つ暗闇だった視界は次第に明るさを帯び、現実世界に引き戻される。視界に最初に入ってきたのは、もう見慣れているきみの愛くるしい顔だった。

「お帰り、宗ちゃん」

太陽のように輝くほのかの笑顔は、ほかの誰よりも優しく眩しかった。宗治は「ただいま」と言うと、ほのかの顔を抱きしめて、ここにいる幸せを噛み締めた。

ようやくわかったよ。本当の優しさって、目の前の誰かが笑ってくれることなんだ。そこに理由なんて必要ないんだよ。宗治にとっての本当の居場所は、ここにあるのだから。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0442m/>

誰より優しく

2010年10月8日14時28分発行